

— Episode 0 —

(仮題)

裕川
涼

MISSION 1 First Contact

● PHASE 1 宇宙科学研究所・観測室

警報が鳴った。

宇門源蔵は、読んでいた論文を所長室のデスクに置くと、部屋を飛び出し、資料室の向こうの観測室へ駆け込んだ。観測室には誰もいない。上空三万六千キロメートル、静止軌道上の観測衛星からの緊急告げる赤色のLEDだけが、耳障りな警告音とともに点滅していた。宇門は中央のメインスクリーンの電源を入れ、コンソールを手早く操作した。スクリーンが星空を映し出す。両手でダイヤルを回すと、赤い尾を引いて飛ぶ隕石が映った。緊急警報が鳴ったということは、日本国内に落下する可能性があることを意味している。

「全員、大至急観測室へ集まってくれ」

宇門は、マイクに向かって叫んだ。P T Tが自動で入り、声に応じてLEDが点滅する。今夜の当直表では、所員の大井と山田は既に帰宅し、林と佐伯が所内に居ることになっていた。他には、那珂の原子核研究所から出向してきている暮林研究員が、終夜実験の申

請を出して、地下の生物実験室にこもっている。

宇門がもう一度呼びかけようとしたとき、「済みません、隣で計算をしていました」と言いながら佐伯が、続いて林が駆け込んできた。メインスクリーンを見るなり、林が右端のレーダー席に座り、調整を始めた。

直径百メートル、高さ六十メートルの観測ドームの上に展開された直径五十メートルのパラボラアンテナと、鋭い針条のアンテナが、飛行物体の気圏突入を捉えるために向きを変えた。ヘリポートや研究棟上部に貼り付けられたアレイレーダーが上空を走査した。

浮いているものは全てレーダーに引っかかるので、観測の結果と周辺の管制情報の両方が一度にレーダー端末に表示された。空港が装備しているオート（Automated Radar Terminal System）の情報と一致しているが、研究所の端末は、さらに研究所のメインコンピュータを使って、独自のデータ処理が可能なシステムになっていた。民間航空機はトランスポンダで位置情報を発信しているの、まずそれが除外され、表示から次々に消えていく。作戦中の軍用機は、味方機と識別信号不明の国籍不明機の二種類で、こちらはトランスポンダを持っていない。それぞれの速

度ベクトルから、自由落下に近い運動をしていないものともかく航空機と推定して除外され、最後に一つだけ点が残った。

「捕捉できました。データを送ります」

林が言う。佐伯は、左側のコンピュータ席に着き、キーボードを叩き始めた。

「メインコンピュータとのリンク完了。記録を開始します」

宇門は、再びマイクに向かって「暮林君、聞こえるかね。観測室まで来てくれ」と呼びかけた。

宇宙科学研究所 (Institute of Space Sciences) は、宇門源蔵を所長とする民間研究所で、八ヶ岳の蓼科山中の腹に、シラカバ湖をせき止めるダムと一体となつて建設された。天文台兼航空宇宙技術工^{エアロスペース・インダストリー}廠として活動している。旧日本軍が建設途中だった設備を土地ごと買い取って改造したものである。ダムの上に観測ドームといくつかの建物とヘリポートがあるが、それは研究所のごく一部分で、ダム内部の巨大な空間にも設備や実験室や工場があった。

宇門は宇宙人実在説を唱えていたため、学会からは常に異端視されていた。だが、単独で観測用ロケットを打ち上げ、それもほぼ百パーセントの成功率を誇

る宇宙科学研究所の技術は世界でもトップクラスだ。宇宙の説をいくら異端扱いしたとしても、この技術に支えられた観測結果の方を無視することなど到底できないというのが、学会の共通認識であった。その技術を支えているのが、大井、佐伯、林、山田をはじめとする所員達と、技術者達であった。

宇宙は今年四十八歳、ロマンズグレイの髪を短く刈って外科医のようにまとめ、口が隠れる程度の同じ色の髭をたくわえていた。高めの身長と広い肩幅、贅肉のほとんどない体は、学者というより、むしろ現場で働く肉体労働者の頑健さを思わせた。明るいグレイを基調とした機能的なユニフォームが、精悍さをより際立たせていた。優秀な学者であることは、濃い鳶色の瞳が沈着冷静かつ宇宙の彼方まで洞察する深みに満ちていることから見てとれる。

佐伯はコンピュータ担当、腕利きの魔術師^{ウイザード}である。研究所のシステムの構築と運用のほとんどを担当し、必要なプログラムの開発もしていた。ロケットの打ち上げの時にはミッションディレクターを担当している。ちなみに、コンピュータシステムに明るい優秀な技術者のことを業界用語でハッカーと呼ぶが、魔術師^{ウイザード}はそれよりもさらに優れた者に対する呼び名である。

林はリーダーを担当している。研究所のリーダーは、単に飛行物体を発見するというだけではなく、航空機の管制はもちろん、軌道上の衛星までリーダー追尾できるシステムとして作られていた。これを扱う林は、元空軍のパイロットで、研究所に移ってきて数年経った今も、その腕と知識はそのまま空軍の防空司令部^{Defense Command}に行っても即戦力として通用するレベルを維持していた。

暮林は、大学で、微生物学と公衆衛生を専攻し、博士号を取得した。本当は、アメリカの疾病対策センターのような組織で働き、世界中飛び回って新しいウイルスや菌を相手にしたかったのが、あいにく日本にはそこまでの組織は無いし、運悪くポストも無かった。そこで、放射線がウイルスや菌に与える影響を調べるといふことをテーマとして、那珂の原子力研究所にもぐりこむことに成功した。細菌を宇宙に持つていつて宇宙線に晒したらどうなるかといった基礎研究を割り当てられて、それなりにこなしていたが、いかにせん、スペースシャトル計画は事故で遅れまくり、かといって種子島から打ち上げるロケットで頻繁に微生物を宇宙に持つていくこともできずで、どうしたものかとため息をつく日々だった。そんな折、八ヶ岳近くにある宇宙科学研究所が研究員を受け入れている

ことを知って、那珂から出向してきたのだ。

「佐伯君、速度と落下地点は？」

「秒速十八キロメートル。落下地点は……今やっています」

宇門は中央目の前のコンソールで、隕石を補足した衛星データを全て表示させた。これまでの記録と照合したが、彗星でも炭素質のものでもなかった。

「自動警戒管制システムは何をやっている？」

「動きはありません。ICBMではないと判断したのでしょう」

暮林が白衣をなびかせて観測室に入ってきた。眼鏡の上から目にかかる収まりの悪い髪を、細い華奢な手で掻き上げながら、メインスクリーンを見る。

「何事ですか？……つと、これは隕石ですか？」

「そうだ。衛星軌道上で接近をキャッチし、予想落下地点が日本国内だったため自動警戒が鳴ったのだが……」

宇門はスクリーンを見つめたままだ。

「何か気掛かりな点でも？」

暮林が訊いた。専門が違うので、画像だけでは何がどう問題なのか判断がつかないのだ。

「うむ……石質か鉄質かはつきりしないが、直径四十

メートル程度か。これは、下まで届くな」

「そのようです。レーダーで追っていますが、燃え尽きる様子もありません」

林はレーダーから目を離さない。

「このままだとあと三分程度で研究所の裏の山林に落ちてきます」

「何だつて？ そんなに近いのか！ 国防軍に頼んでミサイルで破壊してもらおうわけにはいかないのかね」

「無理です！ もう間に合いません」

佐伯と林が同時に叫んだ。

燃え尽きずにこのサイズの隕石が近くに激突したら、直径一キロメートル以上のクレーターができる。衝突時の振動は、地震でいうなら直下型のマグニチュード七程度にはなる。大気との衝突に絶えられずに空中爆発した場合は、質量にもよるが、小型の原爆並みの爆発になりかねない。さすがにこれでは、原子力発電所を越える構造強度を持つ研究所であつても危ない。しかし、安全な場所に避難する余裕は既になかった。

「研究所のシャッターを全部下ろそう。気休めにしかならんかもしれないが……」

宇門は、コンソールに手を伸ばしてスイッチを押した。リモートで下ろせるシャッターを全て下ろして、

ガラス窓や入り口の防護をする。

「落下予測地点をスクリーンに出します」

メインスクリーンの半分は、付近の地図が表示された。落下地点を示すアイコンは、八ヶ岳エリア、宇門の私有地内である研究所のすぐ裏の山林で点滅している。落下地点を中心とした同心円は、一番内側が予想されるクレーターのサイズ、つまり壊滅的な被害を受ける区域だ。さらに、その外側には、地上の建造物が破壊される区域が地図に重ねて表示されていた。研究所は最も内側の同心円内に入ってしまったている。

「運が良くても、ツングースカを経験することになるかもしれないな。被害をうけるのが我々だけだというのが、せめてもの幸いか……」

最後まであきらめてはならない、と宇門はスクリーンを見つめた。今できることは、せいぜいシャッターを下ろして、多少なりとも破壊を免れる程度のことだけだ。ならば、衝撃の第一波に耐えられたとして……その後被害の程度に応じて何をすべきか、手順を考え始めていた。

「地表到達まで一分」

林が叫ぶ。

「全員、衝撃にそなえるんだ」

暮林も空いている椅子に座って、作りつけのパネ

ルにつかまる。宇門は椅子のひじ掛けを、そうと意識せずに握りしめていた。研究所は頑丈にできているから、多少の衝撃波であれば耐えられるだろう。しかし、落下のできるクレーター内部に位置しているのは、まず研究所裏の湖が無事では済むはずはない。地形そのものが変わってしまうような衝撃に対して、研究所を含むダムをの基底部分が果たしてどこまで耐えられるのか。岩盤ごと吹き飛ばされたのではどうにも手の打ちようがない。

「地表到達」

林が言うのと同時に、ズン、と鈍い衝撃が伝わってきた。観測室が揺れる。だが、それだけだった。研究所周辺を見ている監視カメラは、直前と全く変わらぬ風景を映し出していた。

「おかし、衝撃が少な過ぎる」

宇門は立ち上がり、モニターを切り替えてみたが、いつも通りの光景しか出てこなかった。研究所周辺の光景は、照明に照らされて目視できる範囲で、特に異常はない。宇門はメインスクリーンを見た。落下地点を示す赤い点が地図に表示されていた。研究所が危険区域にあることにも変化はなかった。予測通りにクレーターができていたなら、目の前に何事もなく木が立っているなどあり得ない。

「佐伯君、何が起きたかわかるかね」

「今計算しています。地表に到達するまでレーダーで追尾していたので、速度も大きさも記録しています」

「計算結果をメインスクリーンに出してくれたまえ」

「わかりました」

位置と速度と時間が、緑のディスプレイに赤色で3次元的に描かれていく。その上に、さらに青色のグラフが重なった。衝突の直前に、赤色のグラフと青色のグラフは大きなずれを示していた。

「赤色が落下してきた軌道、青色が自由落下の場合の軌道です。大きさは変わっていませんし、落下の途中で特に崩壊もしていません」

「何と……直前に急減速して衝撃を減らしたというのか。では今のは只の隕石ではないかもしれん」

「ですが、軍用機でもスペースシャトルでも、こんな急激な減速はできませんよ。もしやったら、確実に機体が空中分解してしまうでしょうし。それに……」

キーボードを叩く音が観測室に響く。

「何だね」

「はあ、変な話なんですけど、隕石の質量そのものが変化したと考えないと、観測結果と計算が合わないんです」

「ふむ……」

字門は観測室のドアに向かって歩き出した。

「わかった。ヘリを出してくれ。地上に行くよりも様子がわかるだろう。とにかく落下地点へ急ごう」

● PHASE 2 八ヶ岳エリア・研究所裏

観測室の後ろに百三十メートルの高さでそびえるヘリポートから、林の操縦でタンDEMローターのヘリ、ボーイング・バートルCH-46が飛び立った。昼間であれば紅白の市松模様が派手に目立つこのヘリポートは、中央と先端部分の航空障害灯を一秒に一回点滅させて、強力な白色光でもってその存在を漆黒の山中に示していた。

CH-46は見てくれこそ米海兵隊のシーナイトだが、人里離れた八ヶ岳近郊の山中から飛び立ち、いっどこにやってくるかわからない隕石や宇宙人の調査に向くことができるように大幅な改造がなされていた。ドップラー・レーダー航法装置では足りずに、ADF、INS、TACAN、FLIR（赤外線前方監視装置）、電波高度計等の計器飛行装置に加え、GPSまで搭載するといった具合に、実験機並みにいろいろ追加したため、オリジナルの機種とはコクピットのレイアウトが様変わりしていた。エンジンも換

装して飛行性能を大幅に上げたため、ほとんど別の機種種といってよい程の能力を持つことになった。人員二十六名、担架でなら十五名を一度に輸送できるキャビン内には、担架の数を減らした代わりに隕石試料回収や調査に用いる分析機器一式が積み込まれている。米海兵隊のカーキ色の塗装や空軍のオレンジと白の2色塗装とは異なり、研究所のヘリはイエローに塗装され、中央に鮮やかなオレンジの帯が描かれていた。国内ではこの同型機が救難ヘリや要人輸送ヘリなどに使われ、『しらすぎ』の名で知られている。宇宙科学研究所では、それに倣って『しらすぎ』の学名である『イーグレット』を呼び出し符号にしていた。

左側の副操縦士席に座った宇門は、FLIRとは別の探索用赤外線カメラの映像をモニターに出して地上の様子を見ていた。後方のキャビン内には佐伯と暮林が座って、宇門が見ているのと同じ映像が映し出されたモニターを見ている。

「夜でも飛行性能は昼間とまったく変わらん。しかしこれは一体何だ？」

副操縦士席の風防の前に重ねられたガラス板を見ながら宇門が訊いた。

「ガラスコクピットですよ。このスイッチを入れると、計器の情報が全部表示されます」

計器と数字がグリーンの光を放って浮かび上がった。

「もともと航空機用で、ヘリを飛ばすのには別に無くてもいいんですが、あつた方がいろいろできて面白いので」

「戦闘機じゃないんだから——」

「まあ、趣味で航法関係を徹底改造したんで、そこいらの救助ヘリにも軍用ヘリにも負けない性能になっています。早速役立ったようですね。何なら地形追隨モードにしましょうか」

周辺の地形図が表示され、ヘリの位置を示す輝点が表示された。

「おかげで安心して調査に専念できるが——やはり、下の地形は特に変わっていないようだね」

「つつぎり広範囲にわたつて木が倒れたりしているかと思つたんですが、異常ありませんね」

「おいちよつと待て、これじゃないか？」

宇門がモニター画面を示す。そこには完全に白一色で表示される物体が映し出されていた。

「こちらでも捉えたんで向かつてますが、赤外では判別できませんね。かなり高温のようです」

「下を照らせるかね？」

「ええ」

強力なサーチライトが見慣れた山林を照らし出す。

「ふむ……視野が狭いな。照明弾を積んでいるかね」

「あります」

「落下地点に落とせ」

「了解しました」

林は操縦桿を倒す。ヘリが軽く右に旋回した。

「落下地点です。照明弾を投下します」

二、三秒をおいて、あたりが昼間の光量で照らされ、色合いはともかく広範囲の状況を見ることができた。岩でできた小さな高台に、見慣れない円盤状の物体がある。円盤周囲の木が放射状に倒れているのは、着地の時に衝撃波でなぎ倒したものだろう。

「落ちてきたのはあれか……UFOかもしれん。近くに着陸できそうな場所はあるか？」

「高台の北側に木が生えていないスペースがあります。そこなら大丈夫でしょう」

「よし、着陸させてくれ」

宇門は強力な懐中電灯をリストバンドに付け、高台に回り込むようにして登った。ガイガーカウンターの持った佐伯が後に続いた。北八ヶ岳の十月は、標高千五百メートルを超えると、夜は気温が下がって寒いが、まだ、息が白く見えるほどではなかった。研究所

のユニフォームのまま飛び出してきたので、上着は半袖だ。それでも、体を動かすと寒さを感じなくなってくる。

「スイッチを入れたまままでついてきてくれ」

首だけ振り向いて佐伯に言うと、宇門は倒れている木を乗り越えて、円盤を照らした。大きさは四十メートル程度で、両側に翼のように貼り出した部品がついている。巨大な尾翼がそそり立っており、その根元のあたりに操縦席らしき透明な風防があるのが見えた。円盤の下敷きになった木は黒く焦げて煙が上がっていた。

宇門は、ちら、と右腕のクロノグラフを見た。蛍光塗料がさほど輝いていないことを確認し、放射線のレベルは低いと判断した。

「これはまさしく円盤だ。しかも地球のものとも思えません。操縦席があそこらしいが、熱くてすぐには近寄れないな」

「問題は温度だけのようですね」

ガイガーカウンターの数値は少しだけ上がっているが、放射線防護が必要な程ではない。

「国防軍に一報入れましょうか」

追いついた林が宇門に訊いた。隕石が落下して地上が破壊されたのを、弾道ミサイルによる攻撃と誤認

した結果、核戦争に突入してしまう可能性については、以前から指摘されていた。

「自動警戒管制システムが何もしなかったのなら、隕石だと正しく判断したのだろう。それなら慌てることはない。我々で調査してから決めてもかまわないと思うが」

円盤が国有地に落ちてきたのなら、すぐに報告しておかないと後で問題が起きるかもしれない。が、幸いなことに、円盤はぎりぎりまで宇門が所有している山林のエリアに入っていた。素人なら専門家を呼ぶしかないだろうが、宇門は宇宙から何かが降ってくるのを研究するのが専門の一つだ。こんなときに他のグループに調査を頼んだりしたら、研究能力を疑われてしまう。

宇門は懐中電灯であたりを照らした。円盤の脇にうつぶせに倒れている人影が見えた。

「誰かいるぞ」

夜中にこんな山奥に来ていて、円盤墜落の衝撃を受けるなど運が悪い。ことによったら大けがをしているかもしれない。宇門は急いで駆け寄った。暮林と林が続いた。

「君、しっかりするんだ」

宇門はしゃがみ込み、その人を抱き起こした。仰

向けにして軽く揺さぶってみる。両手と腕が濡れる感触を感じた。怪我をしていて出血がひどいらしい。体格から、若い男性らしいとわかった。追いついた林が脇から懐中電灯で照らした。

宇門が抱き上げた男は、西洋の騎士が使う甲冑のよな形のヘルメットをかぶっていた。顔の前面を覆うバイザーが上がつっていたので、頭や額から流れたらしい赤い血が、目鼻立ちのはつきりした青年の白い顔を汚しているのが見て取れた。ぴったり身に付いたスーツは、ところどころ破れており、血が染み出している。浅く早い呼吸をしていて、宇門の呼びかけにもまったく反応しない。

「所長、ひよつとしてその人、操縦者じゃないですかね」

林は、暗視ビジョンを片手に円盤を見ている。

「尾翼の付け根と顔みたいなのが操縦席らしいんですが、誰もいませんよ」

「そうかもしれない。確かに、この恰好は地球人のものとも思えない。だが顔や体形は地球人と同じだ」

「林さん、ちよつと下がってください」

暮林が、林の腕をつかんで宇門から遠ざけた。乱れた髪に半ば隠れた眼鏡の奥で、神経質そうな目が光る。

「所長、この人を宇宙人だとお考えですか」

「おそろくな。何としても助けて、生きている状態で調査したい」

「それが最優先命令なのはわかりますが、とりあえず僕のやり方に従ってもらえませんか。林さん、ヘリから、佐伯さんと一緒にNBC患者搬送用の器具一式を持ってきてください。ついでに工作用のレーザーガンと使い捨てのNBC防護スーツも。お二人は防護スーツを着ておいてください」

佐伯と林が駆け出していった。

「何をしようというのかね」

「所長とその人を隔離します」

暮林は、林と佐伯が持ってきた装備の中から、防護スーツを取り出して着た。スーツは、頭からつま先まで透明な袋でできていた。顔の全面を被うマスクをつけると、フィルタを通して空気が送り込まれるようになっていた。

暮林は透明な袋に被われたNBC患者搬送用のバッグに、宇門が抱き上げている青年を注意深く入れた。

「研究所のレベル4実験室に運んでから医者をお呼びことになるでしょう。林さん、夜だけどお願ひしますよ。それから所長、すみませんが、あなたも一緒に隔

離するしかなくなりました」

「あ、ああ……そうか」

宇門は、自分の両手と薄いグレーのユニフォームについた赤い血を順に見た。確かに、今触れた青年が地球人ではないのだとしたら、まず最初にすべきことは検疫だろう。

暮林は、防護スーツを宇門に着せて、本来はマスクを付けるはずの顔の部分も、プラスチックのシートで覆ってテープで密閉した。そのかわり、簡易酸素ボンベとフィルタを取り付けて、こちらもテープで固定した。中の空気はフィルタを通してから排出される。宇門はされるままにしていた。

青年を担架にのせて後部ドアからキャビンに運び込んだ後、暮林はレーザーガンを手にとった。最大出力に切り替えると、青年が倒れていたあたりめがけて引き金を引いた。高出力のビームが空気をイオン化し、オゾン特有の生臭い臭いがあたりに漂う。高温に熱せられた地面が焦げて煙を上げた。林が、ライトで青年が倒れていたあたりから順に円盤の操縦席までを照らしていく。暮林は、血の痕らしいものをレーザーガンで順に焼いていった。最後に円盤本体の操縦席付近に狙いをつける。宇門が、ちよつと待て、というのにも構わず引き金をひいた。血液の汚れはき

れいに焼き払われたが、円盤にはなんの変化もない。

「所長、レーザー最大出力でもびくともしませんね」

「おそろしく頑丈にできているようだな」

「円盤の方は落下してくるときに高温になっていたら、表面はきれいだと思えますよ。しばらくこのままでも大丈夫じゃないですか」

「わかった。とりあえず研究所に戻ろう。林君、佐伯君、円盤の温度が下がったら、夜が明ける前までにシートをかぶせて、うまく隠しておいてくれ」

● PHASE 3 宇宙科学研究所・レベル4実験室

宇宙門は、研究所地下のレベル4実験設備の中で、透明なポリカーボネートの仕切り越しに、白い宇宙服のような防護スーツ姿の暮林と向かい合っていた。レベル4実験設備の中でも、最も危険な微生物を閉じこめておくことを想定して準備された一角である。血で汚れたユニフォームは既に焼却処分されていた。宇宙門はクレゾール消毒液のシャワーを浴びたあと、予備のユニフォームに着替えていた。

扉の入り口や、ガラス越しに見える器具のあちこちに、生物災害を警告する、遠心分離器のローターをイメージしたロゴマークのステッカーが貼られている。

既に、隔離された区画にはモニターと簡単なコンソールが運び込まれ、観測室とのリンクが終了していた。

宇宙科学研究所のレベル4施設は、本来の建物の中に、もう一つ部屋が入った構造をしていた。もともと、研究所の建物自体は高度隔離施設として作られていなかったもので、地下の広い空間に後から気密性を保つことができるユニットを運び込んで組み立てたのだ。レベル4とはバイオセーフティレベル4のことだが、P4と呼ばれることもあった。レベルが上がるほど、隔離が高度になる。地球上の細菌はすべてレベル3どまり、狂犬病やエイズウイルスでもレベル3で、レベル4が必要になるのはエボラ出血熱や黄熱病の原因となるウイルス数種類である。研究所にレベル4を作ったのは、宇宙からやってくる病原体対策を想定したためである。

実験室内の空気は、ウイルスを捕捉するフィルターを二度通過した後排出される。部屋は常に隠圧に保たれ、外部への微生物の流出を防いでいる。部屋に入るには、まず、更衣室で、宇宙服のような防護スーツに着替えることになる。スーツ内部は陽圧に保たれ、中にウイルスが侵入しないようになっていて、部屋を出る時は、スーツの上から消毒液のシャワーを浴び

た後、防護服を脱ぎ、さらにシャワーを浴びてから、更衣室で着替えることになる。部屋の実験台は半閉鎖型で前面以外フードに覆われ、やはり内部が隠圧に保たれている。その中に、冷凍庫、冷蔵庫、インキュベータ、顕微鏡、遠心分離器や動物実験用の設備等が備え付けてあった。大型の実験装置の搬入口と材料の搬入口は別々で、いずれも気圧差を保つため、二重ドアとなっている。排出される水やゴミは、何段階かの滅菌処理の後、焼却処分となる。

実験台の設置された部屋の一番禺に、さらに気圧差を保つて隔離する部屋があった。宇門が入っているのはそこである。設備がレベル4対応とはいえ、これまでは比較的安全な——病原性が無いか、あつても既に治療法が確立していて簡単に治る——ものしか扱っていなかったもので、レベル4を想定して使用するのは今回が初めてである。

「で、これからどうすればいいのかね」

「最低二週間ばかりそこに入ってください。研究所の指揮はとれるはずですよ。地球人同士でも血液の接触による感染症には注意が必要ですが、相手が宇宙人となると、何が起きるかわからない。とにかく様子を見るしかありません」

「私自身も今回は実験体の仲間入りということか。ま

あいい、調べる相手はつきりしているなら後はやるだけだ」

宇宙人実在説を唱えたためにこれまでさんざん学会で異端扱いされてきたのだから、今回の円盤と操縦者の確保は立場を逆転するチャンスのはずである。しかし、発見を喜んで浮かれた様子はまったく見えず、宇門の関心は、目の前に現れたものを調べることに集中していた。自分の身の回りのことなどどうでもよく、好奇心が全てに優先する——専門は違えど、暮林もまた同じ資質を持っていたから、宇門の振る舞いを当然のこととして受け止めていた。

「申し訳ありません」

暮林はガラスごしに頭を下げた。強制的に隔離したことと、これから先、宇門自身の調査も必要になったことと、どちらについて謝つたのか、はつきり自覚できなかった。

「いや、謝らんでもいい。不用意に触れた私もうかつだった。だが、あの宇宙人を何とか助けたい。全力を尽くしてほしい」

「わかっています。林さんが医者を呼んできたので、今、上の医務室で検査中です。幸いなことに、隔離したままで、断層像も全部撮影できますから。終わり次第、P4で手術開始です」

「P4でやるのかね？」

「感染症の危険が地球人並みだとわかるまでは、上の医務室を使うわけにはいかないでしょう」

「それはそうだが、医療設備はどうするのかね」

「林さんと佐伯さんに手伝ってもらって、医務室にあつた器具や装置を滅菌作業中です。終わり次第運び込んで、即席の手術室とICUを作ります」

「おおごとだな」

「他に方法がありません。だって、一般の病院に運び込むわけにはいかないでしょう？ それに、微生物を封じ込めるにはこの設備の方が優れていますから」

暮林は、佐伯と林と一緒に機材を運び込んで、P4奥の実験室に設置した。宇門も手伝った。照明の取り付けに多少手間取ったが、LEDを使った軽いものを使ったので特に問題はなかった。とはいえ、もともとと手術室として使うことを想定した設計にはなっていない部屋なので、配線が不格好に床を這っている。床に水を流すこともできないので、手術後は、汚染事故があつた場合と同じ手順で滅菌処理するしかない。「もちろん治療を最優先としますが、可能な限り試料は採取します」

暮林は滅菌済みのサンプル管やシャーレを大量に準備していた。操縦者そのものからの試料採取は行

わない代わりに、手術に伴って出る血液や組織片は可能な限り回収するということである。

「ただ——」

と、暮林は口ごもる。

「何かね？」

「最悪の場合は、この先所長が未知の感染症で倒れる可能性もありますし、所内の殺菌や、このユニットの廃棄もあり得ます。覚悟はしておいてください」

「確かに、宇宙科学研究所が原因の集団感染を引き起こすわけにはいかん」

宇門はマイクを取り上げて、放送区域を所内全域に切り替えた。

「宇門だ。これから生物災害の可能性のある実験を始めることになった。安全に関しては十分注意しているが、万が一事故が発生した場合は、私の代理を佐伯君に頼む。P4実験ユニットの処置及び防護については暮林君の指示に従うこと。以上だ」

軽いノイズを残して放送が切れた。

「君の言う最悪の場合でも、あの操縦者と私の両方から、未知の病原体に関する情報は得られるだろうな。異星人とのコンタクトはこの先もあるだろうから、次のためにも、可能な限りデータをとっておくことだ」

「何に感染したとしても、生き延びてくたされれば、所

長の血清が使えることになります。何も起きないことを祈っています」

「手に負えないと思つたら迷わず外部に応援を頼め、その判断は任せろ——おそらく私が指示を出せる状態ではなくなっているだろうからな」

「軍の細菌学研究所と国立感染症研究所が、最初の報告先になるでしょうね」

インターフォンのブザーが鳴り、これから医者が出に降りるといふ連絡が入った。暮林は、P4への入室方法を指示するために、入り口に向かった。

「今回の患者については、くれぐれも秘密を守つていただきたい」

生物災害防止用の防護スーツで完全武装した姿の囑託医の前にして宇門は言った。

ロケットの組み立てだの打ち上げだのといった、一つ間違えば大事故につながる作業をやっていたから、宇宙科学研究所では救命救急センターあがりの外科医を囑託医として迎えていた。幸いにして、怪我人が出るような事故はこれまでに起きていなかったの、囑託医が存分にその技術を發揮できる初仕事は地球外生命体の多発外傷の緊急手術ということになった。「地球人ではないかもしれない。どうも素性なもの

かわからない以上、はつきりするまで公表したくないのです」

「おつしやる通り、地球人ではないでしょうな。断層撮影画像はいくつかの点でヒトとは異なっている」

通常の手術着を着ることができないため、防護服の上からグリーンのエプロンを着けながら、医者が言った。

「ただ、私が知っているのはヒトに対する治療法でして、宇宙人についてはわかりかねますが、それでもよろしいのですかね？」

「かまいません。引き受けてくださったことに感謝します。ところで、その違いはどの程度ですか？」

「血管の走り方や器官の形は多少違っています、大体の配置はヒトと同じです。生化学的機能まで同じかどうかはわかりません。手術はできると思いますが、その後の管理をどうすればいいのか……」

「とりあえず、普段、ヒトにするのと同じ治療をやってみてください。それで合わなければ仕方がない。必要なものがあれば何でもおつしやつてください。所に頼んで用意させます」

「病院に運ぶわけにも医療スタッフを連れてくるわけにもいかないということですか」

「ええ。騒ぎを大きくするわけにはいかないのです。

少なくとも今の段階では。それに、未知の感染症の危険もあります」

「手術は一人ではできませんから、手伝っていただく必要があります」

「わかりました。私と、その暮林君とで手伝いましょう。しかし、素人が手出しをしてもかまわないのですか？」

「地球人ではないのでしょうか？ それでしたら、医師法に引つかかることはありません。地球外生命体に対する研究であつて、医療行為ではないということになりますから」

操縦者は、挿管され人工心肺レスピレータを付けられて、手術台の上に横たわつていた。外見を見た限りでは、治りかけの傷と比較的新しい傷の両方があることから、長期に渡つて危険で過酷な状況にあつたことが伺えた。

「意識レベルは二〇〇つてあたりですかね。ヴァイタルは——ヒトの基準じゃ判断できないか。持つて行かれても恨まんてくださいよ、宇門先生」

「わかつていますが、こうして改めて見ると、外見はまるで地球人と変わらない……」

天文学者であり宇宙開発の技術者でもある宇門は、手術を間近で見たことは無かつた。ミッシヨンスペ

シャリストとして動物実験の簡単なトレーニングを受けた経験があるだけだった。

既に接触してしまつた後ではあつたが、さらなる感染症の危険を防ぐため、宇門は医者と同じように防護服の上から手術用のエプロンを着けた。防護スーツは約五キロの重さで、動きにくい上に、ひどく暑苦しい。こいつは体力を消耗するな、と思ひながら、さて言われたとおりに手伝いはするが一体どうなるのか、と緊張していたところへ、医者が注射器インジェクションを手にして言つた。

「麻酔はどうでしょうかねえ？ うまい具合に意識不明のようですからこのまま手術という手もありますが、もし、途中で気がついて暴れられても面倒なことになりますし」

「——え？」

あまりに当たり前のことを質問されて、宇門はフード越しにきよとんと医者を見返した。

「そりや当然——」

「それがねえ、今回は当然でもないのですよ。何せこれは地球人用の局所麻酔薬ですからねえ」

「使つても効果が無いかもしれないということですか？」

「それだけならダメ元で使つちまいますかね」

外見が地球人と変わらないといつても、分子レベルで同じである保証はまったくない。麻酔薬は、痛みを伝える神経をブロック——細かく言うとな神経伝達物質の放出に至る生化学反応のどこかをブロックするか、伝達された側のメッセンジャー系の一部をブロックする。これが分子レベルで合わないとな麻酔薬は効かない。さらに、麻酔薬は役目を終えたら分解されて排泄されるが、その過程が地球人と異なっていた場合には、不具合が生じるかもしれない。最悪の場合は、入れた薬剤が意図したのと別の生化学反応を止めたなり、他のタンパク質——そもそもタンパク質と呼べる構造のものであるかどうかすら今のところ定かではないが——に不可逆に結合して機能を止める可能性もあつて、こうなつた場合は地球人用の安全でありふれた局所麻酔薬が致命的な毒として働くことになる。「それほど厄介な状況なのですか？ ガスで全身麻酔というわけにはいかないんですか？」

「そうなるとな今度は呼吸管理が問題になりますなあ。我々には地球人向けの管理方法しかわからないわけです。ま、あれこれ悩んでいても時間を無駄にするだけだし、様子を見ながら試してみますかね。どのみち何をするにしても賭けでしかないです」

医者、ちら、とモニター画面を見やつた。怪我を

している箇所が画像で表示されている。

まず、胸を切開し、肺に突き刺さっていた肋骨を引き抜いて止血する。骨の方を固定後、今度は正中線に沿つて開腹した。宇門は術野を確保するため、医者の指示通りに鉤で筋肉ごと組織を開いていた。

「心臓に一刻しあれば厳しかったでしょうが、さしあたり何とかなりそうですな。手足の方も閉鎖骨折だけですし……宇門先生が血を見て倒れない方で助かりましたよ」

手を休めずに医者は言う。出血を最小限に抑えるように切開と同時に止血し、機能しないほど壊れた組織は取り除き、破れている部分は縫合する。骨折は、ひどい部分は金属を埋め込んでピンで固定し、完全に砕けている場合は骨辺を取り除いて人工骨材料を埋め込んで接着した状態で固定する。地球人と同じように反応してくれば、やがて、接続部分は自前の骨に置き換わるはずであつた。人であろうが動物であろうが宇宙人であろうが、外科的措置の手順そのものにさほどの違いはない。

「もつと難しいことになるのかと思つていました
が……」

「目で見て形がわかる範囲なら何とでもなりますよ。
宇門先生もなかなか器用ですな」

「正直かなり疲れていますよ。こんなことは生まれて初めてだ」

そうは言っても、宇門の体の動きは最初と全く変わらない。

「確かに作業そのものには不慣れなのでしょうが、まだまだやれそうに見えますよ」

「まあ、長時間の作業や徹夜の観測など、しょっちゅうやっています」

手術開始からすでに八時間になろうとしていた。

「問題は、この後の管理ですな。輸血はできないし、どの薬をどれだけ使うかを決めるのに、我々の医学はまるで役に立たない……つと、こんなもんですかね」

「これまでのところは、人間の薬剤を使った場合にそうひどい副作用が起きているようにも見えませんがね」

モニターに張り付いていた暮林が言う。

「あとは、試料サンプルから、できる限りのことを調べてみます」

「お願いしますよ。大まかな構造は我々と似ていても、細かい点で機能はまるで違う。この心電図の波形だけ見ても明らかですな。人間の正常・異常のどの波形にも対応するものがありません。生理学的な値を正常に近づけるように管理すればいいはずなんです

が、今回はそもそも正常値が皆目わからないことが問題なんですよ」

「とにかく、これからのことを話し合わなければなりません。午前中に所員達を集めますから、先生も同席していただけませんか」

「もちろんかまいませんよ。容態の急変に備えて当分医務室で待機していますのでね」

● PHASE 4 宇宙科学研究所・会議室

翌日の午前中に、宇門は、会議室に所員全員を集めた。P4のモニターは会議室につながっており、テレビ会議ができるようになっていた。観測はとりあえずコンピュータにまかせて全員集合せよ、と宇門が指示を出したため、交代ローテーションで観測業務をしているメンバーも全員が着席している。いつもなら宇門が座る席は空席で、そのかわり、資料を表示するスクリーンに、スライドプロジェクトで宇門の上半身が映し出されていた。

手術を手伝って汗まみれになったが着替えの予備が所内になかったので、宇門は、医務室備え付けのアンダーウェアを借りていた。緑の襟なし半袖シャツとズボン姿で、椅子に座って足を組んでいた。TV会

議のシステムを通して現れた見慣れない姿に、所員達が訝しげな顔をした。

「もうわかつていると思うが、緊急に集まってもらったのは、昨夜落ちてきたものをこれからどうするか決めるためだ」

一息いれて宇門は、モニターに写った会議室を見渡した。手術をした医師も着席していることを確認してから続けた。

「念のため説明しておく、昨夜、裏山に円盤が墜落してきた。我々は円盤とその操縦者と思われる宇宙人を、確保した。私はうっかり防護無しに接触したため、しばらくこうやって隔離されることになった。ところで円盤の方はどうしたかね」

「指示通り、夜が明ける前にはシートをかけて完全に隠しました。周囲は念のため立ち入り禁止にしてあります。所長の私有地につき、ということと、隕石調査中のため、というのが理由です」

佐伯が報告した。

「他にかわつたことはあるかね？」

「ありません。実はあのあと、通信を傍受していたのですが、国防軍も国防総省も、防衛体制に変化はありません。コロラドスプリングスの北米防空司令部は、この現象をキャッチしているはずで、弾道ミサイ

ルではなく通常の隕石と判断し、大した被害も無いから、対処の必要は無いと思つていたのでしよう」

「傍受、ねえ……」

いつものことながら、思わず宇門はつぶやいていた。名うてのハッカーの佐伯のいう傍受には、軍の通信網に侵入してこっそりデータをいただいてくることまで含まれているのは言うまでもない。そうであれば、一介の民間研究所が防衛体制のレベルを好きなきに知ることなど無いはずである。

「光子力研究所はどうかね？」

光子力研究所は先代所長のライバルであったDr.ヘルが度々機械獣を差し向けてきたため、マジンガーZとアフロダイAで迎撃していた。臨戦態勢にあるから常時索敵は行っているはずだし、何か異常があった場合には、軍からの情報も集約されていた。

「宇宙科学研究所が機械獣に攻撃されない限り、光子力研究所は動かないでしょう」

「Dr.ヘルの本拠はまだこの地球上にあります。宇宙からやってくる隕石のことはさほど気にしていません」

佐伯に続いて林が補足した。宇門は軽く頷いた。国防軍も、異種族による現実の攻撃への対応に追われて、隕石にかまつている暇などないに違いない。

「隣の野辺山は？」

「特に問い合わせはきていません。あつちは電波天文中心ですし」

「我々には、確保した円盤と宇宙人を調べる時間的余裕があるということだ」

会議室の画面は、傷だらけの全裸の青年の画像を映し出した。

「これが、昨日確保した操縦者だ。外見はほとんど地球人と変わらないようだ」

続いて、断層撮影像から再構築した3次元画像が、ゆっくり回転し、骨格、内臓、筋肉の順に重ねて表示された。とどころどころ形が崩れたり不連続になったりしているのは、怪我をしているからである。

「手術前の検査データを再構成したものですな。見ての通り、構造の方も、大まかには人類と同じです。まあ、細かいところは違っているんで、人類でないことははっきりしています……」

医者が説明した。

「外科的な治療は終わっていますが、免疫系や代謝系が我々とは異なっている可能性があります。薬一つ使うにしても、どういう副作用が出るかわからず、まったく手探りの状態ですな」

「それについては私の方で実験中です」

暮林が手を挙げた。

「手術のときに、血液と組織のサンプルを採取しました。地球人との違いもそのうちはずきりさせることができると思います」

「ところでこれを見てくれ」

今度は、昨夜、発見した直後の操縦者の写真が映し出された。赤と黒を基調としたスーツを着ており、頭には甲冑を思わせるヘルメットをかぶっている。

「研究所に運び込んで手術前の検査をするまでの間にこの姿になった」

青年の姿は、古代のギリシヤかローマを連想させる、ゆつたりした服を着たものになっていた。布はあちこちが破れ、血に染まっている姿が痛々しい。

「いったいどういう仕組みになっているのか見当もつかんだ。自分で着替えられるわけがないから、自然に変化したとしか思えないのだがね。あとの方で着ていた服は、地球上のものともあまり変わらないように、缺て切つて脱がせることができた。いずれにしても、地球上のものでないことは確かなようだ」

会議室の画像は、再び宇宙人の姿に切り替わった。

「私も、宇宙人と同様に隔離されているので、時々様子を見ているのだが、その……眠り続けているようで、こちらから話しかけてもまだ反応はない。もう少

し調べてから……せめて操縦者の意識が戻って、詳しいことがわかってから発表しても遅くはないだろう。それまではこの件について、情報を伏せておきたいのだ」

「所長に賛成です。我々のレーザーガン最大の出力でも、円盤には傷一つつきませんでした。あれが宇宙人の開発したものだとするなら、その操縦者は、我々を超える知的生命体であると考えるべきでしょう」

林が言った。

「私もそう思う。迂闊な扱いはできないと思うのだ」
人類より優れた相手とのファースト・コンタクトかもしれないのだからくれぐれも丁重に行う必要がある、と続けようとして宇門は黙った。人類より優れていない相手なら実験動物扱いでいい、とごく自然に考えていることに気がついたのだ。宇宙に存在する人類以外の生命体に対する敬意をいささか欠いてはいないか？ と少し恥じた。なかなか偏見からは自由になれないものらしい。

宇門はそれをごまかすように軽く咳払いして、モニター越しに会議室を見渡した。反対する者はいなかった。

「では、くれぐれも秘密を外にもらさないでくれたまえ。昨日落ちてきたものについて訊かれたら、ちよっ

と組成のめずらしい隕石だったことにしてくれ。円盤の方はシートで覆ってあるということだが、念のため、調査用のテントで完全に覆って監視カメラを設置、絶対に人を近づけないよう注意するように」

● PHASE 5 宇宙科学研究所・レベル4実験室

医者は毎日一回は診察に訪れ、操縦者の状態と宇門の体調の両方を調べていった。操縦者は相変わらず意識不明が続いていたが容態はそれなりに安定していた。宇門の方も、幸いなこと生物災害バイオハザードの兆候は無かった。

P4に入るには、服を脱ぎ、滅菌シャワーとエアシャワーを通り、防護服をつけるといふ手順で出入りすることになる。物を出し入れするときも同様である。看護士を雇うわけにもいかず、成り行き上、宇門が、操縦者の介抱をするようになった。傷口を消毒し、点滴をとりかえたり、必要な薬の注射をしたり、といったことが主な作業である。医者は、「宇門博士はなかなか器用ですな。ペテランの看護婦だつてなかなかここまで……」と、宇門の手の良さを褒めた。確かに、注射だの点滴だのといった作業に随分手慣れてきてはいたのだが、本来の専門とは著しく違う

ため、宇門は苦笑するしかなかった。

研究所の方はいたって平穩だった。あれから新たに何かが落ちてくることもなかったし、落ちてきたものについて他から詮索されることもなかった。

P4にこもりきりになった暮林の方は多忙を極めていた。治療に必要な生化学データを出さなければならなかったからである。とりあえず手術中に得た組織片や血液をリンゲル液に混ぜて、酸素でインキュベーションした。これでしばらくは生かしておけるので、その間に培養の準備にかかることになった。P4に隔離検疫中の宇門が、作業の一部を手伝った。最初に、血液と骨片と組織をそれぞれソ線滅菌した後、元素分析を行った。

「結果はどうだったかね？」

加圧滅菌装置オートクレーブに細胞培養用の容器をつつこんでハンドルを回しながら宇門が訊く。

「金属元素の組成はかなり地球人に近いです。輸液と栄養剤は地球人用のものを使って大丈夫かと思いません」

各元素がppm表示された一覧表を見ながら暮林が答えた。

出血と骨折から回復させるには、失った組織を作る

ための栄養分を与える必要がある。ヒトの場合は鉄とカルシウムが必須なのだが、宇宙人の場合にそれでいいのか？ というのが最初の問題なのだった。全く違う金属組成が出た場合には、他の成分をそのままにして違っている成分だけ置き換えた輸液を新たに調整することになる。普通に水溶液にしたのでは溶けないような貴金属が混じっていたりしたら、どういう化合物にして与えたらいいのか、頭を抱える羽目になるところだった。

「ただ、面白いことに、生理食塩水濃度が地球人と異なっています。地球人用の生理食塩水を十パーセント希釈したものが等張液になります」

「面白い、とは？」

「もともとの生命誕生のときの条件か、ヒト型に進化するときの途中のどこかの条件がヒトとは異なっているのかもしれませんが。しかし、これは運が良かったのかもしれない」

「運？ どういう意味かね？」

「この間医者にきいたのですが、ヒトの重傷者に対しては、高張電解質輸液を使うと有効だということがわかっていそうなんです。もつとも、ヒトの場合は生理食塩水の〇・九パーセントを倍の濃度の一・八パーセントで使っているのですが。もし、同じような効果

があるとしたら、今回、僕たちは、ヒト用の生理食塩水をそのまま使ったわけですが、たまたま高等張液側に振っていたので、その分だけうまくいったのかもしれません」

「ところでこの大量の培養液はどうするのかね？」

実験ベンチの上には、ガラスの瓶が百本近く並び、それぞれにラベルが貼られていた。

「それも全部滅菌しますよ」

「なぜこんなに必要なのかね？」

「どの条件が合うかわからないからですよ。地球上の生物なら細胞培養の手順など大体わかっているんですが、地球外のものだと条件出しからやるしかないですからね。はつきり言つて通常より一時間以上、余計にかかります」

「他に手伝えることはあるかね？」

「細胞を植えるあたりは職人芸なんでね。いくら、ミッシヨンスペシャリストの訓練を受けたからつて、所長が百発百中成功するようになるには半年かかります。それよりも、ご自身の血液の分析を進めていただけませんか。隣の部屋の分析装置に突つ込むだけです」

隔離が始まってから、宇門は二十四時間ごとに採血されていた。これまでどころ、脈拍、体温に異常は

なく、血液の方も感染症の兆候を示す変化はみられていない。

「私の方は今のところ異常はない。だが、一服できないのが辛い。急いで飛び出したので部屋にパイプを置いてきてしまった」

「P4に限らず実験室全域はそもそも禁煙です」

「飲食も禁止じゃなかったのかね？ 私はここで食事をしているが……」

「こんな所で所長の即身仏（イキミツツ）を作る気はありませんからね。ご不満なら操縦者（オウチウ）と同じように、出られるようになるまで点滴で暮らしてみますか？」

「いや、止めておこう。ところで、操縦者の治療でできそうなことはあるかね？」

「氷でも取り替えてきたらどうです？ とりあえずは、輸液と栄養剤の成分が決まっただけでも状況が良くなったと考えてください。こう言っちゃ何ですが、正直な話、所長が感染症で倒れてくれた方がまだ打つ手があつてマシですよ。少なくとも医学が使えます」

「——ふむ、科学的真実というものは、時として身も蓋もないな」

宇門は笑いながら溜息をついた。

操縦者の方は、手術後、体温が四十度近くにながつていたが、平熱が何度かわからない上に解熱剤が効

く保証もないため、氷枕を使うにとどめていた。さらに、通常なら、感染症が疑われた時点で大量の抗生剤で叩くところだが、どういうアレルギー反応を引き起こすか予想がつかないためそれも見送られ、結局のところ、体力と生命力にまかせるという原始的な治療となっていた。

「とりあえず、有機元素の比から見て、ヒトと同様にアミノ酸も糖も与えて大丈夫そうですね。細胞培養に成功して代謝がわかってくれば、もっと効率よくやれそうですけど」

● PHASE 6 宇宙科学研究所・レベル4実験室

「何か気がかりなことでも？」

暮林に声をかけられて、操縦者を見つめていた宇宙門は振り返った。ここ数日、時間があると、宇宙門は操縦者の傍らで様子を見ていた。操縦者の意識が戻らないので、外見と、いくつかの医療データ以上の情報は得られていなかった。

「この接触が、この先どういう意味を持つのだろうかと思つてね」

「人間型ですかね」

「そうだ。で、我々人間と共通の性質を持つていると

思つかね？」

暮林は、操縦者を観察した。何本ものチューブがつけながら、透明なケースに被われたまま寝かされている操縦者には、目立った変化はみられない。

「動物が捕食者と被食者に分類できることは、所長もご存じですよ」

「知っている」

「捕食者の目は顔の全面にあつて、獲物の位置を把握するのに都合がよい。被食者の目は顔の両側にあつて、捕食者の接近を警戒するようにできている。そして、一般に捕食者の方が被食者より知的だと言われているんですよ」

「では、この操縦者は、我々と同じで、捕食者から進化してきたということかね」

「地球と同じような進化をたどつたのだとすると、そうですね」

「手放しで喜んでばかりもいられんな。人間には知性もあるが、反面、愚かでもある。歴史的に見て、異なる文明が出会つた時、多くは、軍事的に劣勢な側の悲劇で終わつている」

大気圏突入しても壊れなかった円盤の性能を考えると、どうやら今回は、科学技術では圧倒的に地球人類の方が遅れているらしい。となれば、当然、軍事的

にも同じことがいえる。

「我々と共通点があるなら、意思疎通も何とかなるんじゃないですか」

「そうであつてほしいね」

見てくれの形は似ていても、この世界をどう認識するかという点でかけ離れていたら、理解しあうのは不可能だろう。

「なぜ人間型なのでしょうね？」

「生物学者の興味はそこか。どういう答えが欲しいのかね？」

「元素比も分子の構造も、我々が理解不能なほどかけ離れているわけではないですからね。人間型になる必然性がどこかにあるのではないか、と思ったりもします。ただ、『収斂』が起きると、無関係に似たような形をとることもあり得る。所長の専門の方で、この宇宙に本来備わった性質だ、なんて話は出てないんでしょうか？」

「生物の発生を許すというところまでなら宇宙の構造から導けなくもないが、人間型になるかどうかを決めるルールは、今のところ何も無い。地球上の生命の進化をもう一回同じ条件でやったとしても、今の人類が再び現れる保証はどこにもないのだ。それに、宇宙に対して人間原理を求めるのは、あまり健全とはいえない

いな」

無表情になつて、暮林が考え込んだ。既に、目の前の操縦者も宇宙も見えてはいなかった。

「君の考えた通りに進んでかまわないよ。ただ、発表できる目処は全くないから、あまり深入りしないように」

言つてはみたものの、もし同じ事を自分が言われたとしても、調べることを止めないだろうな、と宇宙は思った。

円盤をそのまま外に放置しておくわけにはいかないので、格納場所を確保することが次の問題だった。

宇宙科学研究所の地上部分は、ダムの上にある直径百メートルの丸い観測ドームとシラカバ湖側に続く建物で、前方後円墳のような形をしていた。シラカバ湖側にはヘリポートがそびえていた。ダムといつてもアーチ型のスマートなものではなく、立方体に近い台形型で、厚みは最上部で三百四十メートル、幅も三百メートル近くある。ダム内部は広大な空洞で、上半分は既に設備や実験室となつていた。下半分のうち、ヘリポート下はロケットの組み立てに使つており、観測ドーム下は大規模な風洞実験室である。宇宙科学研究所では、スクラムジェットを搭載した巨大な輸送

機で高々度までロケットブースターを運び上げて、切り離しと同時にロケットに点火して軌道へ投入する計画も進めていた。打ち上げ重量と初速度を稼いでより効率よく軌道へペイロードを上げることが狙ったのだ。ただし、重量物をぶら下げるか背負った状態での亜音速から超音速での飛行となるため、接続の方法と航空機の安定性を検討するために、しばしば風洞実験を行っていた。

宇門は、風洞実験室を一時的に片付けて円盤を格納することに決めた。研究所のコンピュータの主力が第五世代量子コンピュータに移った今、多くの風洞実験は計算機で代用できるが、ロケットの組み立てができなくなつては宇宙開発そのものに直ちに差し障るから、工場の方はそのままにしておかなければならなかった。

円盤を詳細に調べるには、床において足場を組むか、円盤自体を上下させるか、どちらかしかない。どういう仕組みで動いているのか不明だが、推進システムの実験をするのであればダムの下半分のエリアはまるごとそのために使う方がよい。そこで、円盤の方を上下に動かせる状態で格納することにした。

格納場所は二層構造で、一層目は現状のダム最下層のスペースとし、二層目を新たにその下に作る。ダム

内部へは、ダム正面に出入り口を作つて運び込み、円盤は二層目に格納する。エレベータで上下移動させれば、調査用の機材を一層目の床においた状態で実験ができるだろう——というのが、宇門の提示した最初のプランで、これに従つて工事の手順を決めた。

ところが、工事にかかると岩盤の調査してみると、ダムの地下のさらに下の部分に大空洞が見つかった。さらに詳しく調べると、空洞に降りる通路になる穴も見つかった。もともと、旧日本軍が要塞にしていた場所だから、抜け道を用意していたのだろう。その時は、今回のような工事を考えていなかったから、地下の空洞は問題にならなかったに違いない。しかし、エレベータを設置するとすると、その分だけ下に向かって掘ることになり、空洞との間の岩盤が薄くなる。そうなつては十分な支えにならないし、エレベータもろとも空洞に落下する可能性も出てくる。下の空洞に到達する所まで地下をぶち抜き、さらに空洞の下をボーリングしてエレベータを設置するといふ大工事をするしかない、というのが何回目かの会議の結論だった。このため、せっかく作った図面も強度計算も全部やり直しとなり、エレベータの仕様に至るまで大幅な変更を迫られることになった。

「隔離されたのに落ち着く暇もない」

宇門はあくびをしながら食後のコーヒーに手を伸ばした。

隔離は既に三週間目に入ろうとしていた。数時間おきに意識不明の操縦者の点滴と氷枕を交換し、酸素吸入のポンベを取り替える必要があったため、夜中でもタイマーで叩き起こされることになった。一人でやっていたのではとても体がもたないので、宇門と暮林は交代で看病にあたった。それと同時に、暮林は組織培養と生化学実験を、宇門は格納庫の設計と工事の指揮をとっていたから、ほとんど休み無しで働いていたことになる。

「宇宙人実在説を唱えておられるんだから、やってきた宇宙人が原因で忙しいのは喜ぶべき事じゃないですか。手間暇かけて地球^S外文明探査^Tだの恒星間通信探査^Sだのをやっていたら、向こうから飛び込んでくれたわけです」

「外交使節が来てくれることは期待していたがね、救命救急センター^Rの真似事をするとは思っていなかったよ。しかも私が医療スタッフという役回りになるとはねえ」

「ところでそろそろ時間ですよ」

「そうだった」

宇門は交換用の点滴のパックを手に、即席のICUへと向かった。操縦者は、ここ三日ほど熱も下がり、容態があきらかに良くなってきた。挿管は既に外し、簡単な酸素呼吸器に切り替えていた。

操縦者は相変わらずNBC汚染患者用の透明ケースで覆われたベッドに寝かされていたが、宇門は防護服を着て作業を始めた。点滴のパックを付け替えて、ついでにデータを確認しようと、枕元のモニターに向かって身を乗り出した時、操縦者がゆっくりと目をあけた。

「気がついたか」

宇門はベッドのそばに行き、青年を上からのぞき込んだ。美しいブルーの瞳に、宇門の姿が映った。だが、表情に何の変化も見られない。

「私の言葉がわかるかね？」

宇門は、大きめの声ではっきりと言った。部屋の内外の圧力差を保つための空調の音がうるさいので、意識して声をださないと聞こえない。

「わかり……ます」

青年がかすれた声で答えた。そのままベッドに手をつけて起きあがろうとしたが、「うっ」とうめき声を上げて再びベッドに沈んだ。目を閉じて荒い呼吸を繰り返している。

「無理をしてはいかん。君はひどい怪我をして、二週間以上、ずっと意識不明だったのだ。できる限りの手当はしたが、まだ動いてはいかん」

「グレンダイザーは……僕の乗ってきた……どこに……」

「グレンダイザーというのがあの円盤の名前かね？君は、私の敷地内に墜落したのだ。そのままにしてあるよ。ただし、目立ちすぎるのでシートをかけて、すぐにはわからないようにしてある」

「あれを奪われるわけには……」

青年は目を閉じたまま、荒い呼吸に乗せてとぎれとぎれに言う。

「今のところ、奪いに来た者などおらんよ。近寄った者もない。我々はいろいろ調べようとしているがね」

宇門は言った。

「何かあったのですか？」

話し声をききつけて、暮林がのぞき込んでいる。

「医者と呼んでくれ。意識が戻ったようだ」

宇門は言った。暮林は駆け出し、インターホンで医者と呼ぶように所員に伝えた。十分ほどして、医者が防護服に身を包んでやってきた。どうやら、医務室でずっと待機していたらしい。

「意識が戻ったのなら、もう心配いりませんな。動かしても大丈夫だ」

医者は、簡単に検査データをチェックした。

「そろそろ上の医務室に運びますかな。生物災害の兆候もないし、隔離検疫をこれ以上続ける必要はないのではないですか。現に所長もびんびんしておられるようですし」

● PHASE 7 宇宙科学研究所・医務室

青年は、名を『デューク・フリード』と名乗った。

医務室に移動させたので、宇門の付き添いも以前より楽にできるようになった。入ればなしにしてきた点滴や排泄用のチューブを外して、デュークが何とか起きられるようになるまで、さらに二週間を要した。起きていられる時間がだんだん長くなってきたので、宇門は、写真やイラストが多く出ている簡単な百科事典を運び込んだ。地球とはどういうところなのか、まずは知ってもらおうと考えたのだ。宇門が時々医務室をのぞくと、デュークは熱心に読んでおり、宇門にあれこれ訊くのだった。

やっと普通に食事ができることになったその日、宇門はスプーンを運んで、デュークのベッドのテーブルに

置いた。

「地球人の味覚とは違うかもしれないな。口にあうとよいのだが……」

デュークはまだ右腕を吊った状態で使えず、左手でスプーンを握って一口ずつ飲んだ。

「大丈夫です」

「どうやら、地球人とそうかけ離れたものを好むわけでもないらしい。

「しばらく食べていないのだから、ゆっくり食べなさい」

宇門はデュークが食べる様子をずっと見ていた。肩まで伸びた栗色の髪、鼻筋が通って整った顔立ち、蒼い瞳、どう見ても、どこにでも居る地球人の——西欧系の——青年である。宇宙人であるということをおぼろげに忘れそうになった。

「ところで、グレンダイザーはどうなっていますか？」

「まだ、君がやってきたときのままになっていますよ。そのままだと目立つので、シートをかけてあるが、動かしてはいない。正確に言うと動かし方がわからないのだ。いつまでも放っておくわけにはいかないが、ろくな道も無い山の中を一体どうやって運んだものか、考えているところでねえ」

四百トン以上五百トン以下、というのが、計算では

じき出したグレンダイザーの重量推定値だった。陸

路であれば、宇宙ロケット用の重量物輸送車で運べる

が、八ヶ岳山中では道がないため使えない。空輸しようにも、最大の軍事用輸送機C-15Bの積載量は百二十

トンであり、仮にまともな滑走路があつたとしても、くくりつけたら離陸すらできない。勿論、そこらの輸送ヘリが束になつてかかっても、持ち上げること

さえ不可能である。地球上のものなら部品に分けて

運ぶところだが、地球上の科学技術を超える円盤では、うっかり分解することもできない。もっとも、円

盤の外装は非常に頑丈で地球上の工具ではまったく

歯が立たなかつたし、内部構造についての情報を得ようとX線から超音波まで試したが、何も透過してこない

ので、結局のところ、外見以外に何もわからない状態が続いていた。

「動かしてみましようか？」

「やってみると助かる」

「目立たない場所に移動させたいのですが」

「それならこの地下に格納場所を作っておいた。この下のダム我真ん中あたりに出入り口があるので、そこから入れてくれないか」

「ずつと隠しておけるでしょうか？」

「君が円盤でここにやってきたことは、所員達も既

に知っているよ。だが、外には漏らさないように言つてある。我々が敵ではないことは、君の手当をしたことからわかつたと思うがね。それにグレンダイザーは宇宙から来たものだ。何かまずいことが起きたら、あれはいつでも宇宙に飛び立てるのだろう？ だつたら、しばらくここに置いて大丈夫だと思うが」

なおもデュークが迷つているのを見て、宇門はさらに続けた。

「そういえば、奪われると困るとか何とか言つていたな。我々がグレンダイザーを奪つたり破壊したりする気があるなら、この一ヶ月の間にやつておつたよ。そうしなかつたというので、とりあえず我々を信用してはくれんかね？」

正直な所、手の出しようがなかつただけかもしれないがね、と付け加えるのはやめた。少なくとも調査以外の意図を持つていなかったことも確かだつたからだ。

「わかりました。案内してください」

「へりで先導するつもりだが、ゆつくりでも飛べるかね？」

「空中で止まることもできません」

「それなら大丈夫だ。今夜移動させよう。今のうちに休んでおくように」

● PHASE 8 八ヶ岳エリア・研究所裏

人目を避けるため、夜になつてから、宇門は林・佐伯の両所員とともに、へりに乗り込んだ。林が操縦し、副操縦士席には佐伯が座つた。デュークはキャビンのストレッチャヤーに乗せられ、上半身を起こして窓の外を見ている。宇門はデュークに付きそつていた。

前着陸したのと同じところにへりを着陸させた。デュークはまだ手足をあちこち固定されていてほとんど自由にならない。宇門はデュークを抱き上げて、ゆつくりと斜面を登つていった。

グレンダイザーは、建築用の青いシートで覆われており、外から見ても何があるのかわからないようになっていた。佐伯が周囲に張られた、シート固定用のロープをほどいていた。宇門は、倒れている木をうまく利用して、デュークの言う通りに、尾翼の付け根のところまで上つていった。デュークが手を触れると、キャノピーが開いた。宇門は、デュークをそつと操縦席におろした。

デュークは左手でコンソールを叩き始めた。右手は吊つたままである。複雑な形をしたパネルのいくつかが輝き始め、低いうなりが伝わってきた。

「片手で大丈夫か」

「ええ、ゆっくり飛ばすだけなら。それよりも、これから飛びますから降りてください」

「ヘリのサーチライトを目印についてきてほしい。ダムの真ん中あたりの出入り口から中に入って止めてくれ。奥の方に丸い台があるので、その上に着陸させたら、そのまましばらく待っていてくれ」

宇門は円盤から駆け下り、ヘリへと急いだ。佐伯が後に続いた。ヘリが飛び立つのと合わせるように、グレンダイザーもゆっくりと浮かび上がった。被っていたシートを振り落としながら、高度を上げていく。ヘリが研究所への進路をとると、その少し後から同じ速度で追ってきた。

「慣性制御か重力場推進か、いずれにしても我々が手にしている飛行原理ではないな。予想はしていたが、目の当たりにすると実に興味深い」

ジェット機のように空力で揚力を生み出しているなら、低速で飛行するヘリに合わせて飛ぶと失速して墜落するだろう。それ以前に、円盤形では揚力などそもそも稼ぎようがない。地球上の飛行物体とは全く別の原理で浮いていると考えるしかなさそうだった。

グレンダイザーがダムの格納庫の中に姿を消したのを見とどけてから、ヘリを着陸させた。宇門はヘリポートから地下へと急いだ。

指示したとおり、グレンダイザーは入り口の方を向いた状態で台の上に着陸していた。

『今、高さを調節するからそのままにしていなさい』

格納庫に宇門の声がスピーカーを通して響く。宇門は、エレベータの電源を入れ、続いて下に移動させるボタンを押した。機械音が反響し、ゆっくりと台が降下を始める。操縦席と床の高さがほぼ同じになったところで、移動を止めた。グレンダイザーの上を歩き、操縦席のキャノピーを軽くノックする。デュークはキャノピーを開き、操縦席上部のレバーを押し上げたが、自力では立ち上がれない。宇門はデュークに肩を貸し、固定されている手足が引っ掛からないようにして操縦席からそつと引っ張り上げた。

「傷は痛むかね？」

「大丈夫です」

「私の部屋でコーヒーでも淹れよう。訊きたいことは山ほどあるんだ。話してくれるね？」

● PHASE 9 宇宙科学研究所・所長室

きつかり十五分後、宇門はデュークと、所長室の応接セットで向き合っていた。所長室は広々としていて、応接セットは入り口入ってすぐ右側にあった。

奥の窓際に、窓に背を向ける形で宇門の机がある。多くの場合、活動的な研究者の机の上は書類が積み上げられていることが多いのだが、宇門の性格の故か、書類や資料などは左側の棚に整然と片づけられていた。その棚の前には小さなテーブルがある。右側の壁には、隣の資料室に通じるドアがあった。

「ここは、あなたの家なのですか？」

先に口を開いたのはデュークの方だった。

「家？ いいや、違うよ。家は少し離れたところに別にある。ここは私の研究所だ。宇宙科学研究所とってね、宇宙の観測をしている所なのだ。私が所長なのだよ」

「では、宇宙からやってきたものを調べることもあるのですか？」

「それも研究テーマのうちの重要な部分だよ。君は、私の所有する山林に墜ちてきたのだ」

宇門はデュークを見た。まっすぐに見返すデュークの青い瞳と目があった。あからさまな好奇心を見せるのは失礼だろうな、と思う。

「だから、いろいろな話を聞かせてもらえるとありがたいのだが」

宇門はコーヒーをすすった。

「言葉が通じて助かったが、一体いつどうやって日本

語を知ったのかね？ 君の乗っていたあの円盤は、日本どころか地球上のものとも思えないが？」

「言葉の問題は、僕たちの技術なら簡単に解決できます。言語体系の違う星に行つた時に、できるだけ早急にコミュニケーションを確立するために、そこから言葉を分析し強制的に脳に送り込む技術があるので。グレンダイザーは、日本に近づいて墜落するまでの間、飛び交っていた通信を傍受して僕に教えたのです」

「なるほど、君たちの世界では、自由にいろんな星に行き来していたのだな。そういう技術が必要になるわけだ」

知的生命体とのファースト・コンタクトを望んだ人類が、人体の絵や元素の周期表を刻みつけた金属パネルを衛星に積んで太陽系外へ送つてから随分と経つ。人類が思いついた共通の言語とはその程度のものであつて、他に共通の言語となりそうなものを見いだす方法は未だ見つかっていなかった。それに比べて何という差か、と宇門はため息をついた。

「ところで、グレンダイザーという円盤のことだが、あれは一体どういうものなのかね。作られた目的や性能について知りたいのだが」

「あれは僕の生まれた星、フリード星の守り神です。

僕が生まれた頃に計画されて、十年以上かけて完成したものです。フリード星の科学技術の粋を集めたものなので、同じ性能のものは他には作れなかったときいています。円盤型をしています。ロボットが中に入っていて、分離することができます」

「顔のある円盤にしか見えないが、ロボットを内蔵しているという訳か……君たちの神はロボットなのかね？ 技術が進むとそう考えるようになるのかね？」

「そうではありません。でも、地球でも神様や英雄の巨大な像を作ったでしょう」

「それはそうだが……」

宇門は、エジプトのスフィンクスや、アメリカの自由の女神、日本の大仏像などを思い浮かべた。

「確かに地球でも、地形を変えたり雷を落としたりする神々が信じられていた。キリスト教の神は天地を始め世界を創造したことになっている」

「フリード星での伝説も似たようなものでした。ただ、只一人の神を信じるような強い宗教ではなかった。世界を創る力への素朴な信仰だった」

「確かに我々地球人ははそういう神をあがめるために像を作ってきたね。作ることを禁じた宗教も一部にはあったが……。具体的な神が想定されていない場合でも、人を超えた力の存在が信じられ、信仰の対象

となってきた。だが、それはあくまでも信仰上のことだ。少なくともこの地球においては、偶像が現実の力を持つことなど無かった」

「形だけしか作れなかったのは、動かす技術がなかったからではないのですか」

「それはその通りなのだが——」

確かに、巨大な偶像を好んで作りたがった時代には、巨大ロボットを動かす科学技術は存在しなかった。実際に巨大ロボットを動かせる程度に科学技術が進んだ時代になると、宗教的理由で巨大な偶像を作ることとはほとんど無くなっていた。

「形だけの像に力が宿ると信じられるのであれば、現実に力を出せるならもつと信仰の対象になるし、実際に星を守る。そう思いませんか？」

ちよつと待てよ、と宇門は思わず眉を寄せた。国民を大量に粛正したことで有名な旧共産圏のリーダーを思い出したのだ。確か、広場に巨大な像が建てられていたはずだ。それが実はロボットで、先頭に立つて粛正の実力行使をする、などということになったら、悪夢以外の何物でもない。

「——地球ではそうもいきそうにない気がするが。それはともかく、君の星では偶像を信仰の対象にしたというのではなく、逆に、偶像に天地創造の力を持たせ

たということなのか？」

「そうです。フリード星の科学力を結集してグレンダイザーを作ったのです。交流のあつたまわりの星に比べても、フリード星の科学技術は進んでいた。十分に守護神となるはずだった」

「グレンダイザーは星を作れるというのか……」

「宇宙はため息をついた。」

「あなたに借りた本に出ていたようなことなら、大抵はできます。海を割り、大地を削ったり山を動かしたり、霆を落したりといったことです。あなたがたの言葉では、テラ・フォーミングと云うのでしたっけ？」

それは何かが違う、と言おうとして宇宙は天井を見上げた。本に出ていた、とはいっても、神話の解説として出ていたはずだ。十分に進んだ科学は魔法どころか、もはや神話の世界でしかない。宇宙観測と開発を生涯の研究テーマと決めた宇宙門にとって、テラ・フォーミングはもちろん研究対象の一つではである。それが、神の奇跡を持ち出す他にない現象で語られようとは……。

「一体どういう原理でそういうことが可能なのか想像もつかん。我々が人を送り込むのは今のところ月までが限界だ。それも、そう頻繁に気軽にやれることではない。無人の探査衛星でもせいぜい太陽系内し

か到達しておらん。大気圏離脱も再突入も、百パーセント成功というわけにはいかん。どうやら、縄文時代と今の我々の間の科学技術のギャップより、我々と君たちの間の科学技術のギャップの方がはるかに大きいようだ」

「フリード星はことは別の銀河にあります。フリード星の技術では重力も慣性も制御できて、空間転移も可能です。もつともその程度は、フリード星と交流のあつたいくつかの星でも可能ですが」

「そこまで科学技術が進んでも守護神が必要なのかね」

「ええ……」

「科学技術で神話の世界を実現させることができるのか？」

「銀河を超えて飛び、脳そのものに直接情報を送り込んだり、生命ですらもある程度自由に操れるまでになつてさえも、なお、僕たちが何処から来て何処へ行くのかという問いに答えを出すことができなかつた。なぜ今のような存在なのかということについても。だから、何らかの形で信仰を残すことが必要だったのです」

「極端に技術力のレベルが違っていても、フリード星人は地球人と結構共通する面を持っているのではな

いかと宇門は思った。それならば理解しあえるし、うまくやっていけるだろう。

「それでは、君は、フリード星の守護神に乗ってきたのだから、何か宗教的な仕事をしていたのかね？ たとえば祭司か神官のような……」

「僕はフリード星の王子でした」

王族が神事を司るとするのは、地球の文明でもしばしばみられたことである。妙なところで地球人とフリード星人は似ているようだ。

「それに……通常の軍備の他に守護神まであったら、他の星だつて侵略を仕掛けてはこないと思つていた」

「抑止力として使おうということだね。地球でも似たような発想で軍備増強を行っているが。だが、それがどうして地球にやってくるようになったのかね」

「予想しなかつた方法で奇襲を受けたのです」

デュークは目を閉じた。

「強大な軍事力を支えるだけの科学技術があつても、フリード星は軍事国家にならうとはしなかつた。しかし、ベガ星は違つた。ベガ星にとつて、守護神グレンダイザーは、最も強力な兵器として魅力的だったのでしょう。ベガ星の技術であれだけのものは作れないから、奪おうとした。そのためにフリード星は――」

「しかし、それだけ科学技術が進んでいたのなら、普通に索敵の能力くらいは持つていた筈じゃないのか？ 軍事行動だとわからない形でBC兵器でも使われたのかね？」

潜伏期間と殺傷力や感染力を調節したウイルスに人間を感染させ、普通の観光客を装つて相手の国をうろつかせれば、それだけでも十分な脅威になるに違いない。こんな時に宇門が真つ先にバイオテロの可能性を考えついたのは、暮林の影響もあつたかもしれない。しかし、デュークの答えは違つていた。

「奴らは動物を使つて攻撃したのです」

「一体どうやって？」

「高性能ベガトロン爆薬を仕込んだ小動物をフリード星全土に分散させて、爆発させたのです」

ドブネズミやコウモリやカラスに爆薬を仕込んで放した後、全部一度に爆発させるようなものだろう、と宇門は推測した。数が極端に多い同時多発爆弾テロが可能になる。仕掛けられた側は大混乱に陥る上、しばらくの間は、一体何が起きたのか見当もつかないだろう。

「フリード星全域で、軍も警察も対応に追われました。爆発は、国の中枢施設でも起きたから、軍や警察自体にもかなりの被害があつたのですが……」

そうして、新たな軍事的行動に対応する余裕が無くなった状態で、ベガ星連合軍が奇襲してきたのだという。空襲で主要な軍事施設を——勿論王宮も——を破壊した後、ベガトロン陽子爆弾で惑星全域を焼き尽くした、というのが攻撃の内容であった。

「何ということだ……では、君の星に生存者のいる見込みは全くないということなのか」

「あのときの侵略は、フリード星人と交流のあった近隣の星にも、同時に行われました。僕は、何とか追撃を振り切り、その後三年ほど銀河の中のいろんな星を回ったのですが、次々に攻撃されてどうすることもできず、やむなく隣の銀河まで逃れたのです」

宇門はコーヒーをつぎ足した。

「我々の星では、国家間で弾道ミサイルを突き合わせながらみ合っているのだが、君たちの星には同様のシステムは無かったのか？」

「ありましたが、しかし……」

最初の攻撃が恒星間ミサイルでやってきたのであれば、迎撃と同時に報復が可能な筈であった。しかし、最初に極端な数の同時多発爆弾テロをしかけられ、地上が麻痺状態になったところに宇宙からの侵襲が行われたので、防空ラインを突破された空軍が地上に援護を求めても、対応ができなかったのだ。その結

果、報復を行うより先に惑星全体が灰になった。

「悪魔的に効率の良い殲滅方法をとる連中だな、そのベガ星の奴らは」

「この先気がかりなのは、向こうの銀河を滅ぼし尽くしたベガ星連合軍が、今度はこちらを侵略に来るのではないかということなんです。グレンダイザーのコンピュータは、ここなら安全だと判断してはいたのですが——」

「杞憂に終わってほしいものだな」

宇門は、コーヒーを口に運ぼうとしていたが、思わずその手を止めていた。地球人類は、地球人類向けの軍備をしつかり持っている。しかし、それを宇宙に向けてることになった場合、彼我の技術力の差があまりに大きければ、軍備などあっても無いのと同じである。統一政府のない地球の場合、動物を使った爆破攻撃が全地球規模で行われたとしたら、疑心暗鬼に陥った国同士がめいめい勝手に戦端を開いて、報復合戦の挙げ句自滅に突き進む可能性の方が高かった。地球に対してフリード星と同じ手順で攻撃する場合、後の空爆やベガトロン陽子爆弾の投下は不要かもしれない。

「しかし、多少科学力で劣っていたといっても、ベガ星はフリード星を滅ぼす力を持っていたのだろうか？ それに比べれば、地球はベガ星にとって、未開の星も

いいところだ。我々を攻めたところで得られる技術も力もありはしないし、人間を捕らえたところで、知識の差が有り過ぎて、ベガ星の連中にとつては使い物にならないだろう」

「奴らは使える星を探しているのです。行つた先に先住民が居ても居なくてもそんなことは問題ではない。使えるなら奴隷か兵士にし、使えないなら皆殺しにするだけです」

「――遊牧民が草を求めて行き着いた先で、草むらに住み着いている虫の存在など気にはせんだろうな。ベガ星連合軍にとつて、我々地球人の存在は虫けら程度ということか」

「多分そうだと思います。彼らは人類の存在など問題にしないでしよう」

「とにかく、これからどうするかを決めなければならぬ。皆を集めて話をするから、そのときは同席してほしい。今日はもう休みなさい」

● PHASE 10 宇宙科学研究所・会議室

「デューク・フリードの話から、これまでにわかったことは以上だ」

宇門は会議室を見渡した。所員と、医師と出向組の

暮林の全員が集まっており、宇門の隣に、車椅子に載せられてデュークが座っている。

「その……ベガ星の科学力の方がフリード星に勝つていた部分はあるのですか？」

山田が訊いた。

「生物を改造することにかけては、フリード星よりずっと進んでいました。一方、材料やロボットを作る技術、重力制御技術や光子エネルギー利用についてはフリード星の方がはるかに進んでいました」

「ベガ星というのは、我々がそう呼んでいる星のことですか？」

地球では、七夕のひこ星をアルタイル、おり姫をベガと呼んでおり、それぞれ地球から十七光年と二十六光年のところにあり、いずれも銀河系に属している。

「いいえ、僕はこの銀河に一番近い隣の銀河から来ました。ベガ星というのは、フリード星の近くの星系に僕たちが付けた名前ですから、この銀河系で皆さんがベガと呼んでいる星とは別のものです」

「じゃあフリード星はアンドロメダ銀河にあるということですか……」

アンドロメダ銀河 M31 (NGC224) は、太陽系から約二百三十万光年離れていて、近くに丸い伴銀河 M32 (NGC221) と細長い伴銀河 M110 (NGC205) があ

る。銀河系に最も近い銀河である。

「知つての通り、私はこれまで宇宙人実在説を唱え、学会からは異端扱いされてきた。デューク・フリードとグレンダイザーの確保は、宇宙人実在説の決定的証拠だ。発表すれば私の説は認められるだろう。だが——私は発表を見送ろうと思う。君たちには当然、異端扱いのままの私のもので仕事をしてもらうことになつてしまつて、済まないと思つている」

「我々は所長に従いますが、しかし、所長は本当にそれでよろしいのですか？」

所員たちがざわめく。宇門はかるく咳払いをしてそれを静めた。

「これが我々にとつて、異星人とのファースト・コンタクトであることに間違ひはない。我々にとつては脚光を浴びるチャンスだが、今発表すれば、デューク・フリードは好奇の目にさらされ、グレンダイザーもろとも世界中から寄つて集つて研究材料にされてしまうだろう。異星人との交流がありふれたものであつたなら、単なる一亡命者としてひっそり扱うだけだろうが、残念ながら今の地球ではそうはいかん。故郷を滅ぼされ、命からがら逃れてきたデュークを、この上実験材料にするには忍びないのだ」

宇門は少し間をおいた。

「ならば、地球人類の対等の友人として名乗り出てもらい、この世界に受け入れてもらつてはどうか、とも考えた」

「まず、信じてもらえないんじゃないですか」

「私も大井君と同じことを考えたよ。おそらく、デュークが名乗つただけでは信じないだろうな。私も含めて、全員夢でも見たのだろうと言われるか、狂人扱いされるのが落ちだ。信じさせるには証拠が必要だ。デュークが我々人類と明らかに違うということや、グレンダイザーの性能を示す必要があるだろう。結局は研究対象としていじくり回されることになる。銀河を超える超科学の産物だ。科学者だけが関わるならともかく、政治家や軍に知れたら、最悪の場合は地球上で争奪戦になるだろうな」

「ベガ星の侵攻については、早めに危険を知らせた方が、対策を立てる上でもいいのではありませんか。このところの状況を考えると、警告を無視するほど皆が平和ボケしているとも思えません」

「ふむ——しかし、今度は地球上の生命体同士の小競り合いでは済まないからな。それに、ベガ星連合軍の侵攻は、今のところ、来るかどうかもわからないものだ。現実には差し迫つた別の戦いをしている最中に、ベガ星に備えろと主張しても受け入れられないだろう

な」

宇宙門は腕を組んだ。

地球人同士の武力紛争——人類同士、あるいは人類とそれ以外の地球先住民の間の紛争——は、相も変わらず地球上のあちこちで起きていた。日本は、幸いにして他国との戦争はしていなかったが、その代わりに、光子力研究所が成り行きで防衛の拠点となつてしまつていた。

光子力研究所はDr.ヘルを相手に戦っているが、Dr.ヘルが差し向けてくるのは地球上の先史文明（古代ミケーネ文明）の遺物や、新たに作られたロボットである。古代ミケーネ人自身が再び甦る可能性も指摘されてはいたが、まだはつきりした証拠は得られていなかった。Dr.ヘルは世界征服をもくろんではいしたが、兜十蔵へのライバル意識が強かつたため、当面の目標をジャパニウムの略奪とマジンガーZの破壊、及び光子力研究所の占領に限っており、戦いはDr.ヘルの私戦かつ局地戦の様相を呈していた。国防軍は避難活動や迎撃に協力していたが、近隣諸国の軍隊、特に最大兵力を持つ米軍は、表だつた動きはしていなかった。下手にちよっかいを出して紛争を拡大するのは得策ではないため、これらの研究所がどう撃退するか様子を見ていたからである。

「もし、フリード星と同じような攻撃が地球に対しても行われたなら、地球の技術力ではとうてい守り切れはせんだろう。ベガ星連合軍が最初の攻撃を手加減して降伏を勧告してきた場合、統一政府のない地球では対処不能に陥る可能性の方が高いな。どの国であつても、唯々諾々と侵略を受け入れたりしたら、その国の権力が真つ先に崩壊する。自国の利益と権力者の保身を最優先と考えるなら、他の国をベガ星に勝手に売り飛ばす国さえ出てくるだろう」

さらにその後、「そうなつた場合は、放つておいても私の学説は全世界に認められるだろうな。同時に、研究業績だろうが学説の争いだろうが、人類にとつては無用の長物と化すだろうがね」と付け加えて、宇宙門はデュークの方を向いた。

「残念ながら我々の社会はこの程度の意思統一しかできておらん。ところで、これから先、どうするのかね」

「僕の戻る星は既にありません。フリード星が滅ぼされてから三年ほど、あちこちの星を回りましたが、僕が生存可能な星はことごとくベガ星の侵略を受けてしまいました。地球に長居をするのも申し訳ないの
で、いずれは新たな星を探して出て行こうと思いま
す」

「たつた一人で、かね？」

「……ええ」

「また追撃されてどこかの星に不時着しても、今度は助かるとは限らんぞ」

「そのときは、グレンダイザーを破壊し、僕も死ぬことになるでしょう。男性の僕一人が生き残っても、子孫を残すことはできません。僕たちは既に滅ぼされた種族なので……」

デュークは顔色一つ変えずに言った。宇門はわずかに目を見開いた。言葉に冷静さや冷徹さは感じられず、かといって無理をしているわけでもない。生きること自体に、もはや興味も関心もないという風に見えた。時間と労力を注ぎ込んで助けたのはもう一度死なせるためではない、と宇門は思わず強い口調になる。

「遅かれ早かれ絶滅する運命だと言いたいのかね」

宇門はデュークの蒼い瞳を見据えた。

デュークは地球人だとすると十八歳くらいに見える。フリード星で王子だったということは、父王が居たはずだから、実際その程度の年齢なのだろう。自分が十八歳の頃は何を考えていただろう、と宇門は記憶をたぐった。宇宙の神秘を解き明かすことに、夢と希望を持って学問に励んでいたし、自分の未来も、研

究の進歩や発展も、何一つ疑うことなど無かった。たとえ境遇がどうであれ、やつと助かった若者が、またすぐ死ぬことを考える状況というのは尋常ではない。第一、人間は、命ある限り、生きること放棄してはならない。「簡単にあきらめるんじゃない」と叱り飛ばそうと思つたのをかろうじて堪えて、宇門は深呼吸した。同胞をすべて失つた生き残りの王子に対して、個人的理由だけで生き抜けと説得したところで、心には響かないだろう。共に生きる者でも居れば別だろうが……。

「そうだな——君さえ良ければ、しばらくここで暮らさないか？ 私の家族として」

とつきの思いつきだった。口にしてみて宇門は自分でも驚いた。だが、すぐに説得の方法を探し始める。

「なぜ……？」

「もうわかっていると思うが、地球——いや、この日本という国はそれなりに管理された国だ。天涯孤独でいきなり放り出されたら、普通に暮らしていくのは難しいだろう」

現在おかれている状況をデュークがすぐに理解できなくても構わない。もう少しじっくりいろんなことを考える時間があれば、今はそれだけでも良いので

はないか。宇門はさらに続けた。

「仮に滅びる運命が避けられないとしても、滅びるまでの時間と滅び方については選ぶ余地があると思うがね。地球は、科学技術の進歩の度合いがフリード星に比べてあまりに低く、原始的な環境だという点で不満があるかもしれないが、少なくともここには平穏な普通の暮らしがある。時間が経てば状況も変わるだろうし、何か見えてくるものもあるのではないかな」

往生際が悪いのは大いに誇つてよいことだし、研究者の専売特許でもない。生き延びられれば次の選択をすることもできるに違いない。

「……そんな風に考えたことはありませんでした」

「暮らすにしても、何かあったときの後見が必要だな。お前は今日から私の息子ということにして、宇門大介と名乗ってもらおう。私の友人たちにもそう紹介する。皆もそのつもりでいてくれたまえ」

宇門は研究所員達を見渡した。

宇門は独身なので、宇門の一存で養子を迎えても何も問題はない。そのことを知っている研究所員たちは軽く頷いて肯定する意志を示した。

「それでは、ベガ星の侵攻に備えてできることをしておこう。とは言っても、我々にとつては、普段の研究の延長線上にあることに過ぎないのだがね。まあ、

何も起きなければそれでいい。グレンダイザーの性能についてはいわずれ見せてもらうとして、飛行原理の解明を早急に進めてもらいたい。むろん、デューク——いや、大介にも協力してもらおうことになる」

「それは……できる範囲ならかまいませんけど」

「では、我々が宇宙へ飛び立つための技術確保を最優先としよう。我々より遙かに進んだ科学力を持ったフリード星でさえ、グレンダイザー一機ではどうにもならず、ベガ星に滅ぼされたのだ。超光速だの重力制御だのを可能にする科学技術で作られた武器のコピーなど、地球では無理だ。かといって、とつとと両手をあげて降伏したとしても、ベガ星連合軍は地球をそのままにはしておいてくれんだろう。地球は焦土と化し、人類は皆殺しだ。それなら、侵攻を早めに察知して逃げ出すしかないだろう」

「グレンダイザーの飛行性能はどの程度のものなのですか？」

佐伯が訊いた。

「単独での大気圏離脱・再突入は何度でも簡単にできます。大気圏内での飛行速度はマッハ九。恒星間飛行では超光速での飛行が可能です。宇宙のあらゆる場所で戦闘機動をすることができます」

所員の間で声にならないため息が漏れた。ロケッ

ト推進の場合は、推進剤を化学反応で得たエネルギーで噴射させる力の反作用で加速している。従って、必要な推進剤をすべて抱えて上がることに成り、推進剤が多ければそれだけ長く加速できるが、その分重くなることで損をする。大気圏外で戦闘機動が可能だということとは、軌道を自由に変えて、どこを飛んでいる物体とでもランデブーできることを意味する。地球の技術では、そんなことを可能にするだけの推進剤を持つて上がることは不可能で、あらかじめ計算して近い軌道に投入された物体同士を接近させるだけが精一杯である。

「——ホームマン軌道トランスファーもおかまいなしにエンジン全開のまま、どの軌道でも自由自在に上がれるということか。いや、もはや軌道というものを考える意味も無いかもしれないな。そして、そのまま太陽系脱出もできる、と」

「じゃあ、一体どんなエネルギーを使っているのですか？ 我々のように化学反応だけで飛んでは思えないのですが」

「『光子』というものです。クリーンなエネルギー源として利用できます」

「名前からすると、我々の世界の光子フォトンと同じもののように思えてきますが……」

「あなた方の言う光子フォトンのあるところには必ず『光子』が存在しますが、それ以外にも宇宙には分布しています。ただ、検出したり利用するには、重力場や慣性を操る物理学が必要になります——あなたがたがまだ発見しておられない理論ということになると思いますが」

「聞いての通りだ。おそらく、グレンダイザーは重力場推進と慣性制御の両方を使っているだろうし、エネルギー源自体が、光子という我々にとつて未知のものだ。光子利用の方法と、飛行原理の解明の両方を並行して進めることになる。宇宙観測も強化する。忙しくなりそうだね」

「材料はどうしましょう？ 光子の実験装置やエンジンを開発するにしても、我々の手持ちの材料で性能が追いつくかどうか……」

大井が質問した。

「そういえば、グレンダイザーの装甲の分析がまだだったな。この分野の専門家は弓教授だが、向こうは今、機械獣との戦いで余裕が無いだろうな。騒ぎが落ち着いたら、分析装置でも借りに行くでしょう。それまでは、手持ちの、宇宙開発用の材料で何とかするしかないな。」

「わかりました」

「調査のために、大介には何回か飛んでもらうことになる。が、当面は、とても我々の科学でグレンダイザーを整備したりすることはできそうにない。管制する位しかできん。それでいいかね」

「ある程度までなら、整備無しでもグレンダイザーは大丈夫です。簡単な自己修復機能は持っていますから」

「自力で大気圏脱出・再突入できる性能なら、地球上どこにでも簡単に行けるだろう。ただ、我々の航空機の飛行に被害があつては困る。航空機と衝突したとしても、グレンダイザーには傷一つつかんだろうが、航空機の方は無事では済まない。この研究所は単独でロケット打ち上げのミッションを行つていから、航空管制のデータも回してもらつてゐる。大介、我々の通信およびデータリンクを保てるようにグレンダイザーを調整しておいてくれないか」

銀河を越えて航行する円盤が持つデータ転送仕様に、地球側の設備を合わせるなど、どだい無理なことだ。技術が進んでいる方で合わせてもらうしかない。

「ところで、観測の強化といつても、具体的にどうしましょう。電波望遠鏡だけでは限界があります。稼働中の宇宙望遠鏡の方は汎用ですし、地球の周りからしか観測できません」

山田がファイルをめくりながら言う。宇宙門は立ち上がった。

「この研究所が何をするとするか、まさか忘れたわけではないだろうね、山田君。まずは、宇宙科学研究所で製作可能な最大サイズのロケットを作り、アンドロメダ方面を観測するための新たな探査機を投入する。可能な限り早急にだ」

● PHASE 1 宇宙科学研究所・地下工場

幅二百メートル、奥行き百三十メートル、高さ八十メートルの巨大な空間は、その日から不夜城と化した。

宇宙科学研究所のヘリポートの直下にある大工場^{V A B}では、企業から打ち上げを依頼された全長四十メートルほどの商業用ロケットが、ほぼ組み上がった状態で、何層にも並んだ可動床の真ん中を貫いていた。

宇門は、宇宙飛行士の訓練を受けた経験もあつたので、宇宙望遠鏡を打ち上げることになった時から、有人宇宙飛行のプランを視野に入れ始めた。人が宇宙に出て行けるようになれば、単に衛星を打ち上げるだけよりもずっと研究が進むと考えたのだ。だから、積極的に衛星の打ち上げを行い、技術の向上と蓄積をはかっていった。宇門の設計やマネジメントがよかつたこととスタッフに恵まれたことの両方が幸いして、成功率が他の施設に比べて格段に優れていたため、最近では、衛星の打ち上げを業務^{ビジネス}として引き受けるようになっていた。

年明けに商業用ロケットの打ち上げを行い、材料試

験衛星を地球低軌道に投入後、依頼者に全コントロールを移管するというのが、当面やるべき作業で、宇宙科学研究所の技術であれば楽に終わるはずだった。ところが、急遽、ベガ星連合軍の侵略に備えるための探査機を並行して打ち上げることになってしまった。

新たに組み上げられた足場は、ほぼ天井まで達していた。その周りには、ロケットを各段ごとに横に置いて組むための治具やドリーが並んでいた。天井に取り付けられているレールに沿って、最大二百トンの可搬重量をもつクレーン四基が、自由自在に動き回る。

「本来なら、このサイズのもは有人宇宙飛行に入る前の実現性研究のために、来年度以降に打ち上げるつもりだったのだが、そうも言うっておれなくなつた」
有人宇宙飛行を本気でやるとなつた場合、ロケットは、全長が百メートル、打ち上げ重量三千トンに達する見込みであつた。アポロ計画のサターンVがこの程度で、今の宇宙科学研究所の組み立て工場では作ることができないサイズである。従つて、これから組もうとしているロケットが、ここで組み立て可能な最も大きいものということになる。

「探査機の速度をできるだけ稼ぐために、スイング・

バイとプラズマロケットエンジンによる加速の両方を行う。探査機の重量に加え、プラズマエンジンと推進剤の重量分だけ重くなるので、ブースターは最大サイズのもので行く」

所員は全員、ヘッドマウントディスプレイとインカムを着けて作業にあたっていた。組み立ての部品と作業手順が膨大なので、とても紙のマニュアルを持ち込んで作業などできない。このため、マニュアルを全部電子化し、ボタン一つで各自のディスプレイに表示させた状態で作業し、作業の各段階で、手元の端末から終了とチェック済みかどうかを入力するようにしていた。これで、作業の途中経過はすべて研究所のメインコンピュータに送られて一元管理され、いつでも作業全体の進捗状況を確認することができる。紙の図面は一セットだけが、組み立て工場の隅の作業台の上に置かれていた。インカムも必需品で、これが無いと広い工場の端から端に向かって大声を張り上げることになる。

「燃料の方は、商業用の予備分を見込んで多めに確保していたので、追加の分だけ発注すれば大丈夫です。部品の発注も、ブースター部分については全部終了しました。予備のパーツで組めるところから始められるように、作業手順を組み直してあります」

大井が報告した。

大井は、モニター担当だが、それ以外に発生する研究所運営に関わる業務もこなしており、研究所全体をよく把握していた。もともとこの専門は理論物理学だが、宇宙科学研究所の業務は多岐にわたっていたので、専門に閉じこもっていたのでは仕事は何も進まない。

「発注に関しては大井君にまかせよう。面倒な交渉が必要になったら相談するように。なお、今回の組み立て作業のシフトには私も入る。疲れてくると事故が起きやすくなるが、怪我人は出したくないしやり直しも難しいから、みんなくれぐれも無理をしないでくれ。それから佐伯君、君は早めに軌道計算に入ってくれ。打ち上げ時には例によってミッシェンダイレクターの仕事をこなしてもらおうことになるからね」

「わかりました」

大井は、多数の発注先が書かれたリストを確認した。必要な部品は、規格を決めた後、京浜工業地帯の町工場一つに部品数個という割り当てで発注していた。それでも、部品のいくつかは研究所の工作機械で削りだして加工し、姿勢制御のプログラムは一切外部には出さず、佐伯が作って宇宙がチェックしていた。これは、機密保持のためであった。レーザージャイロ

と噴射板や可動ノズルを備えた研究所仕様様のロケットは、精密誘導が可能である。製作を外に丸投げして、万が一テロリストにでも情報が漏れた場合、どこかの離島から国会議事堂や皇居をピンポイントで狙い撃ちできるミサイルとして使われる可能性があったからだ。

「ところで山田君はどうしている？ 姿が見えないが」「——すみません所長、そちらを手伝えなくて。私は隣のグレンダイザー格納庫の空きスペースで観測用衛星を組んでいます」

インカムに応答が入る。「こつちでやる方が作業が楽なんですよ。光学観測用のCCDのチェックをするのに、他が作業中じゃあ照明を落とすわけにもいかないですし」

巨大な太陽電池パネルを展開して地球を周回している宇宙望遠鏡とは対照的に、太陽から遠ざかる方向に投入される今回の探査機は、電力源として原子力電池を搭載することになっていた。

山田は、観測室では電波望遠鏡や宇宙望遠鏡を担当している。観測データの処理や分析に加えて、観測機材そのものの設計や製作も行っていた。今回の探査機も、主な部分は山田の設計によるものであった。

「正直、今回は軽量化をそんなに気にしなくて良いか

ら、探査機側は楽させてもらってます」

二年後の有人飛行では、低軌道に百トン以上のペイロードを一度に上げることが目指していた。それに向かっつての、ロケットのサイズと能力を上げる最初の試験にあたるのが、今回の打ち上げということになる。宇宙としては、最初から、打ち上げ能力の限界に挑戦するつもりだった。だから、多機能な探査機がその重量のために、ロケット側の打ち上げ能力を要求してくるのは、むしろ望むところだったのだ。

「だが、次回からは軽量化を考慮してもらうぞ。ただし、探査機ではなく宇宙ステーションの構造物の方になるだろうがね」

「わかってます、所長」

宇宙は地下工場を改めて見渡し、苦笑するしかなかった。商業用ロケットの部品の梱包材を片づける前に二基目のロケットの組み立てが始まったので、工場の片側は予備のパーツに加えて新規に運び込まれたパーツが積み上げられており、反対側は段ボールやビニールや発泡スチロールといった梱包材の山が、今にも崩れそうな状態になっていた。確かにこれでは衛星の組み立てや試験をするのは無理というものだ。

「——しかし大井君もやるもんだな。無茶なスケジュールを攻略するのは佐伯君の得意技だと思ってい

たのだが。どうも最近、帳尻合わせばかり上達してきてたな、うちの所員達は」

● PHASE 2 宇宙科学研究所・医務室

「やあ大介、調子はどうかね？」

宇門が大介の病室を訪れるのは、いつも昼食前の午前十一時頃だった。大介は、医務室の片隅にカーテンで仕切って作られた病室に寝かされていた。医務室の壁は薄いグリーンに塗装されており、柔らかな照明が部屋全体に満ちていた。

「父さん、もうかなりいいですよ」

大介はベッドに上半身を起こした。

「ここで暮らすことには慣れてきたかね。食事は口合いかね」

「大丈夫です。地球のもので食べられなかったものは今までにありません。味の方はフリードのものとは違います、慣れれば味の良さもわかるようになります」

フリード星系とはまるで違う星に来たのだから、本当なら生活の仕方に馴染むまでに時間がかかり、それなりにストレスも感じるはずだった。ところが大介は重傷を負っていたので、意識が戻ってからは肉体的

苦痛と闘うのに精一杯で、環境が変わったことを気にする余裕など無かった。体が回復してきて、周りの様子に気が向くようになった頃には、地球での——宇宙科学研究所での生活に何となく慣れてしまっていた。「それは良かった。もつとも、銀河を超える種族なら、環境適応能力は我々よりずっと高いのかもしれない」

宇門は、ベッドの傍らの椅子に腰を下ろした。

「いやあ、一時は本当にどうなることかと思つたよ。宇宙人の治療なんかするのは初めてだから、うまくいくかどうか全く先が見えなくてねえ」

「まだ、車椅子でしか動けないんですが、だんだん良くなつてきています。でも、先生には、絶対に無理しないように言われています。それから、骨折の治療を終わらせるにはあと一回手術が必要だと」

「長い間危険な目にあつてきたようだからねえ。安心してゆつくり休みなさい」

「……いいんですか？ 所員の人たちにいろいろきいてみてわかつたんですけど、僕は父さんに相当な面倒をかけてしまつている」

「何を言うんだね、大介。確かに地球にはフリード星のような統一政府はないし、未だに地球人同士の争いも絶えない情けない状態ではあるが、これだけは知つておいて欲しい。困っている人を助けるのは、国や地

域を問わない地球人の流儀なのだよ。それに、お前はもう私の息子なのだから、何も遠慮することはない」「でも、ずっと医務室を使ったり、グレンダイザーを保管したりするために、大勢の所員の^{スタッフ}の仕事が増えているんじゃない？」

「ここは私の研究所だからね。私が、お前を息子にする^と宣言したら、皆、そのように扱っただけだ。さすがに、最初は驚いたようだったがね」

「これから僕はどうすればいいのだろう」「どうしたい？」

宇宙門に訊き返されて、大介は直ぐに答えられなかった。

「そうだな、治療が完全に終わったら、私の牧場の仕事を手伝う、というのはいかがか」

「——牧場、ですか？」

「この研究所の近くにあるんだよ。私と、旧い友人の牧葉一家が共同経営している。牧葉さんたちにもお前のことを紹介しよう——ああ、嫌なら無理にとは言わんよ。お前はフリード星では王子だったのだから。ただ、元気になったら、何か体を動かす仕事をしていた方が気晴らしになると思うんだが」

「やってみます」

フリード星でも、王族がそういった第一次産業に儀

式的に携わることがあった。少なくとも、戦場に赴くよりはよほど大介の性に合っていた。

「それから、グレンダイザーのコンピュータから、推進原理についていくつか情報をもらいたいのだが……。そういうえば、調査に協力してくれるよう頼んだ時に、あまり乗り気ではなかったようだね？」

大介の方も、この事についてはずっと心に引つ掛かっていた。宇宙科学研究所の研究対象と、宇宙門が宇宙人実在説を唱えていることを考えると、グレンダイザーについてこの先何もせずに放置することはないはずである。ただ、使いこなせないような技術をもたらしただけの場合、最悪の場合、それが原因で大きな被害を生じることがある。大介は判断に迷っていた。

「我々の知識レベルとかけ離れた科学技術の情報を渡してもいいかどうか心配しているのかね？」

宇宙門は静かに問うた。

「研究対象にとどまっている限り、そうひどいことにはならんと思う」

「そうかもしれないませんが」

「それに、本当に危険なものだと判断したら、我々は調査結果を破棄するよ。調査は我々だけでやるつもりだからね」

宇宙門は続けた。

「歴史的に見て、科学技術の成果が直接同胞に対して被害をもたらすのは、決まって時の政府や軍が方針を決めた時だった。だからこそ私はこの研究所を民間のまま運営し、スピントフを軍に渡してでも、研究所の独立性を維持する方針でやってきたのだ。マンハッタン・プロジェクトの二の舞などやらかすつもりはないからね」

「——わかりました。基礎的な情報は自由に読み出せるようにしておきます」

大介は、宇宙科学研究所の人たちを、とりあえず信用することにした。それに、専門には純粋な学問的興味以外は無さそうである。

「ところで、僕自身についてはどうなんです？ 調べてみたいとは思わないのですか？」

「それなら、下で暮林君が実験を続けているよ。手術の時に得られた組織を使ってね」

「そうなんですか」

「気を悪くしないでくれ。彼が実験しているのは、地球人との違いをはつきりさせるためだ。そうでないとお前が安全に暮らせないからね」

「どういう事です？」

「これから先地球で暮らすのなら、怪我をすることも、病気になることもあるかもしれない。ところが我々

は、地球人の治療方法は知っていてもフリード星人の治療方法は見当もつかない。せめて、地球人と共通の薬が使えるのかどうかという位は、ある程度見極めておきたいのだ。そうでないと、お前は、この先何かあってもまともな治療をうけることすらできないだろうからね」

「それなら、僕を手当するのは、実はとても難しかったのではないですか？」

「ヒトに対してこれまで何十年か積み重ねられた基礎医学の構築を、必要な部分に限って早急にやり直すことになっただけで、医学としての質的な難しさは無かつたと思うよ。既に確立された技術だし、これまでヒトに対してやってきたことの繰り返しに過ぎない——これは暮林君からの受け売りなのだが。もっとも、準備が間に合わなかつた分、お前の生命力を頼ることになってしまった。実験についてはこれから先も、ヒトに対するのと同じようにするつもりだ。つまり、お前に対し、説明と同意を得るということだ」

「実は、地球人の方が宇宙人に偏見を抱いているのではないかと思っていました。宇宙人が地球にやってきて、人間を誘拐して手術をしたり、家畜を殺したりといった、悪いことをしたという話がたくさんありま

すし」

宇宙は吹き出した。

「私が渡した本に出ていたかね？　そういうことを言う人のうち、本物の宇宙人に会った人など居ないはずだがね。まあ、地球人の中には、正体のわからないものをむやみに怖がる人がいるんだよ。ずっと昔は人外のもの、つまり幽霊や妖怪といったものを恐れていたし、宇宙に行けるような時代になつたらなつたで、宇宙人による人や動物の拉致監禁解剖を怖がることになつたようだ。幽霊の正体が枯れ尾花だとわかれば何でもなくなるように、宇宙人が我々と同じ知的生命体だとわかれば何でもない話だ。実に失礼な偏見というべきだろうね」

宇宙の顔がわずかに曇る。

「だが、ベガ星の侵略が現実のものとなつたら、そうも言っておれんな。生き延びるための対策を考えねば。まあ、お前が心配することは何もない。いざとなつたらグレンダイザーで安全な場所まで逃げればいい。我々は我々でどうにかするつもりだ」

宇宙は、穏やかで優しい目を大介に向けていた。こんな目、こんな表情をどこかで見たことがある。――そう、実の父、フリード王が息子デュークに向けていたのと同じだ、と思いつつも、少しひっかかるも

のがあって、大介は宇宙の様子を見つめた。以前と比べて顔色は冴えず、肌にも精気が感じられない。

「父さん、体調でも悪いのですか？」

「あ、ああ。ここの所忙しくて少し疲れているだけだよ。大丈夫、何ともないよ」

「そういえば、所員達が言っていました。『普段所長は観測室か所長室に居るんだけど、最近はおちこち走り回っていてほとんどつかまらない。それに、僕がやってきてからはほとんど家にも帰っていない』って」

「別にお前のせいではないよ、大介。確かに最初は感染症の危険があったからレベル4に隔離検疫されていたが、それが終わつたのはもうだいぶ前だ。それに、この研究所には仮眠室ベッドルームがいくつもあって、泊まるのに不自由はしないんだよ。何せ、徹夜の観測をすることだつてよくあることだからね。まあ、研究者が暇を持って余すようでは終わっているよ」

「あの音は林君だな。新しい部品が届いたらしい。搬入作業に行かなくては」

● PHASE 3 宇宙科学研究所・地下工場

「父さん、どこですか？」

大介の声がインカムから聞こえて宇門は我に返つた。可動床の三階に座り込んで配線のチェックをしていたのだが、手すりにもたれて少し眠つてしまつたらしい。急に目覚めたため動悸が頭に響いている。軽く頭を振つて立ち上がり、下を見ると、大介が、車椅子で入り口のところに來ていた。

「どうしたんだね、大介」

「父さんの居る場所を山田さんに訊いたら、地下工場だつて教えてくれて、インカムを貸してくれました」

「そうか……何か変わったことでもあったのかね」

宇門は階段を降りた。金属製の階段に鋭い靴音が響く。どの場所でも作業ができるように、地下工場には四方八方から照明の光が飛び交い、宇門の影を消していた。

「いえ——でも、所員達はみんな帰つたみたいだし、残つてた山田さんも、もう帰るつて言つてました。それで、父さんはどうするのかと思つて」

「明日は大晦日だからね、皆には年末年始の休暇を出したのだ。休暇どころじゃない状況であることも確かだが、正月も休めないのでは気の毒だからね。その分私が作業を進めておけば済むことだし。だからずっと研究所に居るよ。それに、お前もまだここで療養しないといけないしね」

「正月つて——確かお祝いをするんでしたっけ？」

「家族で集まつて向こう一年の無事を祈つたり、新しい年を迎えるお祝いをしたりする。特に日本では重要な行事だよ。今の私にはあまり関係の無いことだがね」

「ところでこれは？」

大介はロケットを見上げている。

「大きい方で探査機を飛ばすのだ。ベガ星の侵略があるなら早めに察知したいからね。お前から見れば、宇宙を飛ぶにはあまりにも初歩的なものかもしれないが、我々にはこれしか手段が無いのだよ」

「ベガ星のことを本当に信じてくださつたんですか？」

「ああ、我々の銀河系に対して大規模な侵略があるかもしれないということは、所員達もみんな了解しているよ。だから、それが本当ならできるだけ早くそのことを知るために、協力して突貫工事でロケットを組み立てているんだ」

「最近、みんなが忙しそうだったのはこれを作つていたからなんですね」

「そうだよ。地球の自転方向に打ち上げて速度をかせぐとか、月と惑星でのスイング・バイをできるようなタイミングでないと効率が落ちるとか、まあ我々の技

術レベルではまだいろいろな問題があつてね。打ち上げは年明け早々の予定だが、やればやるほど詰めの甘いところが見つかる」

量産できない物の品質を確保するのがいかに大変か、十分知っている筈の宇門ではあつたが、今回は時間的余裕が無かつたために、普段より過酷な開発作業を強いられることになった。まず、メインのロケットエンジンの試験を十分にやる余裕が無かつた。何とか三回の試験をしてデータを取り、その都度改良したのだが、それでもテスト不足は否めない。探査機の方は、全波長領域を測定する機能を一基に持たせたため、構造が複雑になり、熱設計と振動試験のシミュレーションを繰り返すことになった。その上、探査機に搭載するプラズマエンジンは、地上での試験はしているものの、宇宙空間での運用は今回が初めてである。出来ることなら三回にわけて試験機をまず打ち上げ、一回の打ち上げにつき一つずつ新規の技術のテストをした後で本番といきたかつたのだが、そうも言つてられない。こうなると、事前にどれだけ危ない部分をつぶせるかで成功率が決まつてくる。失敗しそうな部分に気付くには、技術全体を見通す勘やセンスが必要で、技術開発の最前線をくぐってきた宇門が作業全体を見て回ることになった。それでも、物が

ここまで複雑になってくると、宇門とて一度見ただけで不具合に気付くとは限らない。結局、繰り返してチェックをし、関心を常に向けておくという対応で対応していた。長時間の作業と思考の集中を要求されて、宇門は、体力と精神力を削り取られていた。

「しかし、ベガ星はとても強大な軍事国家です。侵攻がわかつたとして、それからどうするのです？」

「我々の技術では戦つても歯が立たないことぐらいわかつてるさ。だが、私はお前に言つただろう？ 『滅び方については選ぶ余地がある』とな。ただし、いたずらに危険を煽つても誰も本気にせんだろう。早めにベガ星の進撃を観測できればそれだけ早く警告を出せるから、対策を立てるのに使える時間が増える。その間にグレンダイザーの飛行原理を使いこなせるようになるかもしれない。それを使つて、たとえ少人数でも逃げられるかもしれない。とにかく、できることを積み重ねていくしかないのだよ。成功の確率を評価することが困難な作業であるのはわかつているが、やらない限り可能性はゼロだからね」

「じゃあ、僕に何か手伝えることがあれば——」
「大介、お前はまだ療養中だし、これから再手術が必要なのだろう。早く暖かい場所で休んで体力をつけておきなさい。それに、これは我々の滅び方——い

や、生き残り方を決める問題だ。我々の力でできることをするしかないだろうな」

「でも、もう夜中の二時ですよ」

「区切りのいいところまでやつたら私も休むから、お前は先に休んでいなさい」

「でも、こんな作業を父さん一人では……」

「ありがとう、大介。だが、私がこなさなくてはならない仕事など、昔からずつとこんなものだよ。それに、足場が悪いから、今のお前に手伝ってもらうのは無理だ。我々を助けてくれるというのなら、グレンダイザーの飛行原理の解明の方でいろいろ教えてほしい」

厳冬の八ヶ岳は、研究所のある、さほど標高の高くない場所であっても、寒波が来ればマイナス二十度にもなる。地下の組み立て工場は空調を効かせていたが、さすがに冷え込んで十分に気温が上がらない。そんな場所ですら寝をしてしまったので、目覚めた時に宇門は体が冷え切っていたが、話をしているうちに少しずつ暖まってきた。宇門は、大介の肩を二度軽く叩き、可動床の階段を上っていった。

● PHASE 4 宇宙科学研究所・医務室

——区切りのいいところまで、と宇門は言ったが、その区切りはなかなかやってこなかった。

何となく寝付けなかった大介は、時間をおいて二度、所員のベッドルームの並ぶ一角へ、宇門が戻ってきているか様子を見に行つたが、その形跡は無かつた。

フリード星がとつくの昔に手に入れた恒星間航行の推進技術を、未だに地球人達は手にしていない。化学反応に頼るといふ原始的な方法でしか宇宙を飛べないのに、宇門はそれでも宇宙へ出るつもりでいる。そんな時に、圧倒的な性能差のあるグレンダイザーを目の当たりにしても、それで自分たちの技術を恥じたり努力を止めたりはしないし、追いつこうと無闇に焦ったりもしない。ベガ星侵略の可能性を知っても、絶望することなく、生存の可能性を探るために、ただ、ごく自然に前に進むとうとする。

地球人の技術では、ベガ星の侵略を監視するだけでも、大幅に仕事が増えることになったのだろう。さつき大介が下に行つて声をかけたとき、宇門は作業しながら眠っていたようだった。工場はかなり寒かつたし、照明がまぶしい位で、とても快適とは言えない。所員達の話では、宇門が夜の作業をこなすことが多いということだった。あんな場所で作業中にそのまま

眠ってしまうなんて、激務の連続でかなり疲れがたまっているに違いない。

「それでも、父さんは……父さん達はあきらめないのだろう」

大介はベッドに横になり、天井を見ながら呟く。地球の科学技術はフリード星に遠く及ばず、星を統べる政府もない。確かにここは未開の星だ、と大介は思う。だが――

『文明が未開だからといってその種族を軽んじてはいけない』

フリード星で何度も教えられたことを大介は思い出した。恒星間航行が可能になって以来、フリード星系の人々はアンドロメダ銀河のあちこちの恒星系に出かけていた。行った先で出会う生物種も築かれた文明も様々だった。実際、ファーストコンタクトに失敗して星間戦争に突入したケースは多数あり、科学技術が優れている方が劣っている方を皆殺しにして終わるという後味の悪い結末となることもあった。もつと極端な場合には、生命体としてのあり方があまりにも異なっていたことが原因で、一方がもう一方の存在にまるで気づかずに行動している間に、知らずに相手を絶滅においやつてしまい、後日学者の調査でそのことが判明するといったこともあった。接触した

段階で文明のレベルを超える力に触れたために自滅する場合もあった。こういった歴史に対する反省から、レベルの異なる文明の接触は慎重にしなければならず、その際には文明によって種族の優劣をつけるべきではないという原則が生まれてきたのだ。大介はこの理念を理解してはいた。だが、実際に異なる文明を持つ星で過ごすことになって初めて実感したのだった。

大介を息子にすると言言したが、これまでのところ、宇宙は自身のプライベートな話ほとんどしてこなかった。大介はデューク・フリードの境遇に同情して積極的に慰めたり励ましたりすることもなかった。大介の方は、故郷を失った衝撃も大きく、そのことをどう言葉にしているか、気持ちの整理もつかない状態だったから、当分の間触れられない方がありがたかった。ともかく、双方が予期しない形でファースト・コンタクトをやってしまったわけで、他に意思疎通を図らなければならぬことが山積みになっていた。これまでも、自然とそちらが優先されることになった。これまでのところ、大介が養父の人となりを知るには、何か新しいことがわかったときに宇宙がどう動くのかを見るほかなかった。知性と理性に裏打ちされた恐ろしいまでの自然体――これが、大介が知る限りの宇宙

の姿だった。大介がそれとなくきいてみたところ、他の所員達による専門の評価は「思考が柔軟で判断が早い」だったから、本質的な部分で大きなずれはなかったといえる。

——これから先、父さんたちはどうしていくのだろう？

眼りに落ちながら大介は思った。困難に立ち向かう姿を近くで見ている、なぜか悲観する気持ちを起こさせない人たちであることは確かだった。

● PHASE 5 宇宙科学研究所・地下工場

「——しかし、やってみれば何とかなるもんですね」
林は、ヘッドセットの液晶バイザー越しに、ほぼ組み上がったロケットを見上げている。年が明けて休暇の終わった研究所員達はずでに仕事を始めていた。

「ミッシヨンダイレクター担当としては、そう簡単に『何とかなる』って言うってもらっては困るな。宇宙科学研究所の打ち上げ成功率が他の機関に比べて圧倒的に高いとはいえ、百パーセントじゃないからね。特に今回のような、ミッシヨン機器とバスの両方を同時に変えるなんて場合は、無事に打ち上がって衛星として機能してくれるまでは、とても『何とかなる』

た』とはいえないな。ルーチンワークで打ち上げているのとは訳が違う」

佐伯が、まだ空のままのフェアリングを見上げた。「確かに、他に方法が無かったとはいえ、所長らしくない無茶をしてるな」

『だから、最後まで気を抜いちゃいけないですよ。特に今回は、掃除をちゃんとやったはずだけど、点検は徹底的にやらないと』

隣の部屋から山田がフオローした。

グレンダイザーのために、重量物輸送用エレベータの工事などという土木作業をやったことが原因で、格納庫側には細かい塵や土の粒が大量に散らばった。山田の作業は、探査機本体を組む前に、塵を徹底的に取り除き、精密機械を組める環境を作るところから始まった。現在、入り口にエアカーテンを設置して、簡単なクリーンルーム程度の環境は保っていたが、それでも空間が巨大なだけ、取り残した分があるかもしれない、まだ油断はできない。

「でもまあ、勝算はあるだろう。僕たちが居ない間に、所長が随分作業を進めていたので驚いたよ。正直、このミッシヨンがどこの監督官庁から降ってきたのならば即座に叩き返してるところだが、所長が最初からプランを立てた上で、先陣切って修羅場を乗り切

るつもりでいるなら、いけるかもしれない」

「宇宙科学研究所のミッシェンはいつも鉄火場だからなあ。ところで佐伯さん、所長の趣味がパチンコだった話を雑誌で見ただけだ」

「別に不思議はないね」

「僕がここに来てから所長がそういう遊びをしているのは見たことがないなあ」

「目の前にあるじゃないか、でかいのが」

佐伯は拳を握り、背後のロケットを親指で指し示した。

「これがあ？」

「なかなかの『ギャンブル』だと思っぜ。外した場合は特に」

林は、天井まで届く高さのロケットを見上げた。

打ち上げにしくじって人間の居住地に落下した場合、生じた損害について賠償しなければならぬのだから、パチンコで負けたのとは金額が桁も違うことは確かである。その最悪のケースを避けるために、打ち上げ初期段階で不具合を検出した場合はコマンドを送って自爆させることで対処していた。コマンドが到達するのは、発射台を離れてから地平線あるいは水平線の向こうに消えるまでだから、その間に判断を下さなければならぬ。

「そんなの、ロイズにでも頼めばいいんじゃないか？ ギャンブルはお手の物だろう？」

「あまりにリスクが高いと引受人アンダーテイカーが居ないさ」

「うちの成功率は高い方だと思っけど？」

「打ち上げてこと自体が、まだ保険の対象になるとは思われてないんだろうな」

「地震保険の効かない東京並みかよ……」

「まあ、他に似てるどころかといえば、初速度と打ち上げる方向を決めるだけ、つてところかな」

「確かに、わざわざパチンコ屋に行かなくてもその気分は味わえるか……つと、じゃあ何で相変わらずパチンコが趣味なんだ？」

「こいつは打ち上げて大気圏外に出してしまえば、厳密にニュートン力学の通りにしか動かないだろ。空気抵抗は考えなくていい。ある意味単純だからな。パチンコの方は、摂動は多いし空気抵抗は最初っから考えにやならんし、とにかく複雑なのさ。単純なものばかり相手にしていれば、そりゃあ複雑なものだつて楽しみたくなるつてことじゃないのかなあ」

「……そういうものかなあ。どうもうまく丸め込まれた気がする」

林は釈然としない。

「そのプロフィールが出てた雑誌つて何だっけ？」

「経済関係の一般誌。『東洋経済』や『エコノミスト』みたいな奴だったけど」

「うーん。だとすると、多分リップサービスじゃないかな」

「何でまた……」

「サラリーマン読者向けの演出だろう。大体、ここから一番近いパチンコ屋まで、一体何キロあると思ってるんだい？」

林はこの付近の地図を思い浮かべた。佐伯の指摘通り、山道を降りて松本か諏訪か小諸まで行かないと、パチンコ屋どころか、街中で遊ぶこと自体が不可能である。

『ところで作業は順調かね？』

いきなりインカムから宇門の声が聞こえて、佐伯と林は思わず固まった。今の話をいつから聞かれていたのだろうか？ と顔を見合わせる。

「問題ありません、所長」

林が即座に答えた。

『佐伯君はまだそちらにいるのか？』

「ここにいます、所長。このスケジュールもかなり無理があるので。箱物作って運営のための人員を確保しないってのは公共事業だけであってほしいものですがね」

『まあそう言わんでくれ。私が夕方から交代——』
最後まで言わずに宇門が咳き込んだ。

『——失礼』

「所長、風邪ですか？」

『ああ……大したことはない。今はこの打ち上げを乗り切る方が先決だ。本当なら同時打ち上げをやりたかったのだが、発射台の数も人手も足りん。商業用の方のコントロールの引き渡しは済み次第、探査機の打ち上げの最終チェックに入る』

「わかりました。そのようにシーケンスを決めておきます」

『念のため言っておくがな、佐伯君。ロケット系が万全でも地上系がトラブルを起こしたら、やはり予定通りの打ち上げはできなくなるぞ』

「りよ、了解っ！」

所長の突っ込みが普段より微妙に厳しいところをみると、やはりさっきの会話は丸聞こえだったに違いない、と佐伯は思うのだった。

● PHASE 6 東京・某企業本社

打ち上げの前々日、宇門は依頼者スポンサーを訪問した。

今回の衛星は軌道投入後に依頼者に移管すること

になつており——ということとは、衛星の制御は依頼者がやるわけで、衛星部分については宇門のアドバイスの元で依頼者側が仕様を決めて制作していた。依頼された打ち上げの方は、もともと余裕のあるスケジュールで走っていたから、衛星の制作や制御のチェックはとつくの昔に済んでいた。だが、それでも何かの手違いで本番で動かなければどうしようもないため、ロケットに組み込む前まで念入りの確認とチェックが続けられるのが通例であった。強度計算を間違えて打ち上げの加速で故障して動かなくなったりするのは設計側の計算チェックで防ぐしかないが、設計は合つてるのに製作に使われた材料が違っているかもしれないとなると現物を見ないと確認できない。さらに、充電しておいた電池が打ち上げまでに放電してしまつたため軌道に上がつてから太陽電池パネルの展開ができなくなる、といった種類の事故を防ぐには、打ち上げの直前まで衛星本体をしつこくらいにチェックしておく必要があつた。

朝、研究所から出て電車を乗り継いだ宇門が、本社のある大手町のオフィス街についた時には、既にランチタイムにさしかかつていた。このところ風邪気味だったのにもかかわらず打ち上げの準備にかかりきりで、夜昼なく作業を進めていて休むどころではな

かつたので、一向に回復しない。

「こんなことなら担当者を研究所に呼んだ方が楽だったかな……」

とりあえず暖かい場所で一息入れようと、本社近くの喫茶店に潜り込んでから、宇門はちよつとだけ後悔した。だが、すぐに思い直した。前回、研究所に担当者がやってきて衛星の組み立てやチェックをしたときは、現在、グレンダイザーが置かれているスペースを使って作業していた。だが、今は所員以外は立ち入り禁止である。組み立て工場の方ではもう一基のロケットを組んでいるため、作業できるスペースはない。これでは、担当者を呼んだところで仕事にならない。

宇門は午後に予定された時間の前に、本社で受付を済ませ、指定された会議室に向かった。フロアには大小さまざまな会議室が並んでおり、入り口の表示のいくつかが使用中となつていた。五分ほど待っていると、会社側のミツシヨン責任者がやってきた。

「うちのチームがチェックに参加できなかったのだから心配してました」

「そのかわり、いただいたチェックリストに従つて所員たちが作業を済ませました。ご安心を」

宇門は分厚いファイルを取り出し、責任者に手渡し

た。

「問題なく打ち上げはできそうですか？」

「当初の予定通り、明後日に打ち上げます」

「こちらの追跡準備は整っています。今回は、海外支社のある国の天文台と交渉して、地球の裏側を飛んでいるときも追跡してくれるように依頼しています」

「おそらく、海外の追跡範囲に入るまで飛んでいればほとんど成功だと思います、今回の場合は」

「ところで、十月以降、なかなか所長と連絡がつかなかったのですが、何かあったのですか？」

やはりそれを訊かれるか、と宇門は思う。しかし、本当のことを言うわけにはいかない。

「近くに隕石が落下しまして、その調査にかかりきりでした。それと、あともう一基、うちの観測用に衛星を打ち上げることにしたので、その準備を並行してやっています」

「それで……我々の方の準備は充分できたのでしょ

ね」

エアロスペース・インダストリー
航空宇宙技術工廠としてみた場合、宇宙科学研究所は決して大きいものではない。むしろ、その規模にしては驚異的なミッション遂行能力を持っている、と言った方が正しい。ロケット二基をほとんど同時に打ち上げるなど、研究所の能力を越えているのではな

いかと、担当者が不安になったのも無理はなかった。

「それは大丈夫です。御社のミッションに使っているブースターは、技術としては既に枯れており、安定しているものです。依頼さえあれば、二週間に一度のペースでも打ち上げ可能ですよ。それでも五十回に一回くらいは墜ちるかもしれませんね。安定性においては、まだまだ航空機には及びません」

スポンサーの前で、むやみに安全であることを強調するつもりはなかった。成功率を見積もってあらかじめ告げる方が、技術によるコントロールが効いているとみなされて信頼を得られる。物理法則と技術の限界の前には、希望的観測など無意味であることを、宇門は知っていた。

日程を急かされるのが嫌で依頼者には黙っていたが、依頼された打ち上げは、最初からかなりゆとりのあるスケジュールで動いていた。

「場数を踏んでいるとおっしゃりたいのですね」

「ええ、十分に。ただ、枯れた技術だけを使っていると進歩しなくなります。宇宙へ物を送る技術自体が開発途上ですから。我々も、何回かに一回は、新しい技術を試すための打ち上げをやっています」

「問題なく上がってくればいいんですが……」
担当者は立ち上がり、窓から外を見下ろした。

「何か気がかりなことでも？」

宇門は訊くが、担当者は答えず、そのまま下を見ていた。宇門も近くに寄って、担当者が見えているあたりを眺めてみた。ビル前の歩道はビジネスマンが行き交っているだけである。

「最近、不審者がうろついていることが多いんですよ。たぶん、あそこの路地のところと、向こうのビルのあたりに二人一組がいますね」

言われてその方を見たが、宇門にはよくわからな

い。「たぶん、宇門所長がここにいらしたことも監視されていますよ」

「穏やかではないですな。何か心当たりでも？」

「当社はライバルも多いですしね……産業スパイ対策についてはかなり神経をとがらせているんですよ。ただ、今回は相手がどうもはつきりしないのが気がかりです。相手が会社関係なら大抵は見当がつくのですがね。宇門所長のところに何か迷惑がかかっていなければいいが」

「研究所の方には特に異常はありません。御社の仕事を受けてから新たに加わったメンバーは居ません。それに、周辺は二十四時間監視しています」

宇宙科学研究所に忍び込もうとした場合、正面から

の侵入は高さ百八十メートルのダムをよじ登ることになるし、後ろからの侵入はシラカバ湖に潜って水中に設けられた水路入り口からとなる。水路と、本来の出入り口の道路がある両側は常に監視カメラが作動していた。グレンジイザーとデューク・フリードを保護してからは、特に外に情報が漏れることを警戒していた。

「盗聴や、コンピュータへの侵入の対策はしておられますか？」

「そういうことに強い所員が二人ばかり居りまして、いつもチェックしていますが、異常があつた話はきいていません」

「ところで——これは事前にお願ひしていなかったことなのですが、我々の方にコントロールを移管したあとも、そちらで何かのサポートをしていただくわけにはいきませんか？」

「残念ながら今回は無理です。依頼された衛星が低軌道に上がったことを確認したら、そのまま、次の打ち上げにかかりますので、余裕がありません。相談程度なら応じられますが、カウントダウンの間はそれもご遠慮願ひたい」

「わかりました。しかし随分と急な観測を始められるのですね」

「秋の国際会議には何か新しい報告を出したいですね。さて、私はそろそろ失礼したいのですが」
それ以上細かいことを訊かれる前に、宇門はさつきと本社から立ち去った。

● PHASE 7 宇宙科学研究所・所長室

宇門が依頼者のところから研究所に戻ると、既に日が暮れていた。

宇門は、スーツを脱いでユニフォームに着替えると、机の引き出しから、数日前にまとめてもらった風邪薬を取り出した。解熱剤と一緒に冷たい水で流し込む。椅子に座ったまま真後ろの窓の方を振り向くと、門の照明に照らされた外の景色が目に入った。

外は雪になっていった。天気予報では寒波がくると言っていたが、見事の中したらしい。この分だと打ち上げ当日の発射時間帯は吹雪になるかもしれない。最近では技術が進んだので、よほどのことが無い限り打ち上げスケジュールを延ばすことはしていないかった。

「寒さに対する対策はしてある筈だが……」
ロケットはその大部分が使い捨てである。一回しか使われないものを過剰品質にするのはばかばかしいので、壊れないぎりぎりの耐久性を見極めて設計して

あった。荷重に対する安全係数一・二、エンジンの繰り返し使用回数はせいぜい十回、これ以上の品質は出すだけ無駄だ。当然、急激な温度差によってあちこちにひずみが生じる事態はありがたくない。

雪が激しくなってきた。宇門は依頼者の話を思い出した。監視と妨害があるとすれば、研究所にも及ぶかもしれない。だが、雪の積もった道路と研究所敷地内に人がはいった形跡はない。雪が降れば侵入者の痕跡を消すことになるが、逆に、一定時間は必ず足跡が残ることになる。濃霧でホワイトアウトしない限り、却って発見しやすい。宇門は、戻ってくる間、自分自身に対する監視や尾行について特に注意を払っていないかった。体調が悪くてその余裕がなかったこともあるが、監視されたところで人里離れた研究所に戻るのだから、ついて来ればそのうち目立ってしまう、わかるだろうと踏んでいた。

インターフォンが、ピツと甲高い音を立てた。

『所長、佐伯です。戻っておられますか？』

「何だね？」

『打ち上げ手順を見ていたのですが』

「わかった。すぐ行く。ところで大井君はどうしている？」

『下だと思えますが』

「呼び出して、外からの侵入を特に気をつけて監視するように言ってくれ。カメラとセンサーを増やしてもかまわん」

『わかりました』

仕事の手順を頭のなかで組み立てながら、宇門は所長室を出た。

● PHASE 8 宇宙科学研究所・観測室

「ロケットを発射位置に移動させます」

佐伯がスイッチを操作すると同時に、地下工場では可動床が左右に離れ、発射台とロケットがその姿を現しつづであった。全員待避を意味する赤の回転灯が至るところで回り、ブザーが鳴り響いている。稼働床の移動が止まって一呼吸おいて、超重量物輸送用のエレベータに研究所の電力のほとんどが投入された。一瞬電圧が下がり、照明が瞬くが、無停電電源装置につながっているコンピュータ関係には影響はない。発射台に固定されたロケットが、そのままゆつくりと上に移動を開始する。

「所長、毎度のことながら、打ち上げそのものよりも、実はこの移動の方が技術を要するんじゃないかと思えますよ」

「うむ、宇宙科学研究所は発電所を丸抱えしているからこういう荒技もできるが――」

中央の席にいたまま宇門は宙をにらんだ。

研究所のダムの高さは約百八十メートルで、日本最大の黒四ダムに匹敵する。出力の方は黒四ダムを上回る五十万キロワットに達していた。

地上に現れたロケットは、先に用意されたクロウラーで、研究所裏のシラカバ湖沿いに、シラカバ湖の中心からみて研究所と九十度異なる場所に向かって移動を始めた。この程度の距離があれば、燃料を満載したロケットが万が一爆発しても、研究所に被害は及ばない。

本来、ロケットの組み立てと打ち上げは、広い場所で行われる作業である。NASAだろうと種子島だろうと、広い場所に組み立て工場を建設し、できあがったロケットはクロウラーではるかに離れた発射台に運んで打ち上げている。発射台を離れたところに設けておくのは、万が一爆発したときに、他に被害が及ばないようにするためである。

当初、宇門は、電波天文と地上からの光学観測を中心にやるつもりで、北八ヶ岳の蓼科山中に研究所を建設したのだ。ところが、ミリ波の観測では、後から建設された野辺山が互角の性能を出すようになった。

そこで、宇宙望遠鏡を打ち上げて観測を強化することにした。しかし、周りは山地で研究所はシラカバ湖のダムと一体という構造では、広い打ち上げスペースを確保することができなかった。やむを得ず、ロケットを地下で組み立てて地上まで持ち上げて打ち上げることになった。

そんなわけで、組み立て工場からロケットを発射台もろとも垂直移動させて打ち上げるなどという、常識極まりないことをしているのは、世界中見渡しても宇宙科学研究所だけである。

「机上検査は済んだか？」

「終了しています。最終チェックが終了次第、カウントダウンを開始します」

中央最上部のディスプレイは、ロケットを四方からとらえた映像を表示していた。その下に、左右からスライドするディスプレイがぶら下がっているが、こちらはロケットにとりつけられた各種センサーの出力をまとめて表示していた。普段ならモニターの一部に表示される筈の打ち上げシーケンスは、増設した監視カメラにモニターが取られてしまったため、プロジェクトを使って天井付近に投影されていた。

「所長、依頼者から電話です」

「わかった。こちらへ回してくれ。準備はそのまま続

けるように」

「宇門は電話をとった。同時に目の前のTV会議用のモニターに相手の姿が出る。」

『——順調ですか』

「予定通りです。そちらはどうですか？」

『既に準備を済ませて通信開始を待っていますよ。細かい予定を訊いておく訳にはいきませんか？』

「宇門は佐伯の方をちら、と見た。」

「生憎、うちのミッシェンダイレクターは手が離せません。追跡終了後なら時間がとれるので、そのときに説明させましょう」

『わかりました。成功を祈ります』

通信はそれで切れた。

「いつ頃からカウントダウンを始められそうかね？」

「あと二十分位です」

「——そうか」

所員たちには何も言っていなかったが、宇門は朝からかなり熱があり、立ち上がるのも辛い状態だった。一昨日、風邪気味なのをおして東京まで出かけ、戻ってからほとんど徹夜で後の観測衛星の打ち上げ準備にかかりきりだったので、ますます悪化させてしまったらしい。薬である程度押さえてはいたが、あまり効果があるとはいえなかった。咳もひどいため、所

員たちの気を散らさないようにと、インカムは着けずに左手に持っていった。

「——所長、通信を妨害されてるようですよ」

「うっ……何だね？ 大井君」

こんな時に数回呼ばれるまで反応が遅れるようではいかな、と宇門は頭痛をこらえて振り向いた。

「ですから、妨害電波を出されているようなんですが」

「この忙しいときに誰だ一体？」

「わかりません」

「打ち上げに差し障りはありそうか？」

「何とかなるとは思いますが、かなり邪魔なことは確かです。この距離ならいいんですが、打ち上げた後のテレメトリが途切れる可能性が高いです」

ロケットに搭載した無線には、ECMを打ち破る程の出力はない。

「宇宙科学研究所はこのところずっとノーマークの筈だぞ？ 機械獣だつてやってきたことはない。いや、待てよ……」

「そういうのじゃなくて、これって、人間がやってるんじゃないですかね？」

林はレーダーを注視している。

「異端扱いされた覚えはあっても、実力行使で無線封鎖されるほどの恨みがあった覚えはないのだ

がねえ……誰かが戦略目標の順位の付け方を根本的に間違えているとしか思えんが」

「Dr.ヘルからはノーマークでも、宇宙科学研究所が依頼者の打ち上げを請け負ったことは、人間のやっている普通の企業や団体に知られていますよ」

「打ち上げに成功してもらっては困る誰かがいるということか」

「どうせ、依頼者が、どこぞの誰かを相手に、裏で何か阿漕な商売でもしたんじゃないですかね」

佐伯が振り向いて言う。

「そんなところか——わかった。佐伯君はそのまま最終チェックを続けたまえ。延期の必要はない。秒読み続行するんだ。林君、妨害電波の発信源の見当はつくか？」

「今調べています——」

林がレーダー用のコンソールを叩くのに合わせて、小さな電子音が鳴る。

「——出ました。いくつか研究所の周りに設置したセンサーの信号も併せて判断すると、だいたいこの方向ですね。それに今浴びせられているやつはかなり指向性が強い妨害電波ですよ。明らかに宇宙科学研究所を狙ってきてます」

メインスクリーンの表示が十秒ほど付近の地図に切り替わり、電波の発信源を示した後、再び、打ち上げの情報の表示に戻った。画面左上では、Tマイナスで表示されたカウントダウンの秒数が動き続けている。

「よし、上のアンテナを使おう」

「やる気ですか、所長？」

「文句を言いに行っている時間も無い。アンテナをまとめて妨害電波の発信源に向けるんだ。最大出力で、早期警戒レーダー用のパルスを撃ち込んでやれ。フェーズドアレイも動員して構わん」

「電波望遠鏡で三十パーセク先でも検出できるようなパルスを、せいぜい二、三キロしか離れていない相手に向けようってんですか」

「アレシボの三兆ワットに比べれば、我々の設備などおとなしいものだと思うがね」

「比べる相手はそこですか。本気になるのと所長は怖い……」

最後は独り言のような調子で言っ、林は首をすくめた。

「ところでそっちの方向には他に誰も居ないだろうな？」

「この時期、まず人が入るような場所じゃないですよ。」

それに人目につくところで堂々と妨害はせんでしよう」

「放電しない程度に限界まで出力を上げる。確実に相手をとらえるんだ。立体角が足りなすぎや走査すればいい」

観測ドームの上のアンテナがゆっくり方向と仰角を変えた。電波望遠鏡としての利用が通常であるとはいえ、時には光年単位の距離の星団に信号を送ってSEIを行い、太陽系を遠く離れた衛星の追尾や管制に使われ、防空司令部並みのレーダーにもなる研究所のアンテナは、百メガワットに達する出力を誇っていた。ビームを絞っているときに至近で浴びれば、高出力の電子レンジの中に居ると大して変わらない。

「ファンクションジェネレータをアンテナへの入力ラインに接続。信号パラメータ入力終了。発振しながら向きを少し振ります」

林がスイッチを入れた。増幅器の限界ぎりぎりのエネルギーが叩き込まれ、見えない電波のビームが最大出力で妨害電波の発信源に向かって奔る。アンテナを動かすモーターの響きが一分ほど続いて止まった。

「終了しました。こちらの電波を切って、ロケット追跡の設定に戻します」

「妨害電波、完全に沈黙しました」

大井が目の前のモニターを注視したまま、振り向かずに報告した。

「過負荷で向こうの回路部品の一つでもすっ飛ばしてやれば、妨害の威力も半減するだろうとは思っていたが、どうやらうまくいったようだな。」

「昔、違法無線トランスの改造無線機潰すのによくやった手ですね。ひよっとして所長も経験者ですか？」

林に言われて、今のはそれと同レベルの争いだったか、と宇門は椅子の上にくったりともたれたままで苦笑した。

「こんな時に芸のない電子戦をするとは思わなかったな。まあ、この程度では初歩的すぎてトラブルのうちにも入らん。宇宙屋をなめてもらっては困るな」

「そもそもECMは力押しですから、芸なんて期待するだけ無駄ですよ。ま、宇宙科学研究所の最大出力は改造無線機の比じゃないですからね。まともに食らったらシャレになりませんよ。火傷じゃ済まない。ちやちや電波妨害しかけてくる程度の相手なら、対電子戦防衛なんかしてないでしょうしねえ」

「電子戦つてのは、普通はリーダーと通信を妨害するだけじゃないんですかね。電波で相手を破壊するつ

ても電子戦つーのかと——おっと、始まった」

一分前から、カウントダウンが合成音声に切り替わった。佐伯が、始動手順を読み上げること、シーケンスの表示色が変わっていく。

カウント・ゼロで点火されたロケットは、加速を続けながら、軽く大気圏外へと飛び立っていった。固体ブースターの切り離し完了後、一分たないうちに一段目が燃え尽きた。間を置かず二段目を切り離し、二段目に点火する。

「軌道も姿勢制御も問題なしです。まもなくこちらの可視範囲を出ます。次に通信が復活したときに、依頼者に移管します」

「それなんだが、さつき、詳しい状況を知りたいと電話があった。手が空いたら連絡をとってくれたまえ」

「わかりました——衛星切り離しの信号をキャッチ。可視範囲を出しました」

「小笠原から………続いてマウナケア天文台より入電です。正常に飛行していることを確認、追跡中とのことです。まずは一つ成功ですね、所長」

山田がはずんだ声で報告した。

「移管するまではこちらの責任だからまだ早い………が、こちらでできることはもう無いか。みんなご苦労だった」

宇門はゆっくり立ち上がった。とたんに強烈な頭痛と眩暈にみまわれた。椅子を支えにして何とか姿勢を変えると、ドアに向かって歩き出す。

「――濟まないが、次に可視範囲に来るまでの間、休ませてくれ。少し体調が悪……」

宇門の異変に気づいた所員たちが振り向く。宇門は歩きながらひどい息さを感じて目を閉じ、次に目をあけた時には床が目の前にあることに気づいた。熱を持った体には、床の冷たさが却って心地よかった。「そうか、倒れたのか――起き上がらなければ」とぼんやり考えていたら、所員たちが駆け寄ってきた。

「所長、しつかりしてください！」

「大丈夫ですか？」

「ひどい熱だ……」

林と山田が宇門を仰向けにして上半身を支え起こしたので、宇門は所員たちの上からのぞき込まれる格好になった。

「私なら大丈夫だ。君たちは適当に休憩したら、予定通り次の打ち上げの最終チェックに入ってくれ。全くと、こんな――」

宇門は手をついて起きあがるうとしたが、胸が痛み、息がつまってまた倒れ込む。

「大丈夫じゃないでしょう！　すぐに医者を呼んでき

ます」

林が駆けだしていった。自分の体力の限界位はわかまえておくべきだったな、それにしてももう少し保つはずだったのだが、と宇門は苦り切った表情でつぶやいた。

「ともかく、敵は悪天候だけにしておきたいものだな。大気圏を出るまでの間は」

そんなこと言ってる場合じゃないでしょう、と山田が眼鏡ごしに瞬きをした。

「――そう、人が乗っていなかったとしてもね」

● PHASE 9 宇宙科学研究所・医務室

山田は、佐伯と一緒に宇門を両側から支えて、ほとんど引きずるようにして医務室へと担ぎ込んだ。緊急処置用のベッドに寝かされた宇門は、浅く早い呼吸を繰り返している。

「何かあったんですか？」

カーテンに遮られはいたが、騒ぎに気づいたらしい大介が、医務室の一角から声をかけた。宇門は目をあけ、何かを言おうとしたが、咳き込んでしまつて言葉にならない。

「はあ、所長が、打ち上げの終わった直後に倒れられ

まして、ひどい熱なんです。林さんが今医者を呼びに行ってます」

山田は代わって答えた。

「ええっ！」

大介が、車椅子のまま、カーテンを開けて、宇門の方にやってくる。

「大介をベッドルームの方に移すか、私を別の部屋に移すかするんだ」

「父さん、一体どうしたんですか？」

「近寄るんじゃない、大介」

「しかし——」

「佐伯君、大介をすぐにここから出すんだ。これは命令だ」

「わかりました。大介さん、空いている部屋に案内します」

佐伯が大介に向かって駆け出した。

「ちょっと待ってください」

「大介さん、所長は滅多にこういう命令の出し方はないかたです。理由は後からでもきけます」

佐伯は、大介の車椅子を押して医務室から連れ出しに言った。見送る宇門が少しほっとした表情になる。

山田はタオルを濡らしてきて、宇門の額に載せた。

「本当に大丈夫ですか？ 所長。具合が悪いなら早め

に僕たちと言ってくださいればよかったのに」

「——ありがとう。少し休めば大丈夫だ。君がここに居ても私が治るわけじゃない。だから、次の準備を続けに行ってくれ。スケジュールを遅らせるわけにはいかない」

「所長をお一人にはできません。林さんか佐伯さんが戻ってきたら戻ります」

「林君……？」

「へりで飛び出しましたよ。医者は時間がとれるそうなので、まもなく連れて戻ってくるはずですよ」

「いかん——この雪で飛ぶなど、危険過ぎる。事故が起きたらどうするつもりなんだ！」

宇門はタオルをとって起きあがろうとし、激しく咳き込んだ。血の気を完全に失った顔に腫だけが光り、額から一筋、汗が流れ落ちる。山田は、宇門の背中をさすり、咳がおさまるのを待った。

「落ち着いてください。そう簡単に墜ちるような林さんじゃありません。第一、腕は所長の方がよくご存じの筈でしょう？ それに、うちのパートルは救難仕様ですから、多少の悪天候などものともしません」

へりのローター音が響いてくる。林と佐伯のどちらが先に来るかな、と思いつながら山田は宇門を見つめた。先に戻ってきたのは佐伯だった。

「じゃあ、後をお願いします」

ここに居てもできることはないし、まもなく医者も来るだろう。山田は医務室を出た。

林が連れてきた医者は、宇門に聴診器を当てながら言った。

「大介君が落ち着いたと思つたら、今度は宇門博士の方ですか」

「面目ない。少々無理をし過ぎたようです……」

「少々、どころじやないでしょう？ 来る途中に林さんから話を聞きましたよ」

医者は、血中酸素飽和度計パルスオキシメータを宇門の指先にはさんだ。

「ひどい風邪をひいてしまつた——」

「風邪で済んでりや良かったんですが、見事に肺炎を起こしていますな」

「こんな時に……」

「動けなくなつたのも当然ですな。採血しないと正確な値ができませんが、酸素濃度が正常の三分の一以下になつている。意識がある方が不思議です」

医者は酸素吸入器の準備をし、宇門に半透明の酸素マスクを着けた。

「設備が整つていたのが幸いですね。これで少しは楽

にして差し上げられる。ところで、ここでは十分な検査も治療もできない。搬送は可能のようだし、松本の病院にでも入院なさいませんか？ 紹介状なら書きま
すが」

「それはできません。次に打ち上げが済むまで——あと二日は、どうしても研究所を離れるわけにはい
かない」

「困つた方ですな……」

医者は、シリンジを取り出し、注射を二本打つた。その後、点滴のバツクを取り出し、チューブを取り付け、宇門の左腕に入れ、手際よく絆創膏で固定する。

「原因が菌なのかウイルスなのかで使う薬が違つてきますが、のんびり検査結果が出るのを待つている余裕はありませんから、両方使つておきます。どちらかが当たるでしょう」

「……両方かもしれない」

「心当たりでも？」

「一昨日、所用で東京に出かけたので、何かに感染したとしたらその時かもしれないですね。それで、いつ頃から動けるようになるでしょうか」

「すぐに治るものではありません。数日は安静にしていないと」

「どうにもならんか……。佐伯君、予定通りに次の打

ち上げの準備を進めてくれ。時間を無駄にするな」

「わかりました。ただ、大介さんに状況を知らせておかないと——随分心配していますし」

「大介には絶対に近寄るなど言っておいてくれ。この前は我々が大介を隔離したが、この状態の私は、今度は大介にとって危険だと思う。それから、念のため予防薬を全員に……」

「そのご判断は正しいと思いますが、相変わらず難儀なことですか」

宇宙人は、酸素マスクをつけたまま、顔を林の方に向けた。

「林君、この天候の中を一人で飛んでくれたのだね。私のせいで君を危ない目に遭わせてしまったことになるな。本当に済まなかった」

「私は過去に、もつと危険な作戦を何回もこなしてきましたよ。この程度の雪なら全く問題はありませぬ。それに、山道に行くよりずっと安全です」

「そうか——二人とも仕事に戻ってくれ。依頼者への対応と、次のスケジュール管理は佐伯君に任せる。他の所員たちには、作業に加われなくて済まない、と伝えておいてくれ」

「しかし、それでは……」

「私なら大丈夫だ。これのおかげで——」

と、酸素吸入のマスクを指さす。

「——だいぶ薬になった。そのうち薬も効いてくるだろう。何か異常があつたら遠慮無く叩き起こして報告するように。それと、インカムを持ってきてくれ。所内の状況把握と連絡はここからでもできる。……少し、眠りたい」

それだけ言うと、宇宙人は目を閉じた。

「私がしばらく見ています。一応この囑託ですからね。お二人は仕事に戻ってくださいつかまいませぬ」
医者に言われて、佐伯と林は医務室を出た。

● PHASE 10 宇宙科学研究所・ベッドルーム

佐伯が大介のいる所員用ベッドルームに戻ってきたとき、大介は起きてベッドに腰掛けていた。

「佐伯さん、父さんの具合は？」

「肺炎を起こしてるそうです」

「大丈夫なんですか？」

「医者は、特に何も言ってませんでしたから……：多分、今すぐ手当をすれば命に別状はないってことだろうと」

「様子を知りたい——」

「『近寄るな』というのが所長の命令です、大介さん」

「そんな……」

「この囑託医が付き添ってます。風邪だつてインフルエンザだつて感染の可能性があります。地球人なら治療法などどうにでもなりますし、もともと免疫もそれなりにあります。しかし、大介さんが感染した場合はかなり面倒なことになる、というのが所長のお考えのようです」

『元の宿主と問題なく共生していたウイルスが、種族を越えて感染した途端に致死性のものになってしまったことがある』と、以前暮林に聞かされていたのを、大介は思い出した。宇門が用心しているのは、万が一そういうものに当たってしまったら、手の打ちようがないからだろう。

「そういえば、ここ数日会っていなかった……」

「確かに忙しかつたというのはあると思います。が、所長は、多忙を理由に大介さんを放つておくような方じゃないです。ずっと風邪気味だったので、大介さんとうつしたらまずいと思つて、来なかつたじゃないですか」

「これからどうするんですか？」

「私たちは仕事に戻ります。所長には医者が付き添ってますから」

佐伯はそこで言葉を切つた。

「——考えてみれば、探査衛星打ち上げを決めて以来、所長はほとんど休んでおられませんでした。私たちを先に帰しても、その後、研究所に残つて連日徹夜に近い作業をしておられたようです。元々頑健で管理能力も申し分りした方なので、私たちもあまり気にしていなかったのですが……。ともかく、ここで失敗したら、所長の無理もこれまでの努力も無駄になりますから、予定通りスケジュールに走ります」

佐伯は、大介に、「お大事に」と付け加えて出て行つた。

● PHASE 11 宇宙科学研究所・観測室

佐伯は、観測室のコンピュータ席で、何度目かの軌道計算のチェックをしながら、同時にインカムで作業手順を指示していた。

「次の打ち上げに変更はない。所長が抜けた後の作業手順はもう組み直した。各自の端末に送つておく」

『タービン発電機動作確認終了』。三基とも問題なし。全体の配線変えてたら間に合わないんで、補助エレベータの動力はこれだけで行きます』

「終わり次第移動時のクリアランスをもう一度確認してくれ。これまでとはサイズが違うからな、途中で

引つかかりましたじゃ間に合わないぞ」

『了解』

「圧力センサと歪みゲージは生きてるな？ 上げるときに力のバランスが狂ったらエレベータ本体が崩壊するぞ。気をつけろよ」

『大丈夫、きつちりエレベータ出力にフィードバックさせてます』

「ところで、所長への報告はどうなってる？ 怠つたらまずいことになる」

『林です。さつきインカムを医務室に届けてきました。が……所長、とても起きられそうな様子じゃなかったですよ』

「仕方がないな。緊急事態以外はこちらで処理するしかないだろう」

『山田です。予備のポンプをダム内取水口に取り付けました』

「配管は、発射台固定場所の設備内を通してくれ。この気温だ。一晩外に出したら凍り付くぞ」

『わかってます。あと、普段の撒水設備も少し移動させます。今のままだと噴射の直撃を受けちゃいますんで。サイズが変わったから、いろんな物の配置を変えないといけないですよね』

「任せた。それが終わったら衛星のチェックに専念し

てくれ。打ち上げた方がいいが動作不良じゃ困る」

操作卓コントロール上の電話が鳴った。佐伯はスイッチを操作し、受話器をインカムに切り替えた。

「こちら、宇宙科学研究所コントロール」

『無事に衛星を投入できたようですね。こちらにお願いして良かった』

「直前に妨害電波を食らいましたけどね……所長が対処しましたよ」

『———そうでしたか。で、移管の件で所長と話をしたいのですが』

「所長は目下のところ、体調不良のため静養中です。次に可視領域に入ったら、そちらから好きに触っていただいて構いませんよ」

『あなたは？』

「ミッシェンディレクター担当の佐伯です。で、一つ忠告しておきたいんですがね———」

『は？』

「裏で誰と揉めてるんだか知りませんが、研究所にまで直接妨害をしかけてくる連中だ。本気でおたくのミッションを潰すつもりなら、次に衛星が見えたときに狙って制御コントロールを奪いにくるでしょうね。その方が、ここに誰かを送り込むよりずっと楽だ」

『……嫌なことをおっしゃる』

「ちよつと前に研究所に妙なアクセスがあったので、念のため、こつちは早々と地上系とLANを切り離しちゃいましたかね。ま、用心してください。万一乗っ取られた場合の対処法は、所長が届けたファイルの中です」

実際、宇宙科学研究所のミッシュンが妨害されたのは、これまで一度や二度ではなかった。特に最初の頃は、打ち上げた衛星が地球の周回軌道に乗り他国の上を飛んでいる間に、制御コマンドを送りつけられて機能不全に陥ったり、観測データを消されたりしたことがしばしば起きていた。データを受け取るうとした途端に電子妨害を喰らったこともある。もちろん、この背景には国同士の軍事的緊張が存在していた。本気で攻撃をするというよりも、むしろ、人為的にトラブルを発生させてどう対処するか見てやろう、という目的だと宇門は判断した。「どうやら舐められているらしい。我々は新参者だからね」と、宇門は所員達に言った。妨害に対応するため、宇宙科学研究所は、衛星を制御するコマンドの暗号化や対電子線防御の経験を積むことになった。自前の通信衛星を複数確保したのもそのためだった。ある時期以降、宇宙科学研究所で開発した衛星は、ジャミング信号をキャンセルするシステムを備えるようになった。さらに、い

たずらを仕掛けてくる国に向かって、大きな事故やトラブルを引き起こさない短時間の無線封鎖を軌道上から行うようになってからは、妨害されることはほとんど無くなっていた。各国に対し、舐めてかかっている相手ではない、と思わせることには成功したのだった。

電話が終わるとはほぼ同時に、またインカムから連絡が入る。

『山田です。アクチュエータと制御系のテスト終わりました』

「ちよつと待つて、それは大井君の担当のはずだけど」
『2回目のチェックは山田君と交代しました。人が変わった方が見落としが少ないと思つたので。今度は僕が衛星本体のチェックをしています』

『林です。液体燃料注入用の配管まわりは異常なしです。延長した部分も、断熱はできてます』

『発射台ごと上に上げてからの注入になる。所内の配管とコンプレッサーも見ておいてくれ』

宇門が倒れたので、これ以上体を壊す所員が出ないように、休憩時間はしつかりとってスケジュールを組み直してはみたが、今度は起きている間中これかよ、と佐伯はぼやく。

慌ただしい準備作業は、その後丸二日にわたって続

けられた。

● PHASE 12 宇宙科学研究所・医務室

医者は点滴のバッグを付け替えるとアンプルを切った。

「少し痛みますよ……」

声をかけて、宇門に注射を打ったが、針を刺されても宇門はかすかに眉をしかめただけで反応しない。

「意識不明……つつーよりも熟睡しておられるようですな。一体どんな無理をしたのやら」

ぶつぶつ言いながらデスクに向かって、投薬記録をカルテに書き込んだ。酸素呼吸器のレギュレータと酸素の残量をチェックし、宇門の指先にとりつけたセンサーの値を読む。

「ふむ——酸素濃度はほぼ正常値か。とりあえず間に合ったみたいだな」

つぶやきながら、枕元に置かれたインカムに目をやった。持ち込まれて以来、シャカシャカという耳障りな音を立てて、所員たちの通信が流れ続けていた。

「聞いてないんじやあ無意味ですなあ」

医者はおもむろにインカムを取り上げ、電源をOFFにした。

● PHASE 13 宇宙科学研究所・観測室

——二日後。

組み立て工場から地上に上げるのに、研究所の水力発電だけではなく、非常用に三基増設したガスタージェネレーターは、無事に打ち上げ場所に移動していた。

「準備は進んでいるかね」

宇門が観測室に入ってきた。

「所長、もう起きても大丈夫なのですか？」

山田が振り返った。宇門の顔色はまだ明らかに病人のそれであった。

「これまで一度でも、打ち上げの時に責任者が不在のことがあつたかね？ 最終チェックを始めたまえ」

宇門はそのままゆっくり歩いて中央の席に座り、メインスクリーンを見上げた。最上部のディスプレイの左半分を四分割してロケットを四方からとらえた映像が、右半分に打ち上げシーケンスが表示されている。その下は前回と同じで、ロケットの各種センサーの監視に使われていた。

「レイアウトを変更したのかね、佐伯君」

「ええ、まとめた方が見やすいと思ひまして。ですが、所長、体調の方は……」

「ありがたい、大丈夫だ。これが終わったらまた休ませてもらうよ。とにかくルーチンで上げてるものじゃないし、計画立案をしたのは私だから、最後まで指揮をとるしかないと思ってるね……」

「ロケット系のセンサーに異常ありません」

林がチェックリストを読み上げる。それが途中で止まった。

「電源系に異常発生。電源オンにしたのですが動作しません。故障でしょうか？ 延期した方がいいんじゃないや……」

「いや、故障ではなく正常動作じゃないかな。電源ONの突入電流で保護回路が働いた可能性がある。電源の再投入を何回かやってみる。それでダメなら冗長系を使い」

宇門は即座に判断を下していた。

「やってみます」

林が数回スイッチを操作するうち、正常に電源が入った。

「動作しました」

「機械は組んだようにしか動かん。秒読み続行」

判断と反応の早さは、所員達に、宇門がまだ病人であることを全く感じさせないものだった。

「やってくれる……」

林が思わずつぶやいた。技術開発の最前線では、トラブルシュートの腕が結果に直結する。

「ここまで来たら、先に進んだ方が成功の確率が上がるんだよ。今からやり直すとなると、極低温の液体酸素と水素を抜いての再検査になるだろう。使い捨てを前提にしたヤワな代物だからね。温度変化で生じる配管系のトラブルの方がよっぽど深刻だ」

「充電用およびチェック用のアンピリカルケープルを切り離します。これより、すべてのコントローラーは無線のみとなります」

いつも通り、十分前からカウントダウンが始まった。各研究員の前のモニターに、JSTの時計と並んでMissions時間^Mの値がマイナス符号で表示されている。六十秒前から、カウントダウンは音声による読み上げに自動的に切り替わる。

「アクチュエータ用電源起動」

カウントダウンに重なって佐伯の声が響く。

「メインエンジンスタート」

スリ、ツイ、ワン、ゼロ、イクニッション。
——三、二、一、〇、点火。

「補助ブースター点火——離昇」

途中で燃料をカットすれば停止が可能な液体燃料のエンジンとは異なり、固体補助ロケットは点火したら最後消す手段がないため、メインエンジンの始動を

確認してからの点火になる。

補助ブースターの点火の直後に、発射台にロケットを固定していた爆発ボルトが吹き飛んだ。メインエンジンとブースターの全推力を叩き付けて、ロケットがゆっくりと上昇を開始した。発射台や周辺の地面が焼け付くのを防ぐために張った水と降り積もった雪が、水蒸気となつて吹き飛ばされ、山岳地帯の低い気温ですぐに凝集して大量の白煙を上げる。白煙で覆い尽くされた中からロケットの先端が見え始め、ブースターの炎と白い噴煙を見せながら上昇していく。

「タワークリア。軌道を追跡します」

メインスクリーンが、ロケットの予想軌道を青で表示した。カウント・ゼロからの経過時間が、百分の一秒単位でプラス符号を付けて表示されていくのと同じに、実際に飛んでいる軌道が赤で上書きされていく。

「……ここまで大きい物を打ち上げるとなると、さすがに加速が遅いな」

七十秒後にブースターが燃え尽き、二秒をおいて四本とも切り離された。百二十秒後、第一段目を切り離し、ロケットは加速しながらなおも上昇を続けていく。

「全センサー、異常なし」
オレ・ブリー

「指令破壊の必要はなさそうだな、佐伯君。だが、第一段は酸素水素よりケロシンの方がいいかもしれないな。NASAの最新方式でやってみたが、もう一度考え直した方が良さそうだ」

「第二段、切り離しました。まもなく可視範囲を出ます。今回は宇宙科学研究所の単独ミッションなので、他の研究機関による追跡はありません。次にコントロールできるのは当初の計画通り七時間ほど後になります」

「では七時間後に連絡してくれ。ご苦労だった」

所員たちは、各自の位置で、モニターを切り替えたり次の追跡の準備をしたりといった作業を始めた。数分後、医者が観測室に駆け込んできた。

「宇門所長、病室を抜け出されては困ります。しかも、点滴と酸素吸入を勝手に外したりしては。まだ安静にしていなければならないのに」

宇門の返事は無い。立ち上がった所員達と医者が見たのは、椅子の背もたれをリクライニングにし、正面のメインスクリーンを見上げたままの姿勢で眠っている宇門の姿だった。

MISSION 3 Surveillance

● PHASE 1 宇宙科学研究所・医務室

大介が、骨折の固定用に埋め込まれた金属板とピンを抜く再手術を受けた時には、既に二月に入っていた。秘密を守るため、前回と同じように、宇門と暮林が手伝った。生物災害の危険はなさそうだということとで、今度は医務室に無菌 TENT を設置して手術室にした。暮林の実験が進んで、地球人に使用可能な薬剤の多くがそのまま使えることがわかっていたので、手術中を含め、その前後の管理もかなり楽になっていた。

「大介の具合はどうでしょう？」

宇門は、大介が医者に診察されているのを注意深く見守っていた。医者は、傷口を消毒しながら両足と右腕を軽く触って反応を見ていた。制限された動きしかできなかつたため、骨も筋肉も痩せてしまっていた。

「まあ、まだ一週間ですし、あまり焦らないことです。歩く訓練をするにしても、もうちよっと力が出せる程度に治つてからでないと、また怪我をしてしまうかも

しれません。使わない部分が弱つてくるのは地球人と同じですな」

「わかりました。確実に回復するなら時間がかかってもかまわない」

「そういうふうと考えていただければ結構……勿論、所長ご自身についてもね」

医者は、ついでに宇門に釘をさすことも忘れなかつた。

「いや、あれは体力を過信したのがいけなかつた」

「あと少し手当が遅れたら命が危なかつた。窒息死するところでしたよ」

「所員たちに、そうそう無理をさせられなかつたのでね。今後は気を付けます」

「そう願いたいものですね」

大介が宇門の様子を見ているのに気づいて、宇門は大介の方に向き直つた。

「大介、ゆっくり養生しなさい。私の方も一段落したので、少し落ち着いて付き添えるようになったからね」

その夜、大介はそつとベッドから起きあがつた。医者からの指示は当分無さそうだったが、歩行訓練を試みようと思つたのだ。使わない部分が弱るとい

のなら、何もせずこのまま寝ていたのでは弱る一方なのではないか。それなら、傷つけない程度に使つてみた方が良いのではないか、と考えたのだ。

付き添いの宇門は、カーテンで仕切つた向こうのベッドで寝息をたてている。宇門が気づいたら、きつと、無理をするなど言つて止めるに違いないから、気づかれないようにしなければならぬ。

試しに、足を床に着けて、左手でベッドの縁につきまちながらゆつくりと立ち上がつてみた。傷と、十分動かしていなかつた関節の両方に痛みが走つた。手を離すと、体重のすべてが足にかかり、痛みは激痛に変わった。ここで不用意に倒れたら治りかけの部分を傷つけるかもしれない、と必死で耐える。うめき声を立てるわけにもいかず、大介は歯を食いしばつた。息を詰め、しばらくそのままの姿勢でいたら、体の方が慣れたのか、少し痛みがおさまつてきた。しかし、一步を踏み出そうとしても、どうしてもできない。片足で体重のほとんどを支えるほどの力はまだ無かつた。大介は、とりあえず歩くことはあきらめ、両足に均等に荷重したまま立ち上がるという動作を繰り返すことにした。

もう一度ベッドに腰を下ろした。息を整えつつ宇門の方を伺つてみたが、気づいた様子はない。

——僕を助けて保護し、ベガ星侵攻の話をもとに信じてくれた父に対し、まだ自分は何もしていない。激務で倒れたとき、父は僕の方を最優先にした。僕は、看病を手伝うこともできなかった。そして、再手術が終わつてからは、また父が付き添つてくれている。打ち上げの騒ぎが一段落したとはいつても、他に仕事もあるはずなのに……。もうこれ以上、迷惑はかけられない。普通に暮らしていくにしても、まずは普通に動けないと駄目だ。

大介は氣力を振り絞つて、もう一度両足でゆつくりと立ち上がった。前回で慣れたのか、少しは痛みが軽いようであつた。結局、この夜は、五回ほど立ち上がる動作を繰り返して眠りについた。

翌日から、宇門が眠つたのを見計らつて大介はそつと起き出すようになった。最初の三日は、その場で立ち上がるだけであつた。

四日目、大介は、立ち上がったあと、左足にゆつくりと体重を移していった。力をかけてみると、痛みが増すのは仕方がないとしても、体重を支えるために力を入れた反作用をほとんど感じる事ができず、いかに頼りない。何とか右足を動かせる程度まで左足を踏ん張ると、引きずりながら右足を半歩前に出

した。そのまま今度は右足にゆっくり荷重していく。同じように左足を前に出したときには、一分ほどかかっていた。

大介は、再び両足で立つて、周りを見渡した。床近くに取り付けられた『非常口』を示す緑のライトだけが、部屋をぼんやりと照らしている。普通に歩けばせいぜい十歩ほど、目の前に見えている入り口が、とてつもなく遠い。

——少しでも前に進めたのなら、入り口までは行けるはずだ。

両手を広げてバランスをとりながら、大介は再び歩き始めた。目標は、医務室の入り口まで行って戻ってくることに。ただ歩くためだけに、これほど神経を集中したことなく、これまでになかった。二十分かけて、大介は医務室入り口までたどりついた。体のあちこちに力を入れたため、汗で背中が濡れている。大介はドアにもたれて休んだ。医務室は暖房がなされているが、廊下はそれほどでもない。ドア越しに、外の冷気を背中を感じた。最初は気持ちが悪かったが、だんだん冷えてくる。大介は、今度はベッドに向かって歩き始めた。

戻る方が多少は楽だった。動かしたことによって筋肉や関節が多少はほぐれたのか、痛みを感じる場所

が減ってきていた。足に力が入らないのは仕方がないとしても、この不自由な体で歩くことそのものに慣れたのか、徐々に、よけいな力を使わずに動けるようになってくる。それでも、ベッドにたどり着いた時には、また汗だくになっていた。宇門の様子を窺い、変わりのないことを確認してから、そのままベッドに潜り込んだ。

——明日の夜、またやってみよう

体を動かしたことが良かったのか、眠りに落ちるまでに、時間はかからなかった。

それからさらに五日後、医者は再び大介の状態を調べた。大介は、医者に向か言われるかとおもいながらも、夜の歩行訓練のことは黙っていた。宇門は当然気付けておらず、心配そうに診察の様子を見ていた。

「少しは回復しているといんですけどね」

言いながら、大介の足首を引っ張った。痛む、と思った大介は反射的に足に力を入れる。その手応えを医者は感じ取った。表情に驚きが広がる

「こりやまた随分回復しましたねえ——」

「本当ですか、先生」

宇門の声ははずんでいた。

「これならもう、本格的に歩く練習を始めても大丈夫

ですよ」

「良かった……これでやっと先が見えてきました」

宇門は、大介に、心底ほっとした笑顔を見せた。毎夜のトレーニングを隠していることが少しだけ心にひっかかつてはいたが、大介もまた微笑み返したのだった。

● PHASE 2 シラカバ牧場付近・林道

二月下旬のとある土曜日。牧葉ひかるは、久しぶりに宇宙科学研究所に行ってみることにした。たまたま、学校の宿題で出されたレポートの資料を借りようと思ったのだ。

ひかるは、シラカバ牧場の経営者の一人である牧葉団兵衛の長女で、八ヶ岳学園の中学三年生である。長すぎない髪、よく動く目、スポーツ万能の滄刺とした少女だ。所長の宇門がシラカバ牧場の共同経営者であるため、休みの時は、宇門邸や研究所へよく遊びに行っていた。いつも、遊びに行く前に宇門に電話を入れていたのだが、ここ数ヶ月は、電話を入れても宇門がつかまらなかったり、打ち上げ準備で多忙だと言われたりで、とても遊びに行けるような状態ではなかった。

昨日、電話を試してみたら、久しぶりに宇門が出た。

「長いことろくに話もできずに済まなかったねえ。こちらの作業も一区切りついたし、ぜひいらつしやい」

以前と変わらぬ穏やかな宇門の声をきいて、ひかるは少しほっとした。夏休みが終わる頃までは、宇門の方も時々シラカバ牧場を訪れて、仕事を手伝ったり、団兵衛と話し込んだりしていたのだ。しばらく会っていないかったが、変わりはないらしい。

シラカバ牧場の前の細い道は、右に行くと荒野牧場に、左に向かって白樺の林を抜けていくと宇門邸があり、さらに原生林の中の曲がりくねった道を進むと、やがて、研究所の入り口に着く。シラカバ牧場の前で斜めに分かれている広い道は県道に通じる道で、普段の通学にはこちらを通っていたから、通学途中で研究所の様子を見ることはできなかった。

今年の冬も例年通りに寒波がやってきて、研究所への道は完全に雪に覆われていた。除雪をする代わりに、研究所の特殊バスが一日数回はシラカバ牧場近くまでやってきていたので、圧雪されて、それなりに歩きやすい雪道が研究所まで延びていた。そこを、馬にまたがってひかるは進んで行った。

宇門邸の前でひかるは一旦歩みを止めた。馬から下り、玄関へと進んだ。雪が玄関まで積もっており、

除雪した形跡はない。郵便物の配達と回収は行われているらしく、ポスト付近に向かって人の歩いた跡が残っていた。窓やベランダは、降り積もった雪に覆われたまま凍り付いていた。誰かが暮らしていれば暖房で内部の気温が上がるので、完全に凍り付いたままにはならないはずである。建物全体が完全に冷え切っている、とひかるは感じた。おそらく、当分の間、宇門はここに戻ってきていない。忙しいという話は事実で、研究所にずっと泊まり込んでいるのだろう。

「宇門先生は一体どうなさったのかしら？」

ひかるはつぶやきながら、再び馬にまたがり、研究所に向かって歩きだした。

● PHASE 3 宇宙科学研究所

ひかるは、研究所にたどり着くと、馬を門のところにつないだ。研究所の構内は除雪されている。観測ドーム下の玄関を通って、エレベータで観測室へと向かった。観測室では林と山田が作業中で、宇門は居なかった。

「林さん、宇門先生はどちらに？」

「ひかるさん、お久しぶりです。昨日は所長自ら当直で観測や作業をしておられて、今朝交替したばかりな

んですよ。所長室にいらつしやいせんか」

ひかるは、資料室の隣の所長室に向かった。軽くノックしたが宇門の返事はない。そつと所長室の扉を開けた。

「まあ」

中を見たひかるは、小さな声をあげた。

入り口近くの応接セットのソファの上で、宇門が横になっていた。ユニフォームのまま毛布をかぶって眠っている。机の上には、資料や英文の文献のコピーが散らばっていた。部屋の電気が点きっぱなしの上、資料を手を持ったまま胸の上に置いて見ると、読みながら眠ってしまったらしい。

「きつと、徹夜明けで疲れてらつしやるのね」

ひかるはそつとドアを閉めた。

眠ったばかりのところを起すのは気の毒だから、宇門と話をするのはもうちよつと後でもいいだろう。それまでどうやって時間をつぶそうか、と考えた。これまで何度か研究所に遊びにきたことはあったが、所長室と観測室と資料室位しか見ていなかった。工場やその他の実験室があると話にはきいていたが、危険も伴うので、気軽に入り込める場所ではなかった。

ひかるは、時間つぶしに散歩でもしようと思った。とりあえず、観測ドームの非常階段へと向かった。非

常口のドアを開けて、階段を降りていった。踊り場について曲がった瞬間、誰かが登ってきた。

所員のユニフォームではない、というのが、最初に気付いたことだった。茶色のズボンと上着に、黄色いシャツを着た青年だった。その足取りから、体が不自由なのだとかかった。青年は、踊り場の所まで来ると、ひかるに軽く会釈し、向きを変えて降りていき、下に着くと再び上がってくる。

「所員の方ですか？」

「いえ、違います」

青年は歩くのをやめずに答えた。ひかるの立つている踊り場まであと二段、というところで、足がもつれて跪いた。ひかるは思わず駆け寄り、手を差し出す。

「大丈夫ですか？」

青年が顔を上げ、まともに目があつた。栗色の髪と碧い瞳、鼻筋の通った整った顔、日本人よりあきらかに白い肌から、白人か白人とのハーフではないかとひかるは思った。年齢ははつきりわからないが、ひかるより数年は年上らしい。

「ええ、ありがとう。あの……名前がわからなくて」

「牧葉ひかるです」

「ありがとう、ひかるさん。僕は大介。ところで、牧

葉っていうと、牧場の人？」

「そうです。でもなぜそれを？」

「父さんにききました」

この年代の息子が居るような所員つて一体誰だろう、とひかるは不思議に思った。ひかるの知る限り、所員たちはみんな二十台後半から三十代である。それでも、所員全員を知っているわけではないし、初対面でプライベートなことを詮索するのは憚られた。

「それで、大介さんはここで何を？」

「歩く練習をしていたんです。怪我をして、しばらく宇宙科学研究所で手当を受けていたのですが、まだあまり自由に動けなくて」

「そうだったんですか。済みません、お邪魔してしまつて」

大介の額には汗が滲んでいたところを見ると、しばらく前からトレーニングしていたらしい。ひかるは軽く会釈すると、そのまま下に降りた。

観測ドーム入り口の自動ドアが開くと、冷たい空気が一度に流れ込んでくる。ひかるは、外に出て右側に向かって歩き、研究所の裏側に回った。

積もった雪が音を吸収するためか、あたりは静まりかえっていた。シラカバ湖は波ひとつ立てずに水を湛えていた。青い水面をみていると、不意に、さつき

の青年を思い出した。この湖のように静かな瞳だった。

しばらく佇んでいたが、寒くなってきたので研究所に戻ることにした。再びエレベータで観測ドームに上がり、所長室に向かった。軽くノックすると、今度は返事があった。

「ああ、どうぞ」

「おじやまします」

ひかるはドアをあけた。ソファから起きあがったばかりの宇門と目があつた。

「どうも、こんな状態で失礼」

「お気になさらないでください。徹夜明けなんですよ？」

宇門は毛布を手早くたたんで脇に置き、散らばっていた資料や論文をまとめて机の端に寄せた。ひかるは、宇門と向かいあつて座つた。宇門は立ち上がり、コーヒーを淹れてひかるに勧めた。

「久しぶりだね。牧場祭以来だ。今日はどうしたのかね？」

「学校の宿題で出たレポートの資料を貸していただけないでしょうか。それから、父が、しばらく先生を見かけてないので様子を見てくるように、つて」

ひかるは、課題について説明した。宇門は隣の資料

室に続くドアを入り、すぐに何冊かの本を持って戻ってきた。

「これを持って行きなさい」

「ありがとうございます。ところで、最近、どうなさっていたのですか？ 牧場の方にもちつともいらつしやらないし、お正月もずっと研究所だったのですか？」

「この半年近く、非常に忙しくて、ずっとこちらに泊まり込んでいたよ」

「さつきみたいにこの部屋で？」

「いや、寝る暇もなく作業をしていたら、年明け早々に体調を崩してしまつてね。それからは、休める時に休んでおくことにしている」

だから今日も約束した時間まで休んでいたのか、とひかるは納得した。

「研究者つて、みんなそうやって泊まり込みで仕事をしてるんですか？ それに、もう体の方はいいんですか？」

「私の仕事はやつた分だけ自分の成果になるからね。体の方はもうすつかりいいが、具合が悪くなつたのが仕事でだったから、所員たちに迷惑をかけてしまつた」

「何か困つたことがあれば、声をかけてくださいね。」

お手伝いしにうかがいますから」

先生、と呼んではいたが、ひかるにとつては、子供の頃からよく知っている宇門は親戚のおじさんのような存在である。物心ついたときから、ひかるは、宇門が優秀な科学者であるということをお父の団兵衛からきかされていた。団兵衛もまた、UFO発見を狙ってしょっちゅう天体望遠鏡を覗いていた。

以前、ひかるは、団兵衛と宇門がやっていることは一体何が違うのかと、宇門に尋ねたことがあった。

もともと天体観測はアマチュアの出番の多い分野で、博物学的天文学では、団兵衛のような人たちが主力となつて活躍しているという。一方、プロがやっている天文学はむしろ宇宙論と同じ内容を意味している。宇宙の構造や宇宙を記述する理論的枠組みを作ることを目指しており、観測は目に見える光だけなく、全ての波長に対して行われているということだった。研究の最前線では、原子よりもっと小さな世界と宇宙のようなとてつもなく大きな世界の区別がなくなつていて、両方を同時に記述できる統一理論を作るレースが行われているのだ、というのが宇門の説明だったが、ひかるには内容の想像もつかなかつた。

団兵衛が普通の家庭を持ち、のめりこんでいるとはいえ観測はあくまでも趣味なのに対し、宇門は研究一

筋に妻子も持たず、他のことにはかまわず純粹かつ強靱な思考力で宇宙の彼方に切り込んでいつているように見えた。これが、プロとアマチュアの差なのだろうとひかるは感じていたのだった。

「ありがとう。ところで、近いうちにそちらに行くつもりだ。団さんにお願ひがあるのでね」

「父も喜ぶと思います」

ひかるは、宇門に礼を言つて、牧場へと戻つた。

● P H A S E 4 シラカバ牧場

雪も多少は減つてきた三月の半ば頃、宇門は大介を伴つてシラカバ牧場へ行くことにした。

大介は完全に回復していた。宇門は大介をジープの助手席に乗せた。

「そうだ、忘れるところだったが、これを返しておこう」

宇門はスーツのポケットを探つた。乾いた金属音を立てて、二種類のペンダントを取り出した。一つは茶色つばい色で複雑な彫刻が施されており、もうひとつは緑の台に一体となつて青い石が埋め込まれていた。

「治療の邪魔になるので、外した後、滅菌して保管し

ていたのだよ。大事なもののなのだろう？」

言いながら大介の手の上に乗せた。大介は頷いてうけとると、首にかけ、シャツの内側にしまい込んだ。宇門邸を過ぎると、シラカバ牧場はすぐだった。宇門は、牧場入り口を入り、サイロの脇に車を停めた。そのまま奥に進み、まず、右側にそびえる給水塔を見上げた。思った通り団兵衛はそこに居て、天体望遠鏡で空を見ている。

「団さん」

「あ、これは宇門先生。久しぶりですなあ」

団兵衛は、給水塔から滑り降りてきた。

「みんなを集めてくれませんか。会わせたい人がいます」

「ひかる、吾郎、こつちへ来なさい」

団兵衛が大声で、家に向かつてよびかけた。

「お父さん、一体何です？」

「お父上、大声ださなくても聞こえますよ」

ひかると吾郎が出てきた。宇門は、大介の肩にかかる手をやって、三人を見渡した。

「団さん、ひかるさん、吾郎君。紹介しておこう。これが私の息子の大介です」

「ありゃあ、宇門先生は独身ではなかったんですか？ 一体いつの間に？」

団兵衛は、大介を上から下までじろじろと眺めた。次に、大介と宇門を見比べて、しきりに首をかしげている。無理もない、と宇門は思った。大介の外見は、どう見ても西洋人のそれである。

「まあ、それじゃあ、息子さんって、宇門先生の……」
ひかるはそれだけ言つて口をあげたままである。宇門の方は「へえ……」と言つたきり、ひかると同様にぼかんとしていた。宇門はそんな牧葉一家を見て、目を細めて少し笑つた。

「まあ、私も、海外に居たときにいろいろありましてね。最近になつて、大介が事故で怪我をしたことがわかつたので、研究所の方で手当をしていたのです。これからは、一緒に暮らすことにしました」

宇門は、のんびりした口調で牧葉一家に説明した。「大介には、主に牧場の仕事をしてもらおうと思つています。時々は研究所の方も手伝ってもらいますからね。どうかよろしくお願いします。牧場の仕事は初めてなので、いろいろ教えてやってください」

大介が一步前に出て、団兵衛に手を差し出した。「宇門先生の息子さんですか。初めまして。ワシや、牧葉団兵衛と申します。いやあ、驚きましたぞ宇門先生。息子がいたことをどうして今まで黙つとつたんですか。水くさいですぞ。ワシがテキサスに居た頃、

一緒にやっていたカウボーイに、ちやうどこんな若者が居ったが……」

吾郎が、話し続ける団兵衛を押しつけて前に出て、手を差し出した。

「お父上の話はいつも長いんだから。初めまして、大介さん。僕、吾郎っていいます」

「よろしく、吾郎君」

大介は、屈んで握手を交わした。その後、ひかるの方を黙って見つめた。

「よろしく。でも、この間は、まさか宇門先生の息子さんだなんて思ってもみませんでしたわ。てつきり所員のどなたかだと……」

「おや、二人は既に会っていたのかね？」

「このあいだ先生のところにお邪魔したときに。でも、ほとんどすれ違っただけでした」

「さあさあ、ひかる、歓迎パーティーの準備をしなさい。先生も大介も中に入って。今晚は、牧葉家あげて歓迎しますぞ」

団兵衛は先に立って家の中に入っていく。吾郎とひかるがそれに続いた。それを見送って、宇門は、大介の方を向いた。

「いい人達だろう、みんな」

「ええ」

「仲良くやっておくれ。これから先、ずつと一緒に仕事をするのだからね。ただし、お前の正体を明かすわけにはいかなから十分注意するようにね」

「わかりました」

● PHASE 5 牧葉家

その夜、大介の歓迎パーティーが牧葉家で行われた。食堂のテーブルには料理と酒が並べられ、団兵衛が乾杯の音頭をとった。

大介は、さっそく吾郎につかまっていた。吾郎は、「お兄ちゃんができたみたいだ」と大喜びで、学校であつたことや友達のこと、先生にほめられたことやしかられたことなどを熱心に話していた。大介は相づちをうつて興味深そうにきいていた。そのうち、早々と食事を済ませた吾郎に「向こうでランプでもして遊ぼうよ」と居間に引つ張られていった。

宇門の方は団兵衛の相手をしていた。団兵衛は、早々と酔っぱらって、宇門に酒を注ぎながら「息子がいることを隠していたのは水くさい」「正月も研究所にこもりきりでちつとも牧場に顔をみせなかつた」などと延々繰り返した。宇門としてはそれを素直にきいて、その都度「いろいろあります……」「本当に

打ち上げて忙しかったんですよ。大介の手当もありましたし」などと言つて、団兵衛をなだめるほかはなかつた。結局、団兵衛のペースにつきあつて飲み続け、酔いつぶれた団兵衛がそのまま眠り込んでしまつてから、やつと解放されたのだつた。

ひかるは、そんな様子を微笑みながら見ていた。久しぶりに客人を迎えてにぎやかな夕食になつたことがうれしかった。大介に関しては、黙々とリハビリをこなす姿を見ただけで、ほとんど何も知らない。が、吾郎がすぐになついたのを見て、いい人なのだと思感で理解したのだつた。

ひかるは、簡単に後かたづけをして、眠つてしまつた団兵衛に毛布をかけた。居間に行くと、大介と吾郎がランプで遊んでいた。宇門が窓の外のペランダに佇んでいるのが見えた。ひかるはペランダに出た。よく晴れた夜だつた。ペランダの隅に残つた雪が凍り付いていた。

「どうなさつたんですか？」

「星を見ているのです。こんな夜は、団さんの望遠鏡を使うには、絶好の条件なのですが、眠つてしまわれたのが残念ですね」

「父がさんざん無理を言つたようで、どうも済みませ

ん」

「団さんは情に厚い方だからねえ。実際、だいぶご無沙汰していたので、今日は団さんにとことんおつきあいするしかありませんでした」

「中へ入らないのですか？ だいぶ冷えていますけど」
「少し風に当たつていたいですよ」

宇門は手すりにもたれて立ち、肩で息をしていた。団兵衛にずっと付き合われていたので、ここで酔いを醒ましていたらしい。団兵衛と宇門が酒を酌み交わしていることはしばしばあった。ひかるが知つている限り、団兵衛の方が酔つぱらつて同じような会話を繰り返して最後には眠つてしまうのと対照的に、宇門はそれほど酔わない量に抑えていることが多かつたし、そうでない時であつても乱れた姿を見せたことなど一度もなかつた。

部屋の中から吾郎の歓声が聞こえてくる。

「大介は、吾郎君に気に入られたようだね」

宇門はわずかに目を細めた。

「そういえば、大介さんのお母様つてどんな方だったのですか。宇門先生の若い頃のロマンズもきいてみたい気がしますわ」

宇門は相変わらず星空を見上げたまま、どう答えるか迷つているようであつた。

「済みません、立ち入ったことを訊いてしまつて」

宇門がゆつくり振り向いた。だが、ひかると目を合
わそうとはしない。

「いや、かまいません。ロマンスだと思つてもらえる
のなら、それはむしろ喜ぶべきことなのだろうね。私
は、今まで息子を放つておいて無責任だ、と非難され
るのではないかと思つていた」

「そんな……」

「そうだな——もし、最初から存在を知つていたな
ら、息子を放つておくような真似はしない。決して」

宇門は、慎重に、ゆつくりと、自分自身に言い聞か
せるように語つた。いつもの明晰な口調とは明らか
に違つていた。よほど複雑な、あるいは説明しがたい
事情があるのではないだろうか、とひかるは思う。

「きつと——そうなのでしょうね。詳しい事情を説明
するのが辛いことなら、無理にはききません」

「ありがとう。私は、大介には、この先ずつと平穩な
暮らしをさせてやりたいのだ」

「大介さん、何かあつたんですか？」

「私から詳しくは言えないが、戦争の中で地獄を体験
してきたようだ。だからこそ、普通に働いて普通に生
きられる平和な暮らしをさせて、忘れさせてやりたい
のだ」

宇門は、ひかるの方を向いて一礼し、助けてほしい
という表情でひかるをじつと見つめた。宇門に、真
面目に頭を下げられたことなどこれまでになかった。
先生は、本気で大介さんのことを考えているのだ、と
ひかるは思った。事情をうかがい知ることができない
ものの、宇門は確かに真実を語っていると信じたの
だった。

● P H A S E 6 宇門邸

大介が、宇門と一緒に、牧葉家から戻つてきた時に
は、既に夜の十時を回つていた。ひかると吾郎は、特
に大介に対して牧葉家の方に泊まつていくように薦
めた。しかし、牧葉家の客間には一人しか泊まれない
し、宇門が久しぶりに自宅に戻る日でもあつたの
で、礼を言つて退出してきたのだった。

しばらく戻つていなかったため、部屋はどこも冷え
切つていた。

「今、暖房を入れるから、少ししたら暖かくなるよ」

燃料その他必要なものは運び込んであつたが、片付
ける時間もなかつたらしく、空いた場所に積み上げら
れていた。

「牧葉さんのところに泊まつていた方が楽だったかも

「しれないねえ、大介」

「はあ……」

「私の家に来るのはこれが初めてだったね。部屋を用意しておいた」

「言いながら宇門は扉を開けた。」

「いいんですか？」

「なあに、一人で住むには広すぎる程だよ。王宮に比べたら狭いだろうがね」

「そんな……十分ですよ」

「ベッドと机と本棚は注文してあったし、搬入の前に簡単に掃除機くらいはかけてあったのだが、長い間留守にしていたからね。配置までは手が回っていないのだよ。『楽』と言ったのはこのことなんだが、とりあえず簡単に家具を置いてしまおう」

家具の配置を終えると、宇門はテレビを運び込んで、ケーブルと電源を接続した。

「これで、退屈しなくても済むだろう。他に必要なものがあったら言いなさい。追々そろえていけばいいだろう」

大介は、宇門に連れられて各部屋を回り、どこに何があるかを教わった。シーツと毛布と簡単な着替えを抱えて、大介と宇門は、一緒に大介の部屋に戻った。「何でも自由に使ってかまわないよ。見ての通りで、

五人家族でも十分余裕を持つて暮らせる広さなのでね。もつとも、地球の——日本人を基準にした場合だが」

「王宮が特別だっただけで、フリード星でも普通の人が入っている家の大きさは、地球とそんなに変わりませんでした。ところで、父さんはずっとひとり独身なのですか？ 父の……フリード王と同じ位の年齢に見えるのですが」

「一人で過ごしてきたよ」

「牧葉さんのように、結婚して家庭を持つ人の方が多いのに、どうしてです？」

「ずっと宇宙だけを見続けてきて、気が付いたら今になつていた。ただ単に、結婚を考える暇が無かつたのだろうな。私がやった仕事の成果は観測データ共々後に残る種類のものだから、その上、敢えて自分の子孫を残したいとも思わなかつた」

「寂しくは……なかつたのですか？」

「一日二十四時間という物理的制約と、私自身の能力の限界以外には、研究を妨げるものなど何一つ無いと信じてこれまで生きてきた。だが、もし、普通に結婚して家庭を持つていたら、お前位の年頃の息子が居たかもしれないね」

大介の見かけは二十歳程度だから、実の息子であれ

ば、宇門が二十台後半から三十台前半の頃にできた子供ということになる。この年齢の頃、宇門は既に学位を取得しており、海外の研究機関をあちこち回って活動していた。

「なぜ、僕を息子に？」

「私の息子という立場は、お前の正体を隠すためには最良の選択だと考えたからだ。だから、人前ではそう振る舞ってほしい。その方が余計なトラブルを起こさずに済むだろう。私は、父親として必要なことは全てするつもりだが、お前に対して、心まで息子になりきれと求めるつもりはない。既に亡くなられたとはいえ、その年齢まで実の父に育てられたのだから、今更、他人の、しかも異星人を父だと思うには無理もあるだろう」

宇門はそこで言葉を切った。

「どうするかはお前が決めればいい。明日から牧場の仕事も始まるだろうし、今日はもうこれで休もう。これからは、私もできるだけここに戻るようにするつもりだ」

宇門は、大介に背を向け、そのまま部屋の出口へと向かった。大介は、宇門に声をかけた

「父さん」

「何かね？」

歩みを止めた宇門が振り向く。

「お休みなさい」

「ああ、お休み。また明日」

大介は、普通に翌朝を迎えることができず日常を、もうずっと長い間忘れていたことに気付いたのだった。

● PHASE 7 宇宙科学研究所・レベル4実験室

暮林は、大介の手術の時に採取した細胞を使って培養実験を続けていた。増えたものから別に取り分けて、細胞に取り込まれそうな物質をトレーサーとして使い、細胞内のどこがどんな機能を持っているのか調べていく。これまでのところ、予想以上に順調に進んでおり、たいいていの培養条件でも順調に細胞は増えた。増える速度も、地球上の動物細胞に比べるとずっと早かった。フリード星人と地球人の代謝経路は、各段階までつきあわせるには至らなかったが、大まかにはよく似ているということがわかった。

「順調すぎるのがまさに問題なのだ。普通ではあり得ない」

位相差顕微鏡のグリーンの視野にとらえた細胞の画像を見ながら、思わず声に出していた。

菌と違って、細胞の培養は難しい。条件を整えても正常な細胞であれば、そうやたらと増えたりはしない。むやみに増殖しないようにコントロールされているからだ。それでも、培養を繰り返すうちに癌化することがあつて、そのときは、本来の機能を示さなくなる代わりに増殖だけが早くなる。

大介の体から採った細胞は、地球上の動物の細胞と質的にちがつているようだった。ヒトのガン細胞に匹敵するほど増殖が早いにも関わらず、隣に同種の細胞が接触した時点で増殖をやめるという機能——コネクタクト・インヒビション——は正常に働いている。

暮林は、細胞に負荷をかけてみることにした。ヒトに対応させるならば、赤血球を作るものになつている骨髓幹細胞に見当をつけて、培養液の中の鉄イオンを無くし、代わりにマグネシウムと銅を、それぞれに加えて培養した。質的な違いが何であるかつかみかねて煮詰まつたあげくの、精密とは言い難い、どちらかといえば、戯れにやつた実験だった。翌日になつても細胞が死んでいないことを確認し、培養液をとりかえて一週間インキュベーションを続けた。一週間後、血球を分離してみたら、それぞれ、細胞の色は青と緑に変わった。金属の種類が変わつた位では何ともないのか、と半ば呆れながら暮林は細胞得られた細胞を破

砕し、分析装置にかけてみた。

結果は、ポルフィリン環にそれぞれ銅とマグネシウムが入つた構造を示していた。さらに、マグネシウムを入れた方は、植物のクロロフィルに類似の構造が一部現れていた。まさかと思つて二酸化炭素を与えて光を当ててみたところ、効率は悪いが光合成に類似の反応が起きたのを見て、暮林は啞然とした。

「環境次第では植物に近い機能を出すような変化をするのか……」

培養条件を選ばずに増えているのも納得できる。元とは違う環境に置かれた場合、細胞の方が変化することですと適応してしまつたのではないか。

次にやつてみたのは、神経細胞デバイス構築キットに、いくつかの組織から採つた細胞を植えてみるということだった。培養神経細胞と電子回路を直接接続するという実験をするため、プリントされた回路に細胞培養のコートイングをしたキットが市販され、広く使われていた。興味本位に骨や筋肉、皮膚からとつた細胞を、パターンが刻まれた基盤の上で培養してみた。こちらも、一週間ほどで、回路にそつて細胞が並び、入力した電気信号に対して応答した。電気信号を加えつばなしにして培養すると、信号の方向に応じて細胞同士をつながり方、つまり小さな組織の構造が変

わった。結果を見る限り、電気電子デバイスとの接続性が非常に良く、細胞そのものも自己組織化するデバイスのように振る舞っていた。

フリード星人は細胞レベルで環境適応能力がヒトに比べて桁違いに高い、というのが、ここまでの実験結果から得られた結論だった。次は、なぜこういう結果になったのかを説明しなければならぬ。

さらに、手術の時に得られた組織片からは、生体由来のものとは思えないものも採取できていた。大きさは細胞と変わらないし、皮膚の細胞に融合したような形で存在していたが、分析してみると、元素の組成から物理化学的性質に至るまで、細胞とはかけ離れていた。電子顕微鏡で見た限りでは、どう見ても人工物としか思えない構造であることがわかった。

「一体これは何なのだ？」
訝ってはみたが、研究所の設備だけでは、これ以上詳しい調査はできなかつた。

暮林は、次の段階に進むため、研究所のメインコンピュータの使用許可を求める申請書と、ヒトの卵細胞及び胚細胞を用いる実験を行う申請書を宇門宛に提出した。そして、出身研究室の教授に電話を入れて、大学の持っているいくつかの顕微鏡の使用許可を

取った。

● PHASE 8 宇宙科学研究所・観測室

四月になり、雪はだいふ融けた。大介も完全に回復したので宇門はグレンダイザーそのものについての調査を本格的に始めた。

「大介、グレンダイザーとの通信はできるかね」

「ええ、そちらからの接続にはすべて応答できるようにしてきました。ただ、その――」

「やはり、技術レベルが違いすぎるかね」

「……ええ」

「こちらのメインコンピュータをつないでみても、どれだけのデータを引き出せるかは、こちら側の性能の限界にかかっているということだな」

「そうなります」

「ふむ――とりあえず読み出せるだけのデータを理解できる形で送ってもらおう。一体第何世代にあたるのか想像もつかないが、こちらの最新鋭に合わせられるのであれば、今はそれに頼るしかないな」

宇門は、観測室中央のキーボードを手早く叩く。

「自然言語でもあつさり解析できるのなら、我々が使っているコンピュータシステムなどオモチャみた

いなものなのだろう」

「武器の性能、推進に必要な制御アルゴリズムとパラメータ、それから、フリード星から地球までの座標位置等を読み出せそうです。あとは、画像がいくつか」

大井が画面を流れていく数字やデータの列を見ながら言った。山田、佐伯、大井、林も全員席について、データ読み出しと分析作業を分担している。隣の部屋では、冷却器がうなりを上げており、最新鋭のメインコンピュータがフル稼働していた。

「プログラムもある程度こちらの言語に翻訳した形にはなっています。しかし、そのままの形だと思わない方がいいでしょう。我々の概念で第五世代以上だとすると、自分自身でアルゴリズムを書き換えたり、事によったらハードウェアのレベルで自律的に改変を行っている可能性もあります。そうすると、我々が見ているのはあくまでも今実現している状態ということであって、グレンダイザーのコンピュータ本来の性能やもともと構築されたアルゴリズムとは別物でしょう。たとえて言うなら、何かのプログラムを実行した結果を見ているだけであって、ハードウェアやソフトウェアの構造そのものを調べていることにはならないと思うんですよ」

「腕利きの魔術師の佐伯君が言うのならそうかもしれない

んな」

「武器関係は私の方で整理してみます。どの程度の性能のものか知るためのチェックが必要ですから」

「兵器だけにやたらにテストはできません。スペックから予測できるものについてはやらなくていいよ、林君」
「わかりました。一通り調べてから項目を絞っておきます」

「頼む。ところで大介、これはグレンダイザーの戦闘機動のデータではないのかね？」

宇門は、さっきから傍らに立って所員達の作業を眺めている大介に声をかけた。

「そうです。宇宙空間で戦った時のものです」

飛行物体が前進するには、推力ベクトルの延長線上に物体の重心が存在する状態を保つ必要がある。そうでないと、どんな飛行物体でも思わぬ方向に回転を始めて制御不能に陥ってしまう。慣性制御やフィールド推進の場合、そこをどうやって解決しているのかを知るため、宇門は関連データを読み出しながら表示させていった。

「……どう見ても、グレンダイザーの質量そのものが変わつてるように見えるが、これがフィールド推進と慣性制御をやるときの姿勢制御の方法なのか？」

「ええ、そう考えても大きな間違いではありません」

「質量分布を変えるか、あるいは部分的に重力場を発生させて、推力が変わったことによるブレを押さえる……重力場制御のアクティブダンパーのようなものを想像すればいいのか」

「確かに、そういう原理なら推力軸線と重心を常に一致させられますね。逆に使うことで、UFOにありがちな、急な加減速や方向転換といった機動もできそうです。ただ、ウチのコンピュータを総動員しても制御のための計算が追いつきそうにないですが」

「それよりも、材料の強度が追いつかない気もするな。慣性と質量を転換する技術を使っているのなら、加減速の度にどこにどれだけの負担がかかることになるのか……」

『宇宙合金グレン』は、慣性制御を存分に行つてまだ十分な性能があるときいています」

「大井君、グレンダイザーの装甲の分析のめどは立つたのか？」

「目下のところ手詰まりです。我々が持っている分析装置は、ほんのわずかであっても試料の破壊や分解を伴いますから。結局、我々が目で見ている情報に毛が生えた程度——つまり、光の反射を測つてわかる以上のことはわかりません。何をやってもカケラほども変わらないとなると、どうにもならないですよ」

「レーダーの性能の方もとんでもないようです。使用状況を見た限り、超光速でスキャンしています。本体が超光速で銀河を越えるなら、レーダーレンジの方もそれに応じて広いのが当たり前と言えそうですねでしょうけど。タキオン粒子でピンガーでも打つてるんでしょかね？」

「その表現で大きな間違いではないと思いますが……」

林の質問に大介が答えた。タキオンは、虚数の質量を持ち超光速で伝搬する粒子で、存在が許される可能性はあるが、まだ発見されていない。もつとも、最近では、超光速粒子の存在が出てこない形の理論も提案されており、結局どうなのかは未解決のままである。

宇門は、椅子ごと大介の方を向いた。

「一体どうやってあちこちで相対論の制限をぐぐり抜けたのか……。全く、どれもこれも、地球上には理論のかけらもまだ無い技術ばかりだな。我々が相手では、グレンダイザーの秘密を守る心配をする必要など無かつたな、大介」

大介は答ええない。宇門は、大介が答ええない理由を了解した。否定すればあからさまな嘘になつてしまふし、肯定すればここにいる人たちの——地球人の——技術を馬鹿にしたように聞こえるのではないかと、

大介なりに気を遣ったのだろう。宇門は再びメインスクリーンの方を向いた。

「コックピットまわりの仕様も読めそうですね」

林が妙に嬉しそうに言う。

「ああ、わかった。それもまかせろ。操縦系のインターフェースを参考にしたいんだろ？——ところで大介、グレンダイザーを操縦したときのフィードバックはどうなっているのかね？」

人間の体の動きをトレースして、そっくり同じ動きをロボットにさせることは技術的に可能である。が、その場合不可欠なのは、動いたことの結果を人間の側にフィードバックして戻してやり、力の加減をするということなのだ。そうでないと、ガラスのコップを持ったつもりで握りつぶすことになったりする。ロボットを制御して、堅くて壊れないものを強く握ることとは簡単にできて、生卵を壊さないようにつかんで持ち上げたり、豆腐を箸でつまんで持ち上げたりするのは難しいのだ。グレンダイザーのような、巨大かつ力の強いロボットをフィードバックなしに動かしたりしたら、そこら中のものを壊したり、事故が頻発したりするに違いない。

「ロボットに伝わった力や衝撃が、疑似的な感覚として僕にフィードバックされます。操縦の訓練とは、単

に動かすというだけではなく、その疑似感覚情報に従って適切に動かせるようになることでした」

「いつそ操縦系と思考を直結した方が良かったのではないか？ フリード星の技術なら可能だろう？」

「過去にそういう実験もありました。が、あまりに操縦者にとって過酷だとわかったので採用されませんでした。ちよつとでも気が散るとロボットの動きがおかしくなるというのは、不安定過ぎますから。かといって、どんな場合も操縦から心を離さないようなトレーニングをするというのは、洗脳するのとあまり変わらないので、今度は他のことに対応できない状態になってしまいます。ですから、操縦装置を動かしている間だけ補助的に操縦者の情報も使って、あとはロボットの状態を感じながら操縦者の方で制御する方式になりました」

「そういうことか」

「ちよつと見てください。この解像度で見える銀河でこの形って、私は見たことがないんですが……。何だかわかりますか？ 所長」

山田が困惑した声を上げた。メインスクリーンの画像が切り替わって、渦状銀河を映し出した。

「これは一体……」

キーボードを叩く宇門の手が止まった。コンソール

ルに置かれたディスプレイだけでは足りず、観測用のメインスクリーンまで使ってグレンダイザーからデータを読み出していた宇宙人は、表示された画像を見て絶句した。映し出されているのは、一見、何の変哲もない楕円形に渦を巻く銀河系の画像——だがそれは、宇宙がこれまで宇宙望遠鏡でさんざん観測してきた星団や銀河の、どれとも異なっていた。

「私もこんな銀河を見た事がない。まさか、これは、我々の銀河系なのか」

「そうです。アンドロメダから逃げる時にグレンダイザーに記録されたものです」

「大介」

宇宙人は、横に立っている大介を見上げた。

「生きている間にこんな物を見ることができるとは、まるで夢のようだよ」

宇宙人は、かつて、初めて星空を見上げた時と同じ瞳を、渦状銀河の映像に向けた。

「どう頑張っても探査機を飛ばしても、私が生きているうちにこんなものを観測することなどできん。下手すると、観測できたときに今の人類が存在しているかさえ怪しいものだ」

「銀河系脱出の第四宇宙速度は、秒速三百キロメートルですからねえ……」

林が軽く口笛を吹いた。

「理解できるかどうかともわからん超科学の産物よりも、今の我々にとつて価値があるのはこちらの方なのだがな。これが見える場所まで行つてみたいものだ——」

宇宙人は、スクリーンの向こうのはるか彼方の存在を確かに感じていた。

「まあまあ、所長。せつかくテスト項目を決めたのだから、超科学の成果の方も見ていただかないと」

林が情けない声を上げた。

「決定できたのかね？ 早いね」

「そりやもう……。やるとしたら三つだけ、スペースサンダー、反重力ストーム、ハンドビームでいいでしょう。他は威力が桁違いだというだけで効果の予想はつきますから。弾頭を空にした模擬ミサイルとリモート操縦の戦闘機があれば十分ですね。ありつたけのセンサーを取り付けて飛ばせば、データはとれると思います」

再軍備して国防軍を設立したおかげで、戦闘機は国産のものも開発されており、ミサイル誘導技術も制限されることなく順調に進歩していた。度重なる異種族による侵攻のため、兵器は量産体制に入り全体に値段が下がっていたので、技術力のある研究所であれ

ば、武器メーカーから部品を買ってテスト用、つまり火力として使えないものであれば、比較的自由に作る事ができた。戦闘機でそれをやるとさすがに高くつくが、専門のジャンク屋から買うことで、安全な飛行の保証はしない代わりに試験用として安く手に入れることも可能である。

「武器の調達はいいとしても、飛行計画はどうするつもりかね。トランスポンダも無しにグレンダイザーが飛んで、自動警戒管制組織に引っ掛かったら、国籍不明機と判断されて近くの空軍が緊急発進で上がってくるぞ」

「それでしたら、我々のところで開発した新型の飛行物体のテストだということで飛行計画を出しておきます」

「リモート操縦の戦闘機と一緒に飛ばす位ならまあいいとしても、ミサイルで攻撃する理由をどう説明すればいいだろうね。我々のところは、兵器開発などしてないわけだから、何をしているか不審がられそうだが……」

「どうせ飛ばすのは弾頭無しのものだし、誘導方式の試験中だとも言っておきますかね？ ICBMあがりのロケットなんかいくらでもありますし」

「グレンダイザーならレーダーの妨害くらいはできま

すけど」

「攪乱幕や囷でもばらまくのかね？」

「いえ、妨害電波だけで十分だと思います。チャフに近い『アンチレーダーミスト』もありますが、そこまでは必要ないでしょう」

「なるほど、電子戦の性能も同時にわかるというわけだな。発見されたらそのときは手段を選ばずレーダーを攪乱して逃げ戻ってくれ」

言つてから、再び宇門は考え込んだ。

「装甲の強度も知りたいが、やるとなると破壊試験になりかねないな。あれは、我々の技術で壊せるような代物かね？」

「まず無理……だと思えます」

遠慮がちに大介が答えた。

「試しにやってみるか。対戦車砲を二発ほど調達できるか？ 林君。金属塊の対衝撃試験だとも説明するしかないだろうが」

● PHASE 9 研究所近くの山林

宇門は観測室中央のメインスクリーンを見つめていた。大井が誘導する自動操縦の戦闘機が映し出されている。操縦者が乗っていない上に後の整備も不

要だから、オーバーGを一切気にすることなく空中分解するぎりぎりの戦闘機動をさせて思い切り振り回しているのだが、グレンダイザーはそれを追って易々と飛んでいた。戦闘機の位置と制御情報は、メインコンピュータとリンクしており、操縦席の映像もモニターに映し出されていた。

「始めてくれ」

宇門はマイクに向かって指示を出す。

デュークは左手を操縦桿から放し、前のレバーを押した。スペースサンダーが空を切り裂いた。テスト機から少し離れたところを電撃が通過する。その直後、モニターに映された計器類がまるきりデータラメな値を出し始めた。数秒後、制御を失ったテスト機がそのまま墜落したことを示すLOSTの文字が赤で点滅しながら表示された。

「かすめただけで航空電子装置^{アビオニクス}が全部パンクするか……何という威力だ。テスト機は落雷の直撃にも耐えられるはずなのだがな」

「もつと少し離れていれば、無線の送受信機がつぶれるだけで済んだでしょうが、この距離では内部の制御用コンピュータごと動作不能になってしまいました」

大井が報告した。

「よし、大介、では次のテストだ」

指示を聞いたデュークは、シュートインしてダイザーを分離させた。

「データリンク完了。全測定システム準備完了。いつでもOKです」

佐伯がコンソールを叩く。テスト機は、対地攻撃をシミュレートしているので、グレンダイザーに向かって急降下・急上昇を繰り返した。

デュークは操縦席中央のモニターを照準専用に取り替えた。テスト機を示す点がレンジに入る。

「反重力ストーム！」

デュークが左足のレバーを軽く踏み込むと、ダイザーの胸から七色の光がテスト機に向かって飛んだ。途端にテスト機はめちやくちやに振り回され、きりもみ状態で墜落した。

「命中から墜落までの全データの保存、完了です」

宇門はヘッドセットを取り出した。左手に持ったままマイクで林を呼び出す。

「そちらの準備はいいか」

「OKです。予定通り、ミサイル発射装置の準備完了しています」

「わかった。グレンダイザーの位置をそちらに送る。いつでも発射してくれ」

ミサイルの発射を示すランプが点灯した。

デュークは索敵を広範囲に行っていた。ミサイル発射を示す点がモニターに表示される。次の瞬間、研究所を中心にして、全てのレーダーが使用不能になった。ザツともガツともつかないすさまじいノイズに、大井は思わずヘッドセットを脱ぎ捨てた。宇宙も慌ててスピーカーの音量を最低にした。メインスクリーンの映像だけは、望遠レンズ付きのカメラからの信号を有線で研究所まで引つ張っているため表示されているが、それでも画質はかなり落ちていた。

宇宙は通信システムの周波数を振ったが、潜水艦用の極長波からデジタルデータリンク用の高周波まですべて使用不能である。レーザー光線で狙い撃ちしている光通信データリンクまで、検出器がノイズを拾ってしまったって、通信速度が通常の三分の一になっていた。

「このパワーで広帯域妨害とは、電子線機としてもとんでもない性能だな」

宇宙は大井の方を振り向いた。大井は、音量の調整も忘れて、騒々しい音を立て続けるヘッドセットのイヤホンを見つめている。

「——いかん、大井君、テスト終了まであとどれくらいかかる？」

「せいぜい三分程度ですが」

「これほどのECMとは思わなかったが、これでは近辺の航空管制が全滅しているはずだ。早く済ませないと事故が起きるぞ。かといって大介に連絡もとれんか……」

ミサイルはグレンダイザーに向かって地形に沿って誘導されているため、視認できる位置に入るまでは迎撃できない。ダイザーのコンピュータは発射されたすべてのミサイルの位置と軌道を捕捉、迎撃するための情報を瞬時にはじき出していた。時速八百キロでほぼ上から襲いかかる三発と正面から水平に突っ込んでくる三発の巡航ミサイルに加えて、ロケットブースターで打ち出された追加の三発の弾道弾が軌道上からグレンダイザーめがけて飛来する。この速度になると実際に視認できるところに入ってから迎撃操作をしたのでは、フリード星人の反射神経をもつてしても間に合わない。コンピュータの方がその時間的余裕を逆算し、操縦者の応答に先回りしてロックオンしたことを、操縦席のモニターに表示する。

「ハンドビーム！」

水平方向と垂直方向、一呼吸遅れて斜め四十五度上方に、赤く輝くビームが三連射された。ミサイルはすべて、視認できるエリアに入った瞬間粉々に引き裂か

れた。白熱した金属片があたりに飛び散り、灰となつて大地に降り注いだ。

グレンダイザーは目標をすべて撃墜と判断し、攻撃を終了した。同時に電子妨害も解除された。

「装甲の性能も知りたい。二発だけ、そのまま動かさず受けてみてくれ。万一のために、肩の部分で試してみたい」

「わかりました」

対戦車榴弾（成形炸薬弾）を弾頭に装備した地对地ミサイルが発射された。精密誘導されたミサイルは、グレンダイザーの右肩アーマーに命中した。着弾と同時に瞬発信管が作動し、高温高压で生成された液体金属が、秒速一〇キロに達する速度で装甲に衝突する。続く二発目は、百二十ミリ離脱装弾筒付翼安定徹甲弾で、戦車砲代わりに用意された筒から発射され、左肩に着弾した。近くで詳しく調べないとわからないが、監視カメラで見ただけ限りグレンダイザーに異常はない。

「これでテストは終わりだ。お疲れさん。大介、戻るときなさい」

宇宙はマイクに向かって告げた。

● PHASE 10 宇宙科学研究所・観測室

宇宙は、観測室に戻ってきた大介の方に、椅子ごと振り向いた。

「フリード星の科学力のすさまじさを改めて見せてもらったよ。ありがとう」

「父さん……」

大介は浮かぬ顔のまま、両手をポケットに突っ込み、宇宙に背を向けた。

「どうしたんだね、大介。何か気になることでもあるのか。待ちなさい」

宇宙が立ち上がるより早く、大介の姿は自動ドアの向こうに消えた。

● PHASE 11 宇宙科学研究所・ヘリポート

既に日は暮れていた。大介は、ヘリポートの上になり、月を見ていた。春が訪れたとはいえ、夜になると、晴れた日は放射冷却で急激に気温が下がる。澄み切った空はどこまでも遠い。

「大介、ここに居たのかね？」

宇宙に後ろから声をかけられて、大介は一瞬びくつきとしてから振り向いた。

「父さん……」

宇宙は、ゆっくり歩いてきて大介に並んだ。大介が

していたように、上空の月を見上げる。

「さつきはどうしたのかね？ 何か言いたいことがあるなら遠慮無く言ってみなさい」

「みんなはどうしていますか？」

宇宙の問いには答えず、大介は質問した。

「所員たちかね？ 初めて異星人のテクノロジーを目

の当たりにして興奮している。グレンダイザーの性能の解析にかかりきりになっているよ」

「そうですか」

大介は短く答えただけだった。

「大介、もしかして私はお前を困らせたのかね？ グ

レンダイザーの武器の性能を見せろなどと頼んで」

「そうではありませんが……操縦席に座って武器を使うと、脱出のときを思い出してしまったのです」

「そうだったのか」

「あのときも、こうやって武器を使って、できるだけのことをしたつもりだったのに、僕の目の前でフリード星は焦土と化した」

大介はうつむく。宇宙は、大介の肩にそつと手をやった。

「それだけではありません。フリード星が減ぼされてからしばらくの間、近くの星を尋ねて身を寄せていたのですが、僕を追ったベガ星連合軍は、多数の星をベ

ガトロン陽子爆弾で焼き尽くした。僕は、他の星の人たちを助けることもできなかった」

「つらいことを思い出させて済まなかった、大介」

「僕は、守るべき国民も星も全て喪つてしまった」

「再建できないと決まったわけじゃないだろう？ あ

きらめず気長に方法を探そう」

大介の肩に置かれた手に力がこもる。暖かい、と大介は思い、宇宙の方をそつと見た。宇宙の、宇宙の彼方に届くかのような深い鳶色の瞳に、月が映つて輝いている。

「そうだな……いずれ、グレンダイザーは、もつと目立たない場所に隠そう。もう、乗つてくれとは言わんよ」

「グレンダイザーの性能を知った上での結論ですか？」

「我々が技術を手に入れて使いこなせる代物かどうかの判断くらいはできるつもりだがね、大介」

宇宙の冷静な声が、透明な空気にひろがっていく。

「科学技術というのは、一部分だけが突出して進歩することなどあり得ないのだよ。たとえば、研究所のコンピュータの設計図を全部百年前に持つて行ったとしよう。十分な情報があつても、同じものをつくることなどできんよ。基礎になる量子力学も、半導体製

造技術も、何も無いわけだからね。我々とフリード星の科学技術の差は、おそらくそれ以上だろう。慣性制御、重力場推進、超光速通信……地球上には、まだ理論のかけらも見あたらん。だから、もし、グレンダイザーの設計図を全部見せてもらったとしても、我々が同じものを作るなど不可能だ。推進系だけは何とか手に入れたらと思うてりバースエンジンアリングをやっているが、技術の表面をなぞるだけでも、完全に手探りになって難航するだろうな。それが、グレンダイザーを調べて基礎理論にたどり着くまでの時間となったら、下手をすると、我々が自力で基礎理論を発見すると互角^{どっこい}つてこともあり得る」

「そんな風に思われたのですか」

「実はお前もそう思っていたのではないかね、大介。私も予想はしていたが、調べて一層はつきりしたよ。今の人類の科学技術で星間戦争をするなど不可能だということもね。だから、人類の科学技術に見合った対策を考えることになる」

大介は、宇宙の横顔を見た。宇宙は相変わらず月——いや、宇宙の彼方を見つめている。

「……地上のことを考える羽目になるとは思わなかったなあ」

宇宙がふとつぶやいた。

「えっ」

「ああ、いや大介、何でも無いよ。だいぶ冷えてきたし、今夜はこれくらいにして休もうか」

「はい、父さん」

大介は、宇宙と連れだつて下に降りた。

● P H A S E 12 宇宙科学研究所・会議室

戦闘の様子をまとめた映像の再生ボタンを押すなり宇宙は結論を告げた。

「地球の技術では、軍隊が寄つてたかつて攻撃してもグレンダイザー一機に勝てない」

試験中の派手な電子妨害のおかげで、グレンダイザーが何をやったかを国防軍も駐留米軍も察知できなかったのは幸運だった。最新鋭の巡航ミサイルや弾道弾がいとも簡単に破壊されたことを知ったら、軍首脳部は恐慌を来したに違いない。もつとも、付近一帯の通信機能を短時間とはいえ完全に麻痺させたため、「二体何の実験をしていたのか」というクレームが、軍はもとより空港や野辺山からも殺到した。本当のことを言うわけにもいかず、「衛星用電子回路の耐久性試験の一種をやるのに出力の見積もりを間違えた」と言い訳して、宇宙は、関係各方面に頭を下げて回る

羽目になった。

「スペースサンダーが近くを通過しただけで、戦闘機の航空電子装備はほぼ使用不能になった。墜落を免れたとしても、火器管制システムが狂ってしまったのは戦闘どころではなくなる。直撃されなくても、通過時の電磁パルスは相当なものだ。よほどの防護措置でも講じていない限り、地球上のハイテク機器などひとつたりもない」

「直撃したらどうなります?」

「破壊だの爆発だのを起こす前に、蒸発するだろうな」
計器類が発狂する映像が流れ、直後に画面がブラックアウトしたのは、墜落して機内のカメラが破壊されたことを示していた。

「反重力ストームの方はもつと厄介だ。命中してから墜落するまでのデータを私も解析してみたのだが、慣性質量と重力質量が機体の部分ごとに違っているという結果が出た上、重力の働いた方向がランダムに変わっている。ジェットの反動による推力の効き方と空気抵抗の関係も狂ってしまった。実はこの二機目の制御は、宇宙科学研究所のメインコンピュータにやらせていたのだが、まるで計算が追いつかず、制御不能に陥った」

二機目が墜落する映像に重ねて、各種の制御データ

が重ねて表示された。

「この、虹色の光は何でしょう? 重力で光が曲がるとしても、逆に光で重力を狂わせるのは無理だと思うのですが」

「うむ……レーザーは知ってるだろう? 林君」

「ええ、もちろん」

「いろいろ考えてみたのだが、光の波のかわりに重力波を使ったレーザーのようなものではないかな。収束させたビームを搬送波にして、さらに、重力の向きを変える波を乗せて打ち出しているのだろう」

「でも、どうして光って見えるんです?」

「ビームの所にある原子や分子が重力で加速されて、光を放っているんだろうな」

「それって、ブラックホールに向かって落ちる時の話ですよ?」

「だから、反重力ストームのエネルギーがほとんどだったから助かったのかもしれない。この方式でエネルギーを収束させすぎると、それこそ、マイクロブラックホールが発生しかねない。反物質の対生成どころでは済みそうにないな」

続いて、ミサイルにとりつけてあったセンサーからの出力がまとめて表示された。

「巡航ミサイルの迎撃なら地球のミサイルでも可能

だ。ビームによる迎撃となると、S D Iでは考えられ
ていたが――」

宇門は、ビデオのスイッチを切った。

アメリカがやろうとしたS D Iすなわちスターウ
ォーズ計画では、軌道上の人工衛星に搭載した自由電
子レーザーでミサイルを迎撃するという構想があっ
た。衛星上で大電流を使用するのは難しいため、核爆
発をエネルギー源とする高エネルギーのレーザーを
利用することになっていた。レーザーの発射は衛星
の自爆を意味するから一回しか使えない。もともと、
S D I構想をぶちあげて予算をそちらにシフトした
途端、これまで加速器だの核融合だのといった高エネ
ルギー物理学を研究していた連中が予算獲得の方便
で申請書の看板だけS D Iに書き換えて大量に参入
してきたが、研究内容の実態は従来通りの基礎研究
だったという話もあり、どの程度実用になる成果が上
がったかは、はなはだ怪しいものであった。

「グレンダイザーは、我々の技術レベルでは核爆発で
ないと手に入れられないようなビームのエネルギー
でも、簡単に制御しているということになるな」

宇門は、グレンダイザーの肩部アーマーの拡大写真
を示した。

「高温高圧、第一宇宙速度を超えるようなメタル

ジェットの直撃を受けても、傷一つついていない。徹
甲弾もまるで通用しなかった。もし、こんな材料で戦
車を作ったら、今ある対戦車ミサイルを、ほぼ完全に
無力化することができるだろう」

「一体、この装甲はどの程度保つのですか？ 地球上
で最強の攻撃ということになると、やはり核ミサイル
ということになると思いますが、地上でも宇宙でも氣
軽に実験するわけにはいきませんか」

大井が大介に向かって訪ねた。

「グレンダイザーの耐熱・耐放射能・耐衝撃性能なら、
おそらく至近で爆発しても破壊されることはないは
ずです……そう設計されたときいています」

地球上では、制御のめどすら立たない核融合も、一
旦宇宙に出ればありきたりのエネルギー源である。
恒星はすべてむき出しの巨大核融合炉であり、その近
くでも飛行可能であるなら、核融合炉の容器並みの頑
丈さと耐熱性能や、高エネルギー粒子線も含めた放射
線遮蔽能力は持つていて当たり前だろう。

「道理で、外からの非破壊検査じゃあ、何を持つてき
ても軒並み通用しなかつたわけだ」

佐伯が、あきらめ顔で天井を向いた。

X線や超音波は最初に試して無意味だとわかつて
いた。エネルギーを上げてみようとガンマ線で照射

しても透過せず、中性子線も通用しなかった。二次電子も出てこないし、SIMSもだめで、光子力研究所仕様の透視光線もまるで役に立たなかった。結局これまでに測定できたのは表面の光の反射率の波長依存性だけで——ということとは、目で見てわかる以上のことはほとんど何もわからなかったということである。宇宙は、かすかに目で笑って続けた。

「マツハ九で飛行して慣性制御で機動する物体を追尾できるレーザーも対空ミサイルも地球上には存在しない。弾道ミサイルや巡航ミサイルはそもそも固定目標でしか使えない。第一、撃たれたところでいくらでも回避できるし迎撃もできるだろう。グレナダイザーを墜とせる武器など、どこの軍隊にもないということだ」

「それじゃあ、宇宙開発用に技術移転するよりも、真つ先に軍が奪いに来そうですね」

「私もそう思う。こんな性能を公表したら、ベガ星が攻めてくる前に、技術を奪い合つて地球人同士で戦争になるだろうな。持っつていったところでコピーなど不可能だろうが、欲しがりそうな連中の心当たりなら山ほどある」

敵の攻撃で市民に被害が出るのはロボットで抵抗するからだ、という理由で地球防衛査問委員会を開い

て研究所の閉鎖を要求する、ということが光子力研究所に対して行われたことがあった。臨戦態勢にあり、実際に戦果をあげていてさえも、閉鎖を要求するデモ隊に乗り込まれて暴動になったりしているのだ。差し迫った危難のない研究所に超兵器があるとわかつたら、日本政府と米軍が先を争って研究所ごと確保しようとするに違いない。

「それでは、軍に対しても、今回は情報を出さないといいことですか」

佐伯が念を押す。

「そうだ。何か提供するとしても、こちらで調べ終わつて、我々の技術で運用可能になったものに限る」

宇宙は即答した。

ロケットを精密誘導する技術は、ペイロードを弾頭に変えればそのままミサイル兵器に転用できる。人工衛星にしても、研究用と軍用の違いは、科学用の観測機器を積むか、弾頭も含めた軍事用の機器を積むかの違いでしかない。宇宙科学研究所が手がけている技術開発は、もともと軍事研究と表裏一体のものであった。軍や政府による介入を避けて研究の自由を確保するために、宇宙は軍からの研究資金は一切受け入れていなかった。さらに、軍や政府からの余計な介入を防ぐために、技術開発の情報交換の場には顔を出

して、発表もしていた。これまでのところ、宇宙門に自由にやらせておいても危険は無く、軍でも使える技術が出てくることがある、と思わせることに成功していた。

「グレンダイザーがロボット型の超兵器でもあるということは秘密にしておく。グレンダイザーやこの研究所を、戦争屋のパワーゲームの駒にさせるつもりはない。もつとも、グレンダイザーを持って行つたところで、複製も運用も不可能だろうが、連中はそんなこととはおかまいなしだろう」

宇宙合金グレンに匹敵する材料を手に入れ、かつ、光子エネルギーを使いこなせない限り、武器を真似ることなど不可能である。そもそもそれは研究所でやるべきことではない。一方、光子エネルギーの利用法とエンジンや推進原理について解明するのであれば、宇宙開発の延長上にあるし研究所の目的にも合致する。

宇宙門は、所員たちに対し、推進システムのリバーエンジンリング調査に全力をあげることを指示した。

● PHASE 13 宇宙科学研究所・観測室

「おや……」

当直をしていた佐伯は、思わず端末を確認した。研究所のメインコンピュータの動作状況を示す端末は、CPU負荷がほぼ一〇〇%で推移していることを示していた。一定時間ごとに負荷を示す棒グラフが描かれ、横にスクロールしていく。たまに数分、〇%近くに減るが、すぐまた一〇〇%になる。

「今の利用者は……」

と、コンソールを叩く。「暮林」と表示された。何日前かに使用許可を求めてきていたことを思い出した。

「しかし、一体何やってるんだ？」

佐伯は首をかしげた。他の名だたる研究機関と比べても最大の演算能力を持つ、第五世代量子コンピュータをフル稼働させるなど、よほどの大規模シミュレーションをいくつも同時に行わない限り不可能だ。

「生物学者の計算機実験^{インザサードモジュール}てのは想像を絶するな」

「やあ、どうしたのかね？」

帰り支度をした宇宙門が、様子を見るために顔を出した。

「暮林さんがとんでもない計算をしてるようで」

「暮林君？ そういえば、ちよつと前にヒト細胞を用いたクローンの実験と、組み替えDNAの実験の申請書類が出ていて許可したんだが、計算とはねえ——ま

あ、そのうち結果を報告してくれるだろう。差し障りがない限り、好きに使わせてあげなさい。じゃ、今日は私はこれで失礼するよ」

宇門はかるく挨拶をして観測室を出て行った。

● PHASE 14 宇門邸

「ふう……」

シャワーを浴び終わった大介は、自室に戻ってテレビのスイッチを入れた。

大介は、牧場の仕事をしている日は、仕事が終わった後、たいてい、牧葉家で夕食を共にすることになっていた。研究所の仕事を手伝っている日は、仕事が遅くまで終わらないことが多く、宇門と一緒に研究所で軽食を摂ることになっていた。結局、宇門邸に戻ってきてても、シャワーを浴びて寝るだけの生活になってしまっていた。

テレビが映つたとたん、飛び込んできたのは、人間型の巨大ロボット同士の戦いを報じるニュースだった。大介は画面を見つめた。巨大ロボットを駆つて戦うという発想が地球にもあるとは、全く予想していなかった。

甲冑を思わせるロボットの目から放たれたビーム

が異形のロボットを突き抜けた。両腕を上げて胸を張ったまま、二枚の板が熱線を放ち、ビームに貫かれたロボットを、原型を止めない状態にまで溶かした。アナウンサーが、「今回も日本の平和が守られた」と締めくくった。

大介は部屋を飛び出し、階段を一段飛ばしで降りた。

「父さん！」

「大介か？」

宇門の声は、一階の書斎から聞こえた。大介はドアを開けて、部屋に走り込んだ。

「どうしたね？ そんなに慌てて」

宇門はすでにパジャマに着替えてガウンを羽織り、ソファでくつろいでいた。

広くとられた窓の外のベランダの向こうは暗闇で、遠くに研究所のライトが見えた。書斎は雑然としていた。書棚は本で埋め尽くされ、床や書棚の上には資料や図面を詰め込んだ段ボール箱が無造作に置かれていた。部屋の奥には、ドラフターや巨大なプリンターが並んでいた。机の上には読みかけの本や資料積み上げられていた。それでも作業場所が足りず、テーブルが置かれ、窓際には休憩用のソファがあった。

「地球でも、ロボットに乗って人が戦ってるんですか！」

「落ち着きなさい、大介」

「僕らの星だけじゃなく、地球でも……」

「実は、だいぶ前から戦いは起きていた」

「あのロボットは一体何なんですか？」

「マジンガーZだ。この、光子力研究所のパンフレットに簡単な紹介が出ているよ」

「宇宙は立ち上がり、書棚から薄い冊子を引き抜いて大介に渡した」

大介は、椅子を引き寄せて座り、パンフレットを最初からばらばらとめくった。光子力研究所の沿革、施設紹介、マジンガーZとアフロダイAの機能の説明が書かれており、所長の弓弦之助教授を始めとする主なスタッフと、操縦者である兜甲児、弓さやかの写真も掲載されていた。

「日本は、外部から侵略を受けているんですか？」

「ドクターヘルという人物が、光子力を狙っている」

「ニュースでは『光子力ビーム』と『ブレストファイヤー』が出ていたけど……こんな武器が地球でも作られていたなんて」

「ロボットで戦っているのは、ドクターヘルと光子力研究所だけだ。地球では一般的ではない」

「地球の軍隊の兵器に使われていないんですか？ 資料でも見たことがなかったけど……」

大介は、病室に居た間、宇宙が持ってきた地球の社会や文化に関する本を思い出した。戦車や戦闘機は使われていたが、ロボットで戦ったという話は無かった。

「マジンガーZを作った兜十蔵博士はロボット工学の天才だったからねえ。他では真似できんだろう」

『ジャパニウム』から作られる超合金Zでないと、武器の性能に耐えられないのだよ。同時に、それだけのエネルギーを集中して投入できるのは、光子力以外には無いしね。今のところ、大量生産できないから、一般の軍事用には使えないだろうね」

ロボットの武器としてビームや熱線を装備し、敵の装甲を貫いたり熔解させたりするためには、それを上回るエネルギーを集中してロボット側で発生させなければならぬ。普通にやったのでは、エネルギー発生に伴う熱で、ビーム発生装置が吹き飛んだり熱線発生装置が融解したりしてしまう。そうならないのは、超合金Zの材料としての卓越した性能と兜博士の設計技術によるものであった。卓越しすぎていて、マジンガーZがワン・オフの機体になってしまったという点は、グレンダイザーと同じ事情であった。

「これじゃ、フリード星と変わらない……」

「そう言うのではないかと思った。お前に、グレンダイザーで戦ったことを思い出させたくなかったから、話題にしなかったのだ。団さんのところでも気を遣ってくれたのかもしれないね」

「団兵衛おじさんはUFOを探すのに夢中で、地球上の戦争の話はほとんどしなかった」

「実に団さんらしいねえ」

大介は、給水塔の上で天体望遠鏡を構える団兵衛を思い出し、つい笑ってしまった。宇門も微笑んでいた。大介は、パンフレットの操縦者の紹介を見て、思わずページをめくる手を止めた。

「操縦しているのは、本当にこの少年なんですか？」

宇門はソファから立ち上がり、大介の傍らに立つて、パンフレットを覗きこんだ。

「ああ、兜甲児君だね。兜十蔵博士のお孫さんで、まだ高校生じゃなかったかな」

「——なぜ、こんなに若い人がパイロットとして戦っているのですか。しかも民間人が」

大介は無意識のうちに問いつめる口調になっていった。

「成り行き、だろうね」

宇門は至極あっさり答えた。

「確かに今の日本では珍しいケースだろう。世界中を見渡せば、高校生位の年齢の兵士が居る国はあちこちにあるのだが……」

一瞬、宇門は沈痛な表情をした。

「もともと、マジンガーZは、十蔵博士が残した遺産で、お孫さんの甲児君が相続したのだよ。それを他の人が横取りするわけにはいかないだろう？ だから操縦者が甲児君なのだ」

「相続……ですか」

「今行われている戦いは、バードス島調査団に加わっていたDr.ヘルが、島に残されていたロボットを使ったり、新たにロボットを開発したりして、光子力エネルギーの略奪とマジンガーZの破壊を目的として攻めてきているのだ。光子力研究所も、今は国が管理しているが、十蔵博士の発案で設立されたものだ。甲児君としては、祖父の遺産や業績を守るためには戦うしかないだろうね。そういう意味で、成り行きなのだよ」

大介は、甲児と自分の境遇を比べてしまった。自分より若い民間人の少年が、この地球という星で戦っている。一方、王族でありフリード星の守り神を託された自分は、満足に戦うこともできず星を滅ぼされた上、追撃されて半死半生で地球に逃れることになってしまった……。

「じゃあ、光子力を盗みに来ているということなんですか」

「Dr.ヘルは、世界征服するために、手始めとして光子力を欲しがっているようだがね」

「父さん、もしマジンガーZが負けるようなことがあったら、地球はDr.ヘルのものになってしまうのですか」

「征服はされるだろうな。そして、ヘル打倒のチャンスが巡ってくるまで耐えることになる。征服者と被征服者が繰り返してきた歴史が、もう一回増えることになるだけだろう」

「僕はどうすれば——」

「大介、もしかして甲児君の戦いを意識しているのかね？　だが、甲児君とお前では状況が全く違うよ」

宇門は、大介に最後まで言わせなかつた。

「でも——」

「ベガ星による侵攻は、奇襲攻撃の後、大兵力を投入して、フリード本星だけでなく近隣の星系に対しても一気に行われたのだったな。しかも数日のうちに、住人のほとんどをベガトロン陽子爆弾で殺されたのだろうか？　組織だった抵抗をする余裕も脱出する余裕も無く、お前がグレンダイザーを持ち出せたただけでも、奇跡のようなものだった。違うかね？」

フリード星の衛星軌道上から、壊滅した地上を見たときの記憶が蘇り、大介は黙った。そんな大介を、静かな目で見つめたまま、宇門は淡々と言葉を続けた。

「だが、Dr.ヘルが今やっていることは、光子力研究所に対する直接・間接の攻略に過ぎない。彼が欲しているのは人類が彼に跪くことであつて、地球人を根絶やしにした後で彼の帝国を築こうというのではない。しかも、Dr.ヘルは組織だった軍隊を動かして全地球規模での戦争を展開することはできないらしい。おそらく、一度に動かせる機械獣の数には限りがあるのだろう。あるいは、こちらに十分な迎撃準備をする暇を与えたくないのかもしれない。今のところは、甲児君が差し向けられてくる機械獣を、その都度迎撃するだけでも、相当な戦果となっている」

「それは、そうですけれど……」

「だが、今のお前には戦う理由など無いだろう。守るべき国民も星も喪われたのだから。第一、この争いは地球人同士の争いなのだから、地球人の間で決着をつけるべきものだ」

確かに、兜甲児という少年には、今戦つて守るものも、戦う意味もあるのかもしれない。が、すでに故郷の星も国民も滅ぼされ、たった一人生き残つた王子デューク・フリードには、もはや守るものは何もない。

戦って何かを守る機会は既に失われてしまっていた。

「おつしやる通り、フリード星人はもう種族としては終わっています」

「それは違うな、大介。奇襲によつて大多数の命が奪われたのが確かだとしても、お前の他に誰一人助からなかったとは思えんのだよ。グレンダイザーの性能を知つてからは、なおさらそう思うようになった。グレンダイザーがフリード星の科学力の結晶で、他に並ぶもののない存在であるなら、それを実現する科学技術を持った種族が、そう簡単に皆殺しになるとは考えられないのだ。お前だつて脱出に精一杯で、その後は追撃部隊に見えられないように隠れながらの探索しかしていなかったのだろう？ お前が気づかないうちに逃げ延びている仲間がきつといるのではないかね」

見てきたわけでもないのに、宇門の言葉は確信に満ちていた。随分楽天的な考え方だと思ひながらも、大介はそうと意識せず、その言葉にすがっていた。

「それに、私には、今のお前の心が、戦いに堪えられとは思えないのだ。今の状態で、地球人同士の争いに介入したら、おそらく、フリード星の悲劇を思い出して苦しむだけだ」

大介は、眠りが浅いと、フリード星滅亡の夢を見て

目覚めてしまうことが多かった。昼間、シラカバ牧場での仕事をして疲れ果てるまで体を動かすことで、前後不覚になつて眠り、どうにか悪夢から逃れる毎日だった。

「体を苛めるような仕事よりは、団さんからも聞いている。私はただ、お前に、まずは生きること考えてもらいたいのだ」

「——はい」

「ともかく、大規模な兵力を一度に投入しての一方的な虐殺^{シラカバ}と、攻撃目標を限つての兵力の逐次投入とは、戦術的にも戦術的にも全く意味が違ふし、対処の方法だつて違つてくる。地球上で戦いが起きているからといって、自分のおかれた境遇といちいち比べるなど意味の無いことだよ、大介」

大介は、ロボットに乗つて戦うという部分にだけ共通点を見いだしていた。しかし、戦いの意味や位置づけまで考えないと判断を間違つてしまう。

「もちろん、略奪や破壊を企てるという行動は許し難いことだ。私も怒りを感じている。ただ、私がそれよりももっと許し難いのは、Dr.ヘルが研究対象を粗末に扱つているということだよ。バードス島の調査に行つて古代ミケーネ文明の遺産という大発見をしたのに、その遺産を改造して略奪行為に使つたあげく戦

闘で破壊している。考古学とロボット工学を修めた天才科学者の筈だが、研究者失格だ。やっていることはただの才能の浪費に過ぎん」

宇宙は立ち上がり、大介の肩を軽くたたいた。

「戦って良いのは、生きる意味を見出し出した時だけだ。例えば、フリード星の生き残りの人達と再び国を再建するといったことになったら、その時は存分に頑張れば良い。今の地球人同士のいざこざなど、お前が気にすることは無い。それに、フリード星の超科学の産物を地球人に見せたら、今度は別の騒ぎになるだろうしね。今のところ、地球人だけで対処できているわけだから、まかせておいて良いのだよ」

● PHASE 15 宇宙科学研究所・観測室

「最初の観測結果が出ました」

何度かの噴射による軌道変更と姿勢制御の後、探査機はその全てのセンサーを、天の川とアンドロメダ大銀河が両方観測できる方向に向けていた。

山田が、受信したデータを画像処理してメインスクリーンに転送する。

「アンドロメダ大銀河には全く変化がありませんが、天の川の、それも太陽系に比較的近い所に少し変化が

みられます。これまでに観測されたのとは違う、未知の物質と放射線ではないかと思われます」

「変化は惑星そのものにも起きていますのかね？」

「惑星そのものと、星間物質の両方に起きています。重ねてみましょうか？」

「そうしてくれ」

宇宙はメインスクリーンを見つめた。銀河系の模式図に、異常が観測された領域が順に表示されていく。

「軌道に予想以上の変動はあるか？」

「今のところ検出できていません」

「衛星の時刻は受信できているな？」

「ええ」

「原子時計に異常はないか？」

探査機は、地球上でもっとも精密な時計——セシウム原子時計——を二台搭載していた。研究所内にもセシウム原子時計が設置されている。

重力場の中を慣性飛行する探査機の時計は、相対論の効果で地上の時計とずれが生じるが、それはあらかじめ予測できるものである。だから、もし銀河系外からワープしてタッチダウンしてくるような物体があれば、いきなり質量が現れて重力場を乱すことになるから、時計の進み具合が予測と違ってくる。

「今のところ、予測以上のずれは検出できていません」
 「やはり我々の探査機一つだけではこれが限界か——いや、ちよつと待てよ。山田君、君は一体どういうデータ処理をしたんだ？」

「普段やつているように、赤外以上については、光学観測してCCDの画像を読み出しています。放射線の検出もこちらでやつています。ミリ波帯については、アンテナで電波を受信した結果です。これまでに知られている物質の信号を全部差し引いて、残ったものが未知の物質由来のもので、侵略の証拠ということになると思ったのですが」

「そのやり方だと、大事なデータを見落としてしまうことになる」

「と、おつしやいますと……」

「奴らは超光速で移動しながら星を侵略しているのだろう。大集団が移動した経路や、侵略された星では、ベガトロンによる汚染が起きて、放射能を発生し、見た目の色も変わってしまう。しかし、その変化は光速でしか太陽系に到達してこない。我々が見ているアンドロメダ銀河の画像は二億三千万年前のものだ。侵略がここ五年以内のことならば、アンドロメダ銀河そのものの異常が観測できるようにするのは二億三千万年後ということになる。これでは、ベガ星が来なく

たつて、それまで人類が存続しているかどうかさえ怪しいものだ。わかるね？」

「じゃあ、光がじきに到達する程に近くの星が侵略されて初めて、我々の観測にかかるというわけですか」

「自然現象を観測している限りそういうことになるな。だが、今回の観測対象は単なる自然現象ではない。超光速で移動する奴らは、同時に超光速通信^{F_TL}や超光速で動作するレーダーを使っている筈だが、そういうものを使つた後には何が起きるかね？」

宇門は、椅子を回して山田の方を向く。

「何らかの未知の粒子を使っているとして、超光速で飛んできた後は、何かにぶつかつて消滅してエネルギーを残しますよね。最初は高エネルギーの粒子だつたとしても、多分途中でγ線になつたりして、最後は波長の長い電磁波に……あつ」

「そういうことだ。我々の探査機は、彼らの活動に対するパッシブソナーの役割を果たすことになる。ただし、相手の位置そのものを直接検出するのではなく、だいぶ離れたところに起きた変化をもとにして、使われた超光速粒子の放射元を推定することになるがね。だから、物質の痕跡を直接探すのではなく、エネルギーの痕跡の方を探さなければいけないよ。それから、電磁波になつたあたりでいろんな星間物質に

吸収されるから、星間物質の励起状態の比率にも一時的に違いが出るはずだ。どちらも、我々に比較的近いところで起きるはずだから、相手が何万パーセント離れていても問題ではない。超光速粒子の性質そのものはグレンダイザーのコンピュータからもらって、後ほどここから来たか計算で予測すればいい。多少の誤差は気にするな。我々の観測精度からしてパーセント単位でしかないのだからね」

「わかりました。明日にはその方法で再計算した結果を出せます」

● PHASE 16 宇宙科学研究所・グレンダイザー格納庫

「大介さん、所長からの伝言です。下に来てほしいそうですね」

観測室に入った大介に向かって林が言った。

「下って、工場の方ですか？」

「いや、グレンダイザーの格納庫の方です」

大介は観測室を出た。父は一体何をしているのだろうと思いつながら、エレベータで地下に向かった。一旦組み立て工場に降りてから、格納庫につながる扉をあけた。

グレンダイザーはいつも通り、エレベータの丸い台

の上に乗っていた。だが、格納庫の床は百メートル近く掘削され、壁面を補強するために鋼鉄の板が打ち込まれている。グレンダイザーの乗っているエレベータのシャフト部分も丸見えであった。工事に使ったらしい重機が、えぐられた岩盤の上に固定されている。エレベータ最上部からダム入り口に向かって、新たにレールが作られていた。そのレールの下に設置された機械の基底部分までが剥き出しになっていた。『気をつけなさい、大介。落ちたら無事では済まないからね。こっちの工所用エレベータから下に降りられるようになってる』

宇門の声がスピーカーで響いた。

エレベータといっても、金属製の台がレールに沿って上下する簡単なもので、安全のために手すりがありつけられているだけであった。大介は、エレベータの上に乗る、下向きのボタンを押しした。グレンダイザーの下に据え付けられた巨大な移動機構が目の前に迫る。

「父さん、一体これは何ですか？」

「グレンダイザー緊急発進用の発射台だ」

「下にこんなに機械が仕込まれているところを見ると、ただの発射台には見えませんが」

「発射台ごと上下に移動できるようになっている。完

成後の図でいうと、あそこが、これまでの格納庫の床の高さ、つまりこの図のここになる」

宇門はAーサイズの図面を示した。グレンダイザーは、円形のエレベータの台もろとも完全に穴の中に収納されることになっている。

「なぜこんなものを……」

「今の格納庫の場所をまた作業に使いたいしね。グレンダイザーを動かしての調査はもう必要無いので、下に降ろすことにしたのだ。コンピュータとのリンクだけ維持しておけば充分だ。それに、隠すということならこの方がもつといいだろう」

宇門は、大介の同意を求めるように少し首をかしげて見せた。

大介は、改めてあたりを見回した。掘り下げられた壁の向こう側に、検出器のアレイが一面に並んでいた。

「あれは一体何ですか？」

「ニュートリノの検出器だ。降ろしたところで、最後の検査手段を試してみようと思つてね」

国立の加速器研から、方向を定めてニュートリノを飛ばし、グレンダイザーに当ててみることを決め、既に手続きをとつていた。もちろん、検出器の試験だとしか書類には書いていない。X線やγ線では話にな

らなかつたが、地球でも案々通り抜けるニュートリノなら、非破壊検査が可能になるかもしれないと考えたのだ。

「そうだ、レーザーはすべてアクティブからパッシブに切り替えるか、スイッチを切つておいてくれ。下手に超光速レーザーを照射したら、ベガ星連合軍に嗅ぎ付けられる恐れがあるからね」

「確かに、今よりさらに秘密を守りやすくはなるでしょうけど、でもどうして発射台まで準備しているのですか？」

「万が一のときには、お前が脱出できるようにしておこうと思つてね」

「万が一って……」

「異種族や異民族による侵略もたびたびあることだしね。この研究所が維持できている間はまあ大丈夫だろうが、我々の国や社会だつて戦いに負けて壊滅しないとも限らんし、そうなつた場合、研究所だつて無事では済まないだろうね」

「そのときには、宇宙科学研究所の人たちを見捨てて逃げろ、とおっしゃるのですか？」

「結果としてそうなることもあるだろうな」

宇門があまりにも平然としていたので、大介は思わず突つかかつた。

「困っている人を助けるのは地球人の流儀じゃなかったんですか。僕だって、地球で生きていくことにしたのだから、流儀には従います」

「私も、グレンダイザーの性能を知って、フリード王と同じ結論を出したのだ。強力な兵器を欲しがる連中に侵略されて負けた場合、グレンダイザーが奪われて、さらなる侵略の道具にされてしまうかもしれない。今の地球人では使いこなすのは困難だろうが、利用されないという保障はない。そうなる位なら、かまわずグレンダイザーで地球を脱出し、安全なところまで逃げてくれた方が、我々にとつてもありがたい。侵略者のすべてがベガ星連合軍のように有無を言わさぬ虐殺をするとは限らんし、時間を稼げればまた我々が勝つことだってできるかもしれない——」が、グレンダイザーが敵の手に渡って使われることがあったら、残された勝ち目も無くなってしまうだろうからね。それに、他のどこかの星に迷惑をかける可能性だってある」

言いながら、宇門は、図を丸めて作業台の上に置いた。

「でも、今度逃げたら、また僕は、父さんとも、研究所の人たちとも、団兵衛おじさんたちとも別れて一人になってしまう……」

「強大な力を持つ者には、それだけの覚悟と責任が必要だということだろうね。辛いかもしれないが、無闇な力の行使を防ぐには、受け入れるしかないのではな
いかな」

「わかっています。でも……」

「我々もそれをわかった上で、お前に逃げてもらいたいと思っているのだ。だから気にすることは無い。お互い納得の上での行動なのだからね」

宇門は相変わらず穏やかな調子で大介に語りかけた。

「ランチャーのコントロールをグレンダイザーからできるようにしておきたい。手伝ってくれるね。次にこれが動くとしたら、お前が地球を脱出するときになるだろう。その時に我々が無事でいる保証は無いからね」